参考

「八幡史学館」資料　第6シリーズ　平成23年

番号+	表題	内容	実施日	講師	備考
	平成２３年度　八幡公民館　主催事業一覧				
	八幡史学館写真アルバム				
	八幡公民館主催事業「八幡史学館」第6シリーズ				
1	◎	第１回講座＝八幡のあけぼの	平成23年6月7日	山岸弘明	
		東日本大地震			
		①海底隆起で房総半島が誕生、②市原に縄文人と弥生人が登場、③日本武尊の東方進出と古東海道総の国			
		④国造、大型古墳群から国分寺の建立へ、⑤上総国分寺の建立、⑥古代官道と条里制遺跡			
		⑦「上総国府」と藤原孝標のむすめ「更級日記」、⑧八幡の地名となった「飯香岡八幡宮」、			
		⑨上総広常と千葉常胤を頼った源頼朝、抹消された広常、頼朝進行ルート、頼朝伝説、飯香岡社、吾妻鑑			
		⑩交通要衝地として発展、町場形成は戦国時代末期原氏、戦国時代の八幡、中世五輪塔は伊豆石			
		徳川秀忠正室お江の西国吉医光寺伝崇源院座像、姉崎・榊原家所蔵飯香岡八幡宮文書			
2	◎	第2回講座＝バス研修「千葉城と八幡ゆかりの生実白城、生実陣屋」みどころ			
		八幡は戦国時代、生実(小弓)城の支配下にあった	平成24年8月28日	山岸弘明	
		①戦国時代の八幡領主、②馬加千葉宗家創立に貢献した生実原氏、③真里谷武田氏の生実攻略と足利義明			
		④原氏の小弓城復帰、⑤２つのおゆみ城と生実陣屋、⑥近世生実藩の成立、			
		千葉宗家の本拠・千葉城、猪鼻城			
		①千葉城、猪鼻城にみる日本城郭の歩み、②房総往還　交通の要衝、要害の地に立地した猪鼻城			
		郷土史コーナー＝飯香岡八幡宮の社紋			

3	◎	第３回講座＝八幡・五所の海苔養殖の話	平成23年9月20日	佐倉東雄	
		八幡五所漁業協同組合解散記念碑、海苔業者建立こま犬、海苔養殖の歴史、近江屋甚兵衛、八幡の海苔養殖			
		昭和10年ころから竹ヒビ、海苔養殖の一年、海苔簾造り、海苔網、ヒビ立て、海苔取り、海苔干し			
		拾い海苔、海苔刻み、豊作祈願、浦掃除、海苔養殖諸道具			
		諏訪大社神恩奉謝			
4	◎	第4回バス研修＝千葉宗家の千葉城と原生実城を歩く	平成23年11月9日	山岸弘明	
		中世千葉氏居城跡に建つ天守風博物館			
		史実に基づかない町のシンボル、鎌倉幕府創建に貢献した千葉宗家本拠、謎の巨城、千葉館詰めの城か主郭、			
		千葉大学構内の外郭、県立中央博物館房総の歴史コーナー			
		原下総×上総、両総攻防境目の城　生実城と陣屋地			
		コース写真＝博物館と千葉城跡、外郭跡、県立博物館、重俊院、生実城と陣屋跡、千葉埋文、小弓城跡			
5	◎	プラス1＝千葉市埋蔵センターと足利義明の小弓城を歩く	平成23年11月15日	山岸弘明	
		①大覚山古墳、②埋蔵文化財センター、③小弓城、④5回以上落城した上総、下総争奪の逆目の城、⑤本丸相当の古城			
6		八幡公民館主催事業　いきいき八幡宿バス研修	平成23年9月30日	佐倉東雄	
		大野丈助の足跡を訪ねて　房総東線を敷いた大野丈助を語る			
	辰巳公民館主催事業「歴史散策」				
7		第１回講座＝お江と江戸と大名庭園	平成23年8月29日	山岸弘明	
		浅井3姉妹とお江ゆかりの城、柳営婦女伝・崇伝院浅井氏、江戸大名庭園の魅力はその華麗さにある			
8		第２回講座＝大河お江」将軍菩提寺と「江戸大名庭園」を歩く	平成23年9月15日	山岸弘明	
		お江と秀忠が秀忠が眠る芝増上寺、江戸大名庭園の魅力を満喫、芝離宮庭園			

平成23年度 八幡公民館 主催事業

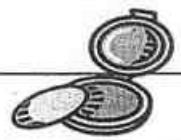
☆募集のお知らせは広報いちはら15日号に掲載
☆申し込みは18日朝8:30より窓口または電話(41－1984)にて受付開始
☆内容・期日は変更になる場合があります。

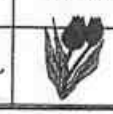
2011年

No.	事業名	募集人数	受付日	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1	ネクタイでエコ 全2回 9:30～11:30	一般成人 20名	3月18日	21(木)28(木) 川井満智子	思い出のネクタイ3本からA4書類が入るバッグができます。										
2	陶芸教室 全7回 13:30～16:00	一般成人 20名	3月18日	22(金) 根本正男	27(金) 根本正男	10(金) 根本正男	8(金)22(金) 根本正男	5(金)26(金) 根本正男	土をこね創作の楽しさを味わいましょう。						
3	子育て教室ららばい 前期全5回後期全5回 9:30～11:30	乳幼児と 保護者 20組	3月18日前 8月18日後	前期25(月) 親業 塩本京子	23日(月) 絵本のよさ、リトミック 山下光子 西尾咲恵子	20(月) 食育 上田悦子	25(月) 中嶋愛子 馬着直美	22(月) 3B体操、相談 森久美子荒井栄子	後期12(月) 幼児のおやつ 千葉友の会	24(月) 親業 塩本京子	21(月) 読み聞かせの良さ お話しボランティア	5(月) 折り紙3B体操 福田達一森久美子	23(月) リトミック 相談 西尾咲恵子 荒井栄子	母親同士の交流、そして 子育て相談もあります。	
4	さわやか歌の教室 春・秋 9:30～11:30	一般成人 40名	3月18日 9月18日	27(水) 両角八重子	懐かしい歌、季節の歌を楽しく歌いましょう。					19(水) 両角八重子					
5	野菜作り体験 全6回 9:00～11:00	家族や友人 15組	3月18日		7日(土) 仲村マチ子	11日(土) 仲村マチ子	9日(土) 仲村マチ子	6日(土) 仲村マチ子	3日(土) 仲村マチ子		5日(土) 仲村マチ子	潤井戸のふかふかの畑で新鮮野菜を作りましょう。			
6	お話し広場 20回 10:00～10:40	幼児と小学生 と親	当日会場 にて受付	2日(土) 16日(土) お話しボランティア	7日(土) お話しボランティア	4日(土) 18日(土) お話しボランティア	2日(土) 16日(土) お話しボランティア		3日(土) 17日(土) お話しボランティア	1日(土) 8日(土) お話しボランティア	5日(土) 19日(土) お話しボランティア	3日(土) 17日(土) お話しボランティア	21日(土) お話しボランティア	4日(土) 18日(土) お話しボランティア	3日(土) 17日(土) お話しボランティア
7	お元気体操 全3回 9:30～11:30	60歳以上 50名	4月18日		9日(月)市原市 地域支援包括センター	6日(月)市原市 地域支援包括センター	11日(月)市原市 地域支援包括センター	転倒予防、筋力アップをして若さを維持しましょう。							
8	ヨーガ教室 全5回 13:30～15:00	一般成人 25名	4月18日		11(水)25(水) 倉林房子	1(水)22(水) 倉林房子	13日(水) 倉林房子	ゆったりとした呼吸で心も体も整えましょう。							
9	楽々ウォーキング 夜間全2回 18:00～20:00	一般成人 30名	4月18日		13(金) 20(金) 体育協会	お仕事の帰りにウォーキングをしてみませんか。公民館前の運動公園で行います。									
10	親子パン作り教室 9:00～12:30	小学生と親 8組	4月18日		15日(日) 本間啓子	親子でいろいろな形のパンを作り、できたてのパンを味わいましょう。									
11	シニアスポーツ 9:30～11:30	60歳以上 30名	4月18日		28日(土) 浅野英美	みんなで楽しくゲームをして動きましょう。									
12	簡単料理教室 9:30～12:00	60歳以上 20名	4月18日		30日(月) 木村 みどり	体に優しく簡単に一人でできるお惣菜の作り方を習います。									
13	八幡史学館 全4回 9:30～11:30	一般成人 40名	5月18日			7日(火) 山岸弘明	19日(火) 山岸弘明		20日(火) 山岸弘明		9日(水) 山岸弘明 バス研修	八幡、市原地区の歴史を学びます。			
14	いきいき八幡塾 全4回 9:30～11:30	一般成人 40名	5月18日			15日(水) 防犯対策課	6日(水) 金融広報アドバイザー 川崎八重子	24日(水) 佐倉東雄	30日(金) 佐倉東雄 バス研修	防犯意識、消費者トラブルなどを学びま 佐倉先生の講義も楽しみです。					
15	薬膳料理 9:30～12:00	一般成人 20名	5月18日			23日(木) 木村みどり	食材の組み合わせでより健康になりましょう。								
16	パソコン入門 全3回 9:30～11:30	一般成人 20名	6月18日				21(木)28(木) 29(金) 前田 紘	パソコンが初めてという方を対象に基本の操作を学びます ※八幡中学校で行います。							
17	小学生自然観察会 8:30～16:00	小学生と 親20組	6月18日				24日(日) 鈴木優子 バス研修	夏休み、昭和の森の自然に触れましょう。							

平成23年度八幡公民館主催事業

No.	事業名	募集人数	受付日	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
18	パソコン中級 全2回 9:30～11:30	一般成人 20名	7月18日					2(火)4(木) 前田 紘	文字入力ができ、エクセルを学びたい方の講座です。 ※八幡小学校で行います。						
19	子どもチャレンジ 全2回 9:30～11:30	小学生 20名	7月18日					1(月)25(木) まちのせんせい 寺尾泰文	夏休み宿題のヒントになります。						
20	一日図書館員 9:00～12;00	小学4年生 ～6年生 6名	7月18日					8日(月) 公民館職員	公民館の仕事を体験するチャンスです。						
21	パソコン応用 夜間全3回 18:00～20:00	一般成人 15名	8月18日						2(金)9(金) 16(金) 前田紘	インターネットやデジカメ画像の編集などパソコンの活用法を学びます。**パソコン持参**					
22	女性セミナー 全5回 9:30～11:30	一般女性 30名	8月18日	女性としてよりよい生活向上を目指しましょう。9月5日だけ13:30からです					5日(月) 骨盤筋肉運動 秋葉寛子	3日(月) 人権セミナー 星 鏡子	28日(月) 料理 南堀篤子	26日(月) 正月の花 斉藤恭子	30日(月) メイク 美容アドバイザー		
23	初めての卓球教室 全4回 9:30～11:30	小学生 20名	8月18日	卓球の基本を学びましょう。					24日(土) 寺尾泰文	15(土)22(土) 寺尾泰文	12日(土) 寺尾泰文				
24	ガーデニング入門 全2回 13:30～15:30	一般成人 20名	8月18日	寄せ植えの基本を学びます。					28日(水) 房総園芸 牛尾安樹子	20日(木) 房総園芸 牛尾安樹子					
25	スナッグゴルフ 全4回 13:30～15:30	一般成人 30名	9月18日	ゴルフ未経験者から上級者まで楽しくプレイできます。						14(金)21(金) 28(金) スナッグゴルフ協会	4日(金) 予備日11日 スナッグゴルフ協会				
26	愛される人は 人を愛することができる 9:30～11:30	一般成人 50名	9月18日	児童養護施設平和園での生活を語っていただき、これから私たちに何ができるかを考えます。 （人間愛・家族愛）						3日(月) 元児童養護施設平和園 星 鏡子	親として、人として考えるよい機会になるでしょう。。				
27	万葉集を読む 9:30～11:30	一般成人 40名	10月18日	万葉集の時代の人たちの生活、思いが歌から伝わってきます。							27日(日) 宮本敬一				
28	正月料理 9:30～12:00	一般成人 20名	11月18日	お正月料理のレパートリーを増やしましょう。								16日(金) 南堀篤子			
29	書き初め教室 全2回 9:30～11:30	小学4年生 ～6年生 20名	11月18日	県書き初め展の課題を講師が丁寧に教えます。								23(金)24(土) 鍋島恵美子			
30	マイチョコ作り 9:30～12:00	小、中学生 20名	12月18日	手作りチョコでハートもゲット！									28日(土) 南堀篤子		
31	太巻き寿司 13:30～15:30	一般成人 20名	2月18日	房総の郷土料理太巻きで春を演出してみてはいかがですか。											1日(木) 上田悦子
32	福寿大学 13:30～15:30	シニア会員 100名	募集なし		5月16日(月) 金融広報アドバイザー 斉藤喜代美		7月10日(日) 労災病院 出前講座		9月26日(月) ふれあい演芸		11月7日(月) グランドゴルフ		1月16日(月) お楽しみ会		3月14日(水) バス研修





☆ 内容・期日は変更になる場合があります。

市教八公第5－6
平成23年2月吉日

山岸弘明様

市原市立八幡公民館
館長　正司 博徳

八幡公民館主催事業の講師について（依頼）

時下、益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。
平素、公民館事業に関し格別なるご協力を賜り厚くお礼申しあげます。
さて、当公民館主催事業「八幡史学館」を下記のとおり開催いたします。
ご多用の折、誠に恐縮ですが、事業の講師としてご指導を賜りたくよろしくお願いいたします。

記

1，依頼日時　平成23年6月7日（火）7月19日（火）9月20日（火）11月9日（水）
９：３０～１１：３０

2，場　所　八幡公民館　視聴覚室
１１月９日（水）はバス研修

3，内　容　八幡の歴史を伝える。

4，受講対象者　一般成人　４０名

5，その他　・受講者への配布資料や公民館で用意するものにつきましては、
事前にご連絡いただけましたら幸いです。

・当日は、印鑑のご用意をお願いいたします。

〒２９０－００６２
市原市八幡１０５０－１　担当　熊谷　嘉子
ＴＥＬ　０４３６－４１－１９８４
ＦＡＸ　０４３６－４３－７４５７

八幡史学館

第1回
6月7日

講師　山岸弘明　先生

八幡のあけぼの

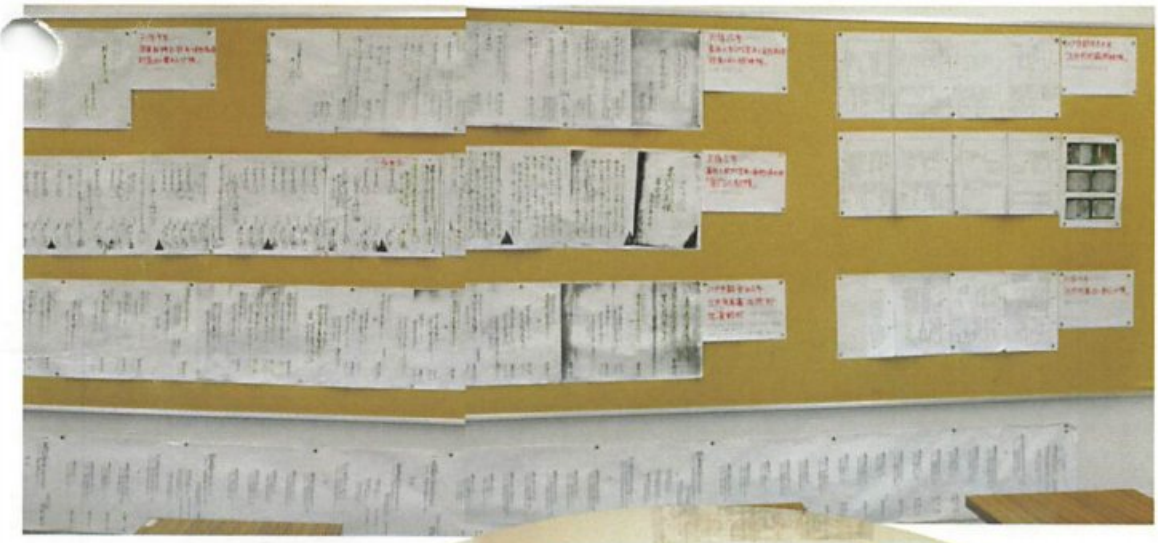
～古東海道と頼朝の上総通過～

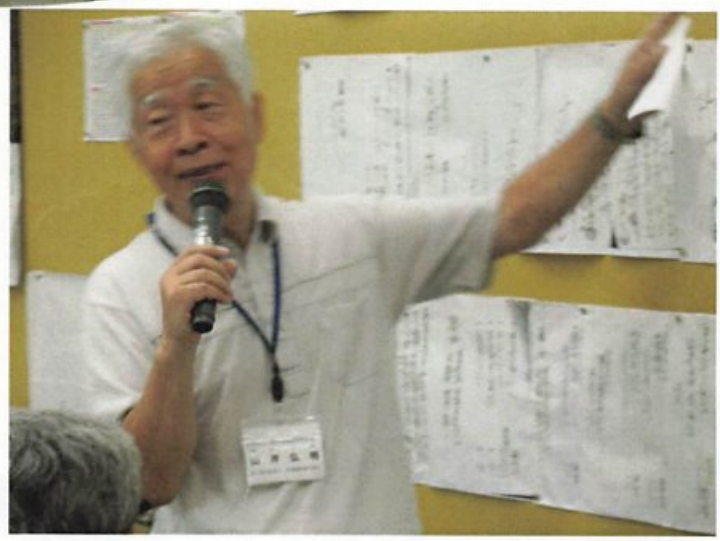
八幡の歴史は古東海道から始まった…

とても熱心な受講者の皆さん

大震災の話題にも言及

平成23年7月19日（水）　八幡史学館（第2回）





11/9

八幡史学館バス研修

講師山岸　弘明先生

千葉介常胤坐像

展望室より市街をのぞむ

いよいよ
巡見に出発！

千葉大構内（千葉猪鼻城外郭）
七天王塚

堀切

中央博物館・房総の地学「地震の話」

生実城跡

左下は空堀

講師今井　公子先生

生実重俊院

「千葉城」と八幡ゆかりの「生実城、生実陣屋」を歩く

平成２３－６－７

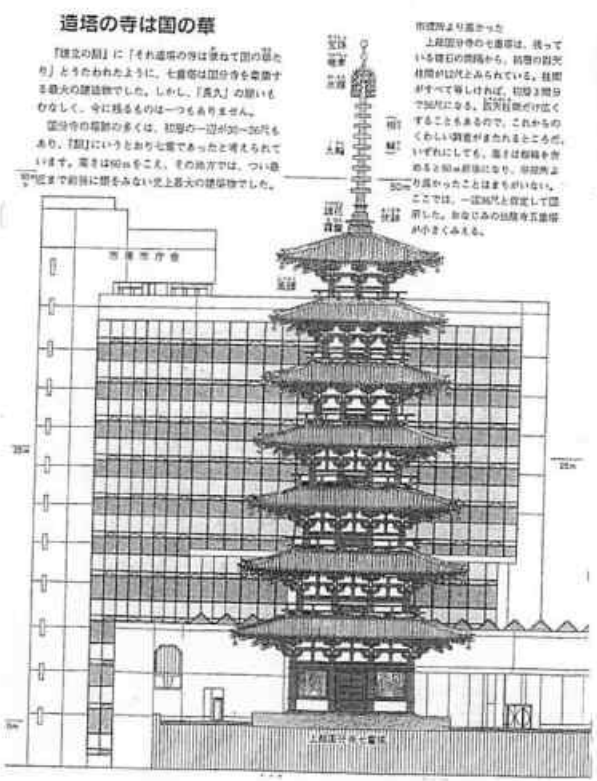
八幡公民館主催事業「八幡史学館」第１回講座

八幡のあけぼの

山岸弘明

ことしの「八幡史学館」スケジュール
テーマ＝八幡の郷土史を学ぶ
②７月19日（火曜日）９時30分から11時30分
八幡村、金杉浜新田名主文書にみる八幡の歴史
③９月20日（火曜日）９時30分から11時30分
八幡ののり養殖（ゲスト講師・佐倉東雄）
次回バス研修の見どころ
④11月９日（水曜日）バス研修（予定＝変更することがあります）
市立郷土博物館と千葉城跡
県立中央博物館歴史ゾーン
生実重俊院と生実陣屋、北小弓城跡
⑤別途、有志の方に千葉市埋蔵文化財調査センターと大覚寺山古墳、
小弓城足利義明御座所跡をご案内します

「駅鈴」が走り、「更級日記」の少女が輦車（れんしゃ）にゆられ、
源頼朝も駆け抜けた —— 八幡の歴史は古東海道から始まった



国分寺「尼女の話」

市原の古代道路（古東海道）

４月から八幡公民館など市内９つの公民館の管理と運営が指定管理者に移管されました。より身近な地域文化の殿堂としての活動が期待されます。私たちの郷土「八幡」の歴史文化をもっとみなさんに知ってほしい。そんな思いで始まった「八幡史学館」も５年目を迎えました。新体制の趣旨に沿うべくより充実した講座をめざしたいと考えています。
第１回のテーマは「八幡のあけぼの」、古東海道に始まる町の歴史にスポットをあてます。今年から最終回の現地巡見がバス研修になります。千葉城と小弓城は八幡とも深くかかわりました。千葉宗家、足利義明、原胤栄「戦いの歴史」を現地に辿ります。

↑千葉城跡 ↓中央博物館

↑金伏院 ↓森川家墓所

↑生実陣屋跡 ↓小弓城跡

千葉宗家、足利義明、原 胤栄 —— 八幡ゆかりの武将の足跡を巡る バス研修の見どころ

東京新聞

東北・関東大地震

M 8.8

国

東京新聞

宮城県警「死者は万単位」

東日本大震災

気象庁 M

福島原発 3号

コスモの爆発

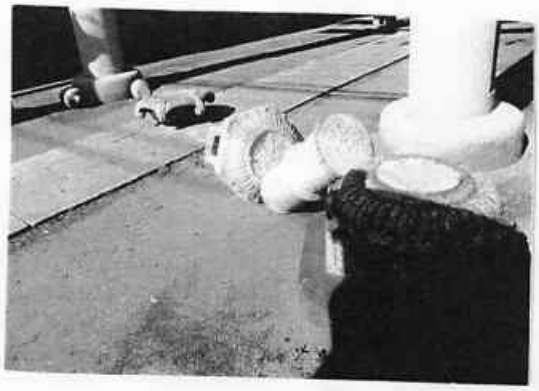
八幡公民館も緊急避難所に

プロローグは「東日本大地震」

①埋め立て工場地の液状化
②１５階マンションの恐怖

倒かい 3m

妙長寺



飯香岡八幡宮

灯籠が倒れ、民家の屋根瓦も落ちた

八幡のあけぼの

1） 海底隆起で房総半島が誕生

① 地球を覆うプレートは常に移動し、時に人々に深刻な被害をもたらす。
今年３月１１日の「東日本大地震」が私たちの生活に大きな影響を与えたことを忘れることはできない。

② 人類の生活基盤である大地は１００万年以上もの長い時間の中で、地球規模の気象変化や地殻変動をくりかえしながら形成されてきた。

③ 人類の発生よりずっと昔、市原周辺は海中で、およそ２０万年前噴火や海底隆起などの地殻変動で陸地になった。当時東京湾も陸地で房総半島と三浦半島は陸繋ぎであったが、およそ２万年前、東京湾が陥没しほぼ現在の地形が確定した。

④ 当時、八幡の海岸線は市原、菊間台地で、八幡宿はまだ海中、五所から八幡にかけての平野部が形成されるのはまだまだ先のことである。

2）市原に縄文人と弥生人が登場

① 市原に人類が登場するのはおよそ３万年前で、草刈、根田遺跡などから旧石器が出土している。人々ははじめほら穴や岩影に住み、草や木の実を取り、貝を拾い、石を割って作った石器で魚や鳥、鹿、猪を狩猟して生活した。

② １万年前ころ土地に定着し、たて穴住居を築きムラが生まれた。縄目の文様を付けた土器が登場、大型貝塚が出現する。

＊市教育委員会「歴史の旅人」歴史年表

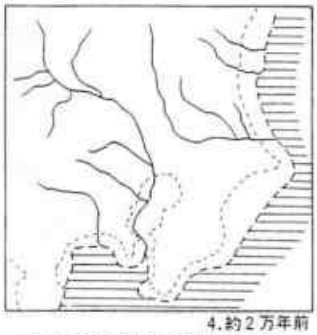
紀元前３００００年　草刈、根田遺跡などから旧石器出土
〃　　１００００年　南原遺跡から市内最古土器出土
〃　　５０００年　　天神台遺跡に市内最古の貝塚
〃　　３０００年　　能満分区、草刈貝塚など市内北部に大貝塚
〃　　１０００年　　西広貝塚できる

③ 紀元前３００　年から紀元３００　年が弥生時代、大陸から九州に伝わった稲作が全国に広がる。鉄器や青銅器も伝来、市原でも小銅鐸が出土する。
市原周辺の遺跡からもムラの生活や、人口が増加している様子を伺うことができる。

＊八幡（市原地区）周辺の主な遺跡

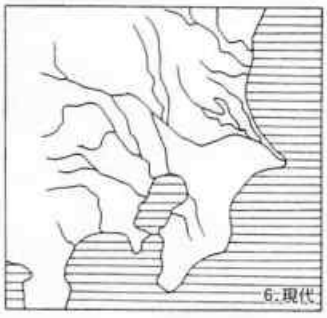
旧石器時代＝草刈遺跡、根田遺跡
縄文時代＝能満遺跡、山倉遺跡、西広遺跡、祇園原貝塚
弥生時代＝川焼台遺跡、菊間遺跡、三島台遺跡、天神台遺跡
　　菊間手永貝塚（菊間小学校に展示）、実信貝塚

1.約20万年前
まだ人がいなかったころ



4.約２万年前
先土器時代の遺跡が各地に広がるころ

5.約6千年前



6.現代

縄文時代前期海進最盛期のころ

↑貝塚の分布
海岸線を示す

↑市の埋文センター

3）日本武尊の東方進出と東海道「総の国」

① 3、4世紀ころ近畿地方に誕生したヤマト国家は次第に勢力を拡大し、東海地方から東方に進出する。「日本武尊（やまとたけるのみこと）伝説」は、相模から走水の海を渡るとき嵐に遭遇し、弟橘姫（おとたちばなひめ）が入水してミコトの危機を救ったこと、鹿野山の賊徒を平定し、弟橘姫の遺体を護りながら上総を縦断したことなどが伝承されている。

＊大和国家＝天皇の先祖が奈良を中心に作り上げた古代国家で、６４５年の「大化の改新」までをいう

＊日本武尊＝４世紀大和国家創設期の皇子で英雄。父景行天皇の命を受けて大和政権にさからう各地の豪族を征服、死後白鳥となったとされる

＊君さらず、袖しが浦に立つ波の、その面影をみるぞ悲しき
木更津、袖ヶ浦（市原を含む内湾一帯）地名の起こり

② 飯香岡社縁起による「飯香岡」地名伝説
飯香岡の地ははじめ「御影山」といい、「六所御影神社」が鎮座した。
往古、日本武尊が東征の途中着陣し、村人たちが差し上げた酒飯に「この飯の香りしごくよろし」と宣（のたま）われ、「飯香岡」の地名が定まった。

③ ３世紀ころ「総の国」が誕生
神武天皇の御代、天富命（あめのとみのみこと）が東方に移住した時、房総半島で麻や穀物を植えたところよく実ったので「総の国」と名付けた。

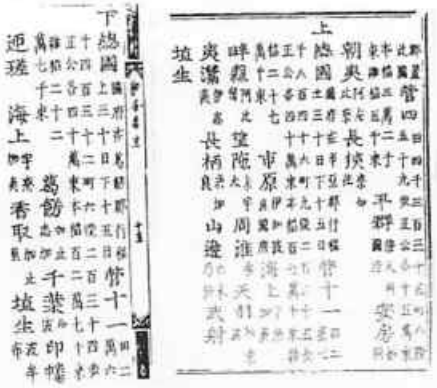
＊８世紀はじめ、上総国、下総国に分かれ、奈良時代に上総から安房国が分離した

＊上、下は都に近い順、古東海道を半島づたいに数えた

4）国造、大型古墳群から国分寺の建立へ

① 菊間国造による地方政治
４世紀、１３代成務天皇の御代、大和朝廷の地方官（知事）「国造（くにのみやつこ）」が置かれた。市原地区は久々麻（菊間）国造で、姉崎は上海上（かみつうなかみ）国造であった。国造は大和朝廷に従属して地方政治を行なった。

② 豪族たちの墓、古墳
古墳時代になると村田川や養老川の中、下流域に豪族たちが大規模な古墳を築いた。
菊間古墳群は菊間国造一族の墓と考えられるが大半は未発掘、一部で武具やかざりな



どの副葬品が出土している。

＊八幡（市原地区）周辺の主な古墳
菊間古墳群＝新皇塚古墳、姫宮古墳、東関山古墳、菊間天神山古墳
川焼台遺跡、杉山古墳、稲荷台古墳群、神門古墳群

③　「王賜銘鉄剣」の発見
国分寺台土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財事前調査で、稲荷台１号古墳から「王賜銘鉄剣」が発見された。日本最古の銘文入り、
表面は「王賜□□敬安」（王□□を賜う、敬んで安ぜよ）、裏面は「此廷刀□□□」（この廷刀は…）と判読された。王賜は畿内の王からの下賜刀と想定されている。
大和朝廷とのかかわりを示すものとして注目されている。

＊稲荷台１号墳は５世紀中ごろの直径約27mの２段円墳で、木棺２基、短甲、剣などの武具ほかが出土した。

５）上総国分寺の建立

①　仏教の伝来と国分寺の創建
６世紀日本に伝来した仏教は７世紀後半には仏教による管理統制と仏教によって国を護るという「国家仏教」へと進む。天平１３年聖武天皇は「国分寺建立の詔（みことのり）」を発し、全国６０余国に国分寺と国分尼寺を創建を命じた。

＊国分寺以前の八幡（市原地区）周辺の寺院
光善寺廃寺（７世紀後半）
菊間廃寺（８世紀前半＝菊間国造の氏寺）

＊上総国分寺、国分尼寺
寺域は国分寺が１４万㎡、尼寺１２万㎡におよぶ全国最大級の国立寺院。国分寺は飛鳥の大官大寺式伽藍で、金堂、講堂、七重の塔、中門、南大門など、尼寺も金堂、講堂、回廊、鐘楼などの中心伽藍や大衆院、修理院などが発掘調査で確認されている。
尼寺の中門、回廊を当時の工法で復元、尼寺展示館では映像や復元模型で国分寺建立の時代背景や特色などを紹介している

稲荷台古墳↑と王賜銘鉄剣

国分尼寺↑と校倉

←
国分寺七重塔跡

＊古代の里≒540m

6）古代官道と条里制遺跡

① 道の成立は獣（けもの）道との共用から始まるという。

② 正式な道は大和朝廷が国家統一を進めた７世紀ころから。
日本武尊が通った海の道が「古東海道」で、相模から上総、下総をへて常陸に通じた。
中央文化の移入窓口として早くから発展した。８世紀には東海道など７道が整備され、３０里（16km）ごとに駅家が置かれ、駅鈴を所持した駅使が通行した。

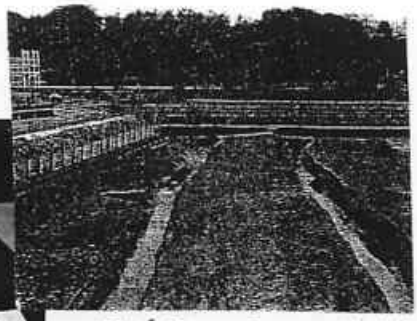
③ 鎌倉街道と古代道路跡を結ぶ古代官道
袖ヶ浦市から市原市の養老川近くまで「鎌倉街道」が走っている。
また、市原市の国分寺台地の山倉ダム西側面から郡本にかけてと市原の阿須波神社から五所小学校までの区間で、古代道路が発見された。鎌倉街道は中世に呼び名を変えた古代道で元は一体であった。古代官道は国府推定地を中心にゆったりと楕円を描きながら海岸部に及んでいることがわかる。
＊古代官道は国府と国府を結ぶ古代の国道。市原の推定道＝別図参照

④ 条里制遺跡
古代官道の途中、市原台地から五所への平地は「条里制遺跡」で、その一画を古代官道が横断している。
＊条里制は「大化の改新」から８世紀ごろまで行われた古代の地割り制度。土地を６町（654m）ごとに区切って里、東西に並べて条とした。里を６×６の３６等分して坪（１町歩）、さらに１０等分して１段（反）。土地を碁盤目に区画し、何条何里何坪というふうに所在地を示した

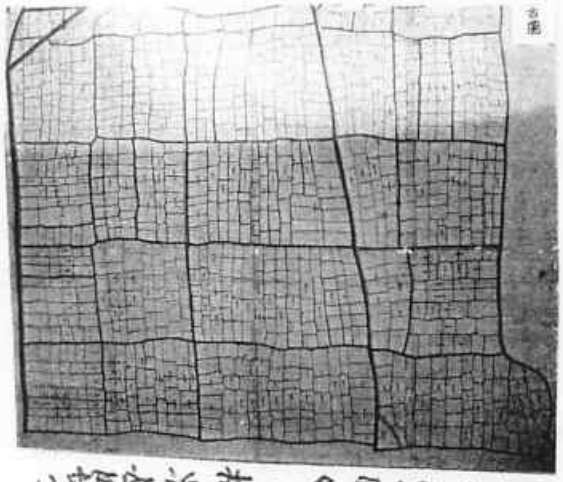
⑤ 五所四反田遺跡（五所小学校＝条里制遺跡の一部）
古東海道とみられる古代道路や側溝、５世紀の木製農具、道具、家屋木材が多量に発見された。周辺部に町場村落の存在を示している。
＊埋蔵文化財調査センターに保管、一部が展示公開されている

⑥ 五所で海岸線に出て以降の道順は不詳だが、現在のバス通り旧道に沿って千葉方向にすすんだものといえる。
＊五所港の可能性もある

出土した農耕具

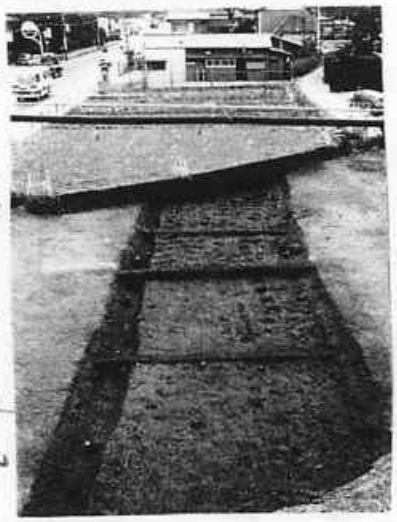


五所四反田遺跡



八幡宮所蔵の条里制古図

→古代道路の発掘



条里制遺跡

条里制地図

7）「上総国府」と菅原孝標のむすめ「更級日記」

① 国府＝大化の改新後の律令制で１国ごとにおかれた国司の役所＝国衙（こくが）の所在地で府中ともいう。
国司＝朝廷が諸国に派遣した地方官で守（かみ）、介（すけ）、掾（じょう）、目（さかん）の４等官以下があった。

＊９世紀上総、上野、常陸の３か国は「大国」として「親王任国」となった。正四位下相当の勅任官で、太守と呼ばれた

② 上総国府の所在地には諸説がある。
江戸時代から、能満説、郡本説、市原説、惣社説、村上説、郡本市原合同説、国府変遷説などがあるがいずれも定説に至っていない

③ 市原市市原（旧市原町）は、明治30年、市原村と能満、門前、郡本、西野谷、藤井、山田橋、西広、惣社、根田、加茂の10か村が合併したもので、村上以外の国府所在地説のすべてを網羅している。市原郷、市原荘、市原郡、市原市にみられる地名「市原」の発祥地＝中心地であったことを地名が物語っている。
国府所在地の詳細は不確定だが、現在の市原地区のいずれかに置かれたことは確実といえる。

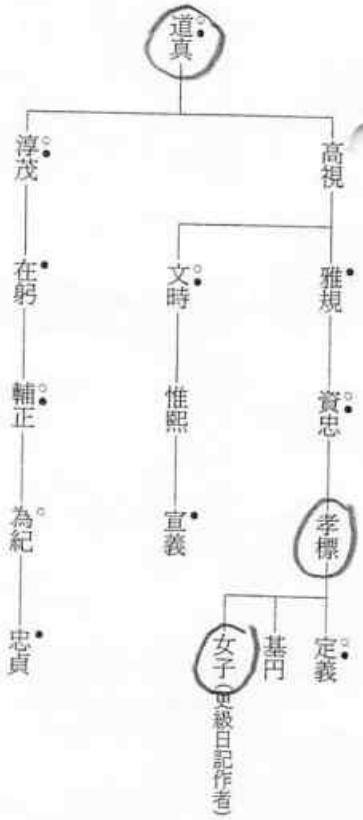
＊国分寺と尼寺は国分寺地区に所属するが、天平時代、聖武天皇の勅願によって国ごとに建立されたもので国府に付属した

④ 菅原孝標のむすめの「更級日記」
菅原孝標は天神様で知られる菅原道真４代の後胤、代々大学頭、文章博士を歴任する名門の生まれだが１地方官で終わる。そのむすめ（名前不詳）が、寛仁４年（1021）３年間の上総介（県知事）の任務を終えて京都へ帰る父たちと一緒に東海道を旅する様子を描く。

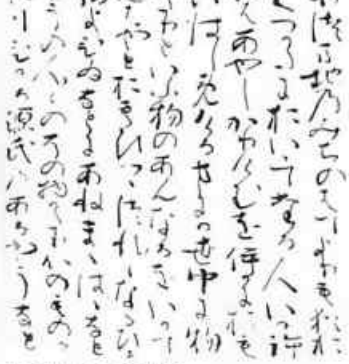
＊「あづまぢの道のはてよりも、なお奥つ方に生ひ出たるひと、いかばかりかはあやしかりけむを……」の書き出しで始まる。
１段目後半に「九月三日かどでして、いまたちといふ所にうつる」いまたちは今館（仮の官舎）で、飯香岡社あたりとする説は説得力がある

孝標をすのすけん車

薬師如来像
（神護寺）



伝いかだ跡



『更級日記』の写本（部分）
菅原定家筆の写本は日本最古と伝わる（宮内庁蔵）

菅原家系図

一　上洛の旅

(一)東国の生立ち、あこがれの門出

あづま路の道のはてよりも、なほ奥つかたに生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふもののあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなるひるま、よひゐなどに、姉、継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、わが思ふままに、そらにいかでかおぼえ語らむ。いみじく心もとなきままに、等身に薬師仏を造りて、手洗ひなどして、人まにみそかに入りつつ、「京にとくあげたまひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへ」と、身をすてて額をつき祈り申すほどに、十三になる年、のぼらむとて、九月三日かどでして、いまたちといふ所にうつる。

年ごろあそび馴れつる所を、あらはにこぼちちらして、立ちさわぎて、日の入りぎはの、いとすごく霧りわたりたるに、車にのるとて、うち見やりたれば、人まには参りつつ額をつきし薬師仏の立ちたまへるを、見すてたてまつる悲しくて、人知れずうち泣かれぬ。

(二)住みなれた上総を後に、雨中、下総に入る

かどでしたる所は、めぐりなどもなくて、かりそめのかや屋の、蔀などもなし。簾かけ、幕などひきたり。南ははるかに野のかた見やらる。東西は海近くていとおもしろし。夕霧たちわたりて、いみじうをかしければ、朝いなどもせず、かたがた見つつ、ここをたちなむこともあはれに悲しきに、同じ月の十五日、雨かきくらしふるに、境を出でて、下総の国のいかだといふ所にとまりぬ。庵なども浮きぬばかりに雨ふりなどすれば、おそろしくていもねられず。野中に、丘だちたる所に、ただ木ぞ三つ立てる。その日は雨にぬれたる物どもほし、国にたちおくれたる人々待つとて、そこに日を暮らしつ。

更級日記

「更級日記」

(一)「東路の道のはてなる常陸……」などといわれるけれど、その常陸よりも、もっと奥深い土地で育った人、そんな私はどんなにかみすぼらしく鄙びてもいたろうに、どういう料簡を起こしたものか、「世間には物語というものがあるそうな。なんとかしてそれを読みたいものだ」と、しきりに思うようになった。そんな折から、所在もなく退屈な昼間とか、宵の団欒などに、姉、継母などの大人たちが、あの物語だの、この物語だの、はては光源氏の暮らしぶりなどを、ところどころ話すのを聞いていると、私の物語へのあこがれはつのるいっぽうだった。けれども、大人たちだって、その一部始終をそらんじて、私の心ゆくまで、どうして話してくれたりしようか。私はもう、あまりのもどかしさに、薬師如来の等身像を造ってもらい、手を洗いきよめたりして、誰も見ていない隙にこっそりとその仏間にこもっては、「一刻も早く上京させ、都にはたくさんあるとか申しますその物語を、ありったけお見せくださいませ」と、一心不乱にぬかずいてお祈り申し上げるのだった。とこうするうち、それは十三になる年だった、当時、上総の介だった父の任期が無事に終わり、いよいよ上京することとなり、九月三日、ひとまず門出をして、「いまたち」という所に移った。

ながの年月、遊びなじんできた部屋を、外からまる見えになるほど、御簾、几帳などを乱雑に取りはずし、人々はその荷造りに大わらわである。やがて日も入りぎわになり、あたり一面にたいそうひどく霧の立ちこめるころ、車に乗ろうとしてわが家の方を眺めてみると、今まで人のいない折には足しげくお参りして礼拝した、あの薬師如来がつくねんと立っておいでになる。それをお見捨て申し上げて旅立つのが悲しくて、私は人知れず泣かずにはいられなかった。

(二)かりに引き移ったこの「いまたち」の家は、周囲の垣根などもなく、ほんの一時しのぎの茅屋で蔀戸もない。わずかに簾をかけ、幕などを引きめぐらしてある。南ははるかに遠く野末まで視界がひらけている。東と西は海が近く迫っていて、非常に眺めがよい。あたり一帯に夕霧がかかって、まことに趣深い景色なので、翌朝は朝寝などもせず、あちらこちらを飽かず眺めた。こんなすばらしい所を立ち去ってしまうのも、なごり惜しく悲しくてならなかったが、同じ月の十五日、空も暗くなるほど雨のひどく降る中を、国ざかいを越えて下総にはいり、その夜は「いかだ」という所に泊まった。粗末な仮屋などは浮いてしまいそうに、ひどいどしゃ降りなので、恐ろしくてまどろむこともできなかった。夜が明けてみると、野中の小高い丘のような所に、ほんの三本だけ木が生えていた。その日は雨に濡れた物などを干し、一足遅れて国を発った人々を待ち受けるため、そこで一日過ごした。

8）八幡の地名の由来となった「飯香岡八幡宮」

① 社伝は白鳳４年（７世紀後半）「一国一社の八幡宮」として天武天皇の勅使、桜町中納言が勧請、天平年間（８世紀中ごろ）「全国放生の地に勧請された国府八幡宮」の２説を上げる。

② 主要変遷（推定）

＊第１期（古代）＝古代国府近くの「産土神（うぶすなかみ）」として誕生か

＊第２期（平安後期ころ）＝石清水八幡宮市原別宮時代

＊第３期（鎌倉、室町時代）＝市原八幡宮時代

第４期（室町中期以降）＝飯香岡八幡宮時代

注意＝＊印の旧地は不明、「飯香岡」への移転は現在の建物が建立された室町中期と考えられているが鎌倉時代に逆上る可能性もある

③ 源氏一門の信仰が厚く、源頼朝が神領を寄せ、足利義満がみこし４基、徳川歴代将軍も１５０石の朱印地を寄進したとされる。

＊義満寄進みこしは現存、大学専門教授の鑑定で３基は江戸時代大幅に補修されていたが、若宮はほぼ当時のまま現存していることが判明した。重要文化財クラスの逸品という。１の宮の義満銘墨書は戦後の後筆

9）上総広常と千葉常胤を頼った源頼朝の上総進行

① 治承４年（１１８０）８月１７日、源頼朝は源氏再興の兵を上げるが、石橋山の戦いに敗れ、わずかな手兵と安房に逃れた。安房は頼朝をバックアップする三浦一族拠点の１つ。鋸南町の猟（竜）島に上陸すると安西景益館に滞在したあと、９月１３日鎌倉への行軍を開始する。東国最大の勢力をかかえ、源氏ともかかわりのある上総介平広常と千葉介常胤を頼るが、広常は一族や上総の豪族をまとめるのに手間取り参陣が遅れる。頼朝の市原通過は１５日ころ、上総国府を攻略、下総を目指した。広常も１９日墨田川べりで２万の兵を率いて合流、この時、頼朝は遅延をしかったとされる。勢いをえた頼朝ははせ参じる軍勢を増やしながら武蔵から鎌倉に入り、のち「鎌倉幕府」を開いた。

＊頼朝を応援した東国武士たちは自ら土地を開墾して勢力を広げたが、一方で平家の中央政権の専横に反感を募らせていた。平氏も頼朝に味方した反中央の戦いでもあった

② 正史から抹消された上総広常

鎌倉幕府の正史「吾妻鏡」は上総通過の記録を欠落する。幕府創設に貢献した上総広常が３年後、頼朝の勘気にふれ暗殺されたことで、正史から抹消されたとみられる。

＊世にある広常の不評は「吾妻鏡」の脚色が多い。上総一族の協力なくては上総国府の攻略はもとより、鎌倉幕府は成立していない

③ 市原の頼朝進行ルート

頼朝が安房から上総、下総への進軍経路の特定は難しい。各地に残る伝説も状況証拠の１つ。これらを繋げるとおよその北上ルートが想像できる。主力隊はほぼ古代官道にそって進軍、市原へは袖ヶ浦公園、御所覧塚、立野をへて、上総国府（場所不詳）

飯香岡八幡宮

室町中期みこし

足利義満

を通過、市原から五所、八幡をへて市川の下総国府をめざしたと考えられる。
＊上総国府通過（攻略＝大きな争いにはなっていない）およそ３００騎とされる

④　市原市の主な頼朝伝説（飯香岡八幡社は後出）
＊御所覧塚＝鎌倉街道、頼朝が塚を築いて閲兵
＊万騎坂＝頼朝軍１万騎が通った坂
＊立野切替邸＝国府攻略を練る。裏山の竹で旗竿に切り替えた
＊立野安房之洲神社＝山見塚から国府の動静を窺う
＊姉崎神社＝武運長久祈願、馬揃え
＊島野島穴神社＝戦勝祈願、頼朝が神田を寄進
＊五井大宮神社＝戦勝祈願
＊君塚白幡神社＝塚上から千葉一族軍の到着を見て喜んだのが喜見塚の地名に

⑤　飯香岡八幡宮での戦勝祈願
戦勝祈願に立ち寄った可能性は極めて高く、否定する根拠はない。
ただし、社伝は脚色されることが多くすべてを史実ととらえることはできない。
＊飯香岡八幡宮由緒本記（市川本店写本）
大将頼朝卿、土肥次郎（以下省略）主従七騎にて上総国に至り八幡郷飯香岡に到着す。しかるに当社、八幡太神は累代源家の守護神に御座ましまし申して頼朝卿深く御信仰あらせられ御祈誓その趣、願文にいわく。頼朝源家の将種たりといえどもいまだ天運開かず、太神の加護こいねがい頼む。早速凱陣においては八荘十一郡の内において御供田として寄進奉るものなりと。願文神前へ差し上げ御祈誓あられられ早速御冥助、神明不測の霊験これあり、たちまち当社の境内松柏生い茂り、樹木の空間より旗馬印おびただしき数万の軍勢海中より現れみたり、このとき平家の軍兵頼朝卿の御跡を慕い奉りて数万軍兵船当浦に押し寄せ来たり、船中より磯辺はるかに見渡せば八幡宮の境内山影より数万の大軍旗馬印風にひるがえし、その勢いいさぎよく見えしかば平家の軍兵これを見て大いに周章異にし、軍船一時に引きのく、よりて源家の危機速やかに逃れたまうはこれすなわち八幡太神宮の加護、人力の及ばざるところなり。これにより諸兵士感拝し奉り、頼朝卿大いに力を得、喜悦斜めならず、当社に御止宿あらせられすなわち足立藤九郎盛長をもって千葉介常胤方へ軍勢催促の使節に及び早速千葉介五千余騎にて着到す。（中略）追々馳せ集まり、それより武州隅田川の辺りに御陣備え立たせられ、その地まで神主、社家供奉す。
＊上総国市原庄八幡郷飯香岡八幡宮領、同国八庄十一郡の内村々の歩畝分
市原郡市原庄八幡郷の内十二町、菊麻（間）郷の内八町、市原村の内五町、府中（能満）の内六町、郡元（本）の内七町、村上村の内六町、総社村の内五町、山木村の内五町、大厩村の内五町、神崎村の内五町（ほかを省略）
＊上総国市原の庄八幡郷八幡宮、冥助により早速凱陣一天掌握、よってここに報賽として宮殿を新造立せしむ。
＊さかさいちょう
社伝によれば、鎌倉進行の途中、本宮に参詣していちょう樹を逆さに植え「もし活着せば大願成就せん」と源氏再興を祈願した。

←→鎌倉街道
←御所覧塚

←→万騎坂
←切替邸

飯香岡八幡宮道さいちょう

頼朝、洲崎宮に神田を寄進す

頼朝、上総に向ふ

東胤頼・千葉成胤、上総目代を討ち取る

成胤、千田親政を虜にす

武田信義・一族忠頼ら信濃を平定して歸る

頼朝下総に向ひ、千葉一族國府に參會す

常胤、毛利頼隆を頼朝の家人に進む

廣常參上、頼朝その遲參を怒る

十一日　辛酉　神田を洲崎宮に寄せたてまつらしめたまふ。御寄進狀、今日社頭に送り進ぜらると云々。

十三日　壬戌　安房國を出でて上總國に赴かしめたまふ。從ふところの精兵三百餘騎に及ぶ。しかるに廣常、軍士等を聚むるの間、なほ遲參すと云々。今日、千葉介常胤、子息親類を相具して源家に參らんと欲す。ここに東六郎大夫胤頼、父に談じて云はく、當國の目代は平家の方人なり。われらが一族、ことごとく境を出でて源家に參らば、定めて兇害を插むべし。まづこれを誅すべきかと云々。常胤、早く行き向ひて追討すべきの旨下知を加ふ。よつて胤頼ならびに甥小太郎成胤、郎從等を相具して、かの所を覗ひ襲ふ。目代もとより有勢の者なり。數十許輩をして防戰せしむ。時に北風しきりに扇ぐの間、成胤僕從等を館の後に廻らし、火を放たしむ。家屋燒亡す。目代火難を遁れんがために、すでに防戰を忘る。この間に胤頼その首を獲たり。

十四日　癸亥　下總國千田庄の領家、判官代親政は、刑部卿忠盛朝臣の聟なり。平相國禪閤にその志を通ずるの間、目代誅せらるるの由を聞き、軍兵を率して常胤を襲はんと欲す。これによつて常胤が孫子小太郎成胤、相戰ひて、つひに親政を生虜にしをはんぬ。

十五日　甲子　武田太郎信義・一條次郎忠頼已下、信濃國中の凶徒を討ち得て、去夜甲斐國に歸り、逸見山に宿す。しかるに今日、北條殿その所に到著したまひ、仰せの趣を客等に示さると云々。

十七日　丙寅　廣常の參入を待たず、下總國に向はしめたまふ。千葉介常胤は、子息太郎胤正・次郎師常相馬と號す・三郎胤盛武石・四郎胤信大須賀・五郎胤道國分・六郎大夫胤頼東・嫡孫小太郎成胤等を相具して、下總の國府に參會す。從軍三百餘騎に及ぶなり。常胤、まづ囚人千田判官代親政を召覽せしめ、次に駄餉を獻ず。武衛、常胤を座右に招かしめたまひ、すべからく司馬をもつて父となすべきの由仰せらると云々。常胤一の弱冠を相伴ひ、御前に進めて云はく、これをもつて用ゐらるべし。今日の御贈物なりと云々。これ陸奥六郎義隆が男、毛利冠者頼隆と號するなり。紺村濃の鎧直垂を著し、小具足を加へ、常胤の傍に跪く。その氣色を見たまふに、もつとも源氏の胤子といひつべし。よつてこれを感じ、たちまち常胤の座上に請じたまふ。父義隆は、去ぬる平治元年十二月、天台山龍華越において、故左典厩の幸爲に命を弃つ。時に頼隆、產生の後わづかに五十餘日なり。しかるに件の緣坐に處せられ、永暦元年二月、常胤に仰せて下總國に配せらると云々。

十九日　戊辰　上總權介廣常、當國周東・周西・伊南・伊北・匝南・匝北の輩等を催し具し、二萬騎を率して隅田河の邊に參上す。武衛すこぶる彼が遲參を嗔りて、あへてもつて許容の氣なし。廣常ひそかに以爲へらく、當時のごときは、率土皆平相國禪閤の管領にあらずといふことなし。ここに武衛、流人として輙く義兵を擧げらるるの間、その形勢高喚の相なくば、直にこれを討ち取りて、平家に獻ずべしてへれば、よつて内には二心の存念を插むといへども、外には歸伏の儀を備へて參ず。さればこの數萬の合力を得て、感悅せらるべきかの由、思ひ儲くるのところ、遲參を咎めらるるの氣色あり。ほとほと人主の體に叶ふなり。これによつて、たちまちに害心を變じて和順したてまつると云々。

吾妻鏡

竜島の「頼朝上陸地」碑

１０）交通要衝地として発展 —— 町場形成は戦国時代末期の原氏が築く拡大

① 八幡ははじめ海であったが、次第に養老川から流出した多量の土砂による三角州（陸地）が形成されていった。八幡宿周辺の砂浜、海岸沿い道の形成年代は未詳だが、かなり早い時期から人々が通行していたのではないか。

② 八幡の町場形成は室町時代後期から安土桃山時代と考えられている。しかし古代官道の道筋でもあり、大幅に逆上る可能性がある。

＊八幡地区の中世区分（桜井＝市原市歴史と文化財シリーズ）
Ⅰ期（１２世紀第３四半期から１３世紀）＝市原別宮の経営拠点としての館の可能性
Ⅱ期（１４世紀初頭から１５正規第１四半期）＝市原八幡宮の荘園管理の拠点として
Ⅲ期（１５世紀第２四半期から１６世紀第３四半期）＝門前町としての町場形成
Ⅳ期（１６世紀第４四半期から）＝原氏による近世化の画期

＊「更級日記」いまたちの候補地、足利義明御座所伝説（古城址除地記録）
発掘調査結果、中小型五輪塔など

③ 御墓堂（満徳寺境外墓地）遺跡発掘調査（八幡宿東口ロータリー）
一帯は湿地帯で中世の水田や道路、大溝などを検出、溝には多数の陶磁器類が流れ込み、付近に集落があったことを裏付けた。

＊市原条里制遺跡発掘調査（菊間、並木、廻道北地区など＝スポレク横）
近代まで村田川に接した低湿地帯、条里制外で特記すべき出土品はなかった。

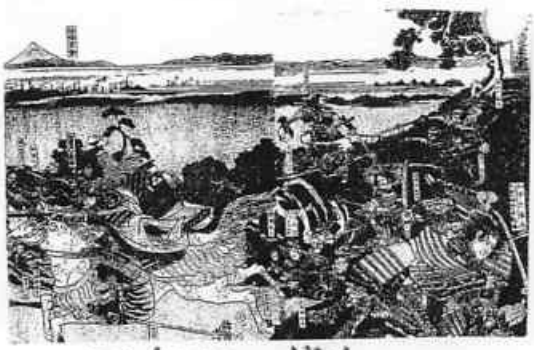
④ 八幡地区の社寺の創建伝承
飯香岡八幡宮　　伝白鳳年間創建、室町中期移転（以前の可能性もある）
霊応寺（廃寺）　創建不詳、室町中期飯香岡社とともに移転カ
満徳寺（真言宗）〃　　〃
無量寺（浄土宗）伝白鳳年間創建、天文２年現在地移転
称念寺（　〃　）伝天正３年創建、荒廃寺に創建
妙長寺（日蓮宗）伝正長元年創建
円頓寺（　〃　）伝文明元年創建

⑤ 中世五輪塔（伊豆石）
八幡の各寺院には多くの中世五輪塔が現存している。多くは自存しない伊豆石で船で運ばれた。年代は室町はじめから安土桃山時代、僧侶や武士、有力民衆とみられる。

＊無量寺の中世石造物について（桜井＝市原市歴史と文化財シリーズ第９輯）ほか
御墓堂大型五輪塔（２基＝１５世紀初頭から前葉）
無量寺中型五輪塔（３基＝１５世紀第２四半期から１６世紀前葉）
小型五輪塔、宝きょう印塔（部位１００点余＝１５世紀中ごろから１６世紀終わり）

⑥ 八幡は上総の表玄関、戦略的にも重要であり、古くから交通要衝であったことは疑いないだろう。国境の境川を控え、自然発生的に町場が形成されたといえる。

⑦ 戦国時代の八幡は上総、下総の国境、真里谷の武田氏と小弓の千葉、原氏の争奪場で永正１４年（1517）小弓公方足利義明が領有、天文７年（1538）義明が国府台の戦いで敗死すると戦国大名・小田原後北条氏についた千葉氏原胤栄上総経営の拠点となった。原氏は天正４年八幡宮造営にあたり諸郷勧進を指示し、８年に八幡郷の「守護不入」「新市」を認めている。原氏の庇護の元、八幡は門前町、宿場町として発展、原氏は天正１８年豊臣秀吉による「小田原攻略」で北条氏、千葉氏とともに滅亡するが徳川家康の「江戸開府」以後、市原最大の湊町、海陸路の要衝地として発展することになる。


国府台の戦い

伝足義明の墓

称念寺の五輪塔群

郷土史スポット「大河ドラマ・江」西国吉医光寺「伝崇源院座像」

① ことしの大河ドラマ「江＊姫たちの戦国」が人気を呼んでいる。
江は織田信長の妹市と浅井長政３女として天正元年小谷城で誕生。その年小谷城落城で父を失い、北の庄城落城で母と養父を失う。１２才の時佐治一成、のち柴田勝秀勝と再婚するが死別、３度目の夫が徳川家康の嫡子・秀忠だった。家康の関が原の合戦勝利で夫は２代将軍、江は御台所となる。秀忠との間に３代将軍家光、後水尾天皇の中宮・和子、秀吉と姉茶々の子・秀頼に嫁し大坂城を脱出した千姫など２男５女、寛永３年江戸城西の丸で逝去、５４才。崇源院、芝増上寺葬。墓（石造宝塔＝秀忠を合祀）は現存、初代霊廟は解体移築されたので鎌倉建長寺仏殿として現存するが、秀忠葬儀の時改築された再建霊廟は秀忠霊廟、木造宝塔とともに昭和戦災で焼失した。
＊主な出演者＝江（上野樹里）、茶々（宮沢りえ）、初（氷川あさみ）、市（鈴木保奈美）、織田信長（豊川悦司）、浅井長政（時任三郎）、柴田勝家（大地康雄）、豊臣秀吉（岸谷五朗）、徳川家康（北大路欣也）、千利休（石坂浩二）

② １月２日から２月２０日まで江戸東京博物館で開催された「大河ドラマ特別展」に市内西国吉医光寺所蔵の「伝崇源院座像」が出品された。

③ 医光寺は真言宗豊山派、寺伝は文明年間創建とする。近江浅井家の流れをくむ旗本三好家が焼失、荒廃していた当寺を再建して国元の菩提寺とした。

④ 三好家は戦国大名浅井長政の兄おじ明政を初代とするが諸説がある。大坂夏の陣で２代政高は戦死したが、妻梅津が幼な子の直政を抱いて千姫の大坂城脱出に従い血縁の江の大奥に仕えた。直政は秀忠小姓に取り立てられ旗本となり江の浅井氏に遠慮して外戚の三好を名乗った。
＊医光寺には江の父長政を含む浅井、三好両家合同位牌、４代政盛夫妻の墓などがある。

⑤ 「伝崇源院座像」は寄せ木造り、合掌する尼僧座像で彩色、像高34.5cmをはかる。無銘。いまは「崇源院」だが、昭和後期までは「桂昌院像」であった。
＊市原郡誌（大正５年市教育会）＝（浅井政盛）公夫人桂昌院殿従一位仁誉興国大姉の木像

⑥ 桂昌院は３代将軍家光の側室で、５代将軍綱吉の生母となったお玉という。京都・八百屋の娘だが、家光の側室に迎えられたお万に従って江戸城に入り、家光の寵を受けて４男綱吉を生む。４代家綱の逝去で綱吉が将軍になると、従一位に上りつめ「玉の輿」の語源となった。

⑦ しかし浅井家との関係は薄く、当時、寺や研究者らが総合判断して「崇源院」とした。
＊寺伝が変更されたこと、江とする根拠が明確でないことなどの問題点がある

⑧ 今般の記念展示「解説」がいいえているように思われる。
本像は寺伝で崇源院（江）とされ（中略）江戸初期を下がらない作品。当寺の由緒からいって浅井氏ゆかりの女性像であることは間違いない。

参考
＊８月２９日（月）、９月１５日（木＝バス研修）辰巳公民館主催事業「江戸東京歴史散策＝お江と江戸と大名庭園」でお江の生涯など
＊７月２６日（火）城を歩く会夏期研修会（東京・大田区消費者生活センター）で「大河ドラマお江とゆかりの城」を担当します

伝崇源院像

浅井三好合同位牌

医光寺

協力＝八幡史学館名所百選チーム

主要参考文献（文中記載分を除く）
千葉の道千年物語、千葉県の歴史、房総の歴史、房総のあけぼの
市原市史、大河ドラマ江展、菱川師宣記念館房総の頼朝展公式ガイド

八幡史学館 ①八幡のあけぼの

追加文献

八幡郷守護不入
相定新市事 為立候 押買狼藉堅停止
殊於近郷取締役之事 如前々之其所にて可改之
近郷にて未進役 当八幡中敢策謀事不可叶
郷中商人諸役免許之儀 相違あるべからざる
ものなり よってくだんのごとし
天正九辛巳年七月五日 刑部少輔 谷沢丹波守

天正9年（1581）写し＝飯香岡八幡宮文書21E
北条氏新市免許状

参考資料＝榊原家文書

八幡郷守護不入
相定め、新市のこと立たせ候、押し買い、狼藉（ろうぜき）堅く停止（ちょうじ）、
ことに近郷において取り候役のこと、
前々のごとくそのところにてこれを改めべく近郷にて未進役、
八幡中において策謀敢すこと叶うべからず、郷中商人
諸役免許の儀、相違あるべからざるものなり。よってくだんの
ごとし。
天正九辛巳年七月　刑部少輔
谷沢丹波守これを奉る

参考＝姉崎・榊原家所蔵文書（千葉県の歴史から）
原胤栄印判状
法度
右、八幡之郷守護不入相定、新市之事為立候、押買狼藉（藉）
堅停止、殊於近郷取締役之事、如前々之其所にて可改之、近郷
にて未進役、当八幡中敢策謀事不可叶、郷中商人諸役免許之儀、
不可有相違者也、よってくだんのごとし。
天正九辛巳年七月五日（朱印、印文「大吉宝久」）
刑部少輔（原カ）
谷沢丹波守（貞儀）　奉之

上総国八幡宮可造営趣肝要候依之
諸郷勧進事 其得意者也
天正四年九月　斉藤善七郎 奉之

天正4年（1576）写し＝飯香岡八幡宮文書21D
北条氏八幡宮造営勧進帳

上総国八幡宮造営すべき趣肝要に候。これにより
諸郷勧進のこと、その意を得るものなり。
天正四年九月　斉藤善七郎これを捧ぐ

参考＝姉崎・榊原家所蔵文書（千葉県の歴史から）
原胤栄カ印判状
上総州八幡宮可有造営肝要候、依之諸郷勧進之事、得其意者也、
よってくだんのごとし。
天正四年九月吉日（朱印、印文「栄」）
斉藤善七郎奉之

『市原の古文書研究』第千集 から

Dは八幡宮の造営の勧進許可書。「勧進」は社寺の建立や修繕のため金品を集めること、領主にあてた伺いが許可されたのだろう。「諸郷勧進のことその意を得るものなり」、斉藤善七郎（前出）と作成者、天正4年の年号を付けている。原文は戦後の八幡宮混乱期に散逸、変遷をへて現在、姉崎・榊原家が保管されている。参考資料として『千葉県の歴史』の原文解読を紹介した。同誌は「榊原家文書」の朱印、印文から下総千葉小弓（生実）と臼井城主であった「原胤栄カ印判状」としている。原氏は千葉氏のわかれだが当時、その勢力は主家をしのいだ。胤栄は熱心な浄土宗信者で、千葉・大巌寺を開基、伝天正3年、八幡・稱念寺がその念仏道場として創建されている。（八幡・稱念寺の石造物と文化財参照）市原の沿岸部、少なくとも八幡周辺は原氏の領有下にあったことを示しているといえよう。

Eは「楽市」免許状、この原本も姉崎・榊原家が所有、『千葉県の歴史』所載の写真と解読も併せ示した。原文は「法度」ではじまるほか八幡宮の写しと若干異なるので注意が必要だ。「楽市」は城下や寺社門前町の集落形成のための誘致策で、織田信長の安土城以来各地で広く行われた。「守護不入」は守護の力も及ばない治外法権だということ。押し買い、ろうぜきを禁止して税金を免除、旧地での未納分もここで取り立ててはいけないなどとしている。

これまで本書の発行者は不明（あるいは北条家？）であったが、原文の朱印、印文から「原胤栄印半状」とわかり、またその意味も「八幡宮造営のために新市を作る」としたこれまでの見解について「八幡郷の商人から原胤栄に直接訴え（突き上げ）があったことをふまえて出されたものだったのであり、そしてここでの中心的課題は郷中の商人である。その商人達が中心となって市立てが企画され、それが原氏のもとに要求されたのであった」（千葉県の歴史）。このことはすでに八幡村には流通や運送によってもたらされた市場、村落があったことを物語っている。商人達がこれまで郷中への既得権を行使していた八幡宮に対して領主・原氏を通じて「守護不入」「諸役免除」の特権を獲得したもので、八幡の町域形成の歴史を考える上からも重要な意味をもつといえる。（山岸功明）

八幡公民館主催事業「八幡史学館」③次回バス研修のみどころ
「千葉城」と八幡ゆかりの「生実城、生実陣屋」を歩く

次回１１月９日（水曜日）の主要見学コース

千葉市立郷土博物館＝昭和４２年千葉氏居城跡に建てられた郷土博物館。千葉氏資料などを展示している
千葉猪鼻城＝中世千葉氏居城。土塁、空堀、堀切、物見などが現存している。お茶の水などをめぐる
千葉大学構内（＊１）＝猪鼻城後世３の丸に相当（異説もある）。大手周辺の巨大堀切、７天王塚のなぞ
千葉県立中央博物館＝平成元年開館の県立博物館。昼食、「房総の歴史」コーナーを見学
生実城（北小弓城、生実陣屋＊２）＝天文８年原氏築城という（異説も）、八幡は多く原氏の所領に属した。天正１８年徳川氏の臣西郷氏、寛永４年森川氏が入封して明治維新に及ぶ。生実城は団地造成のため跡形なく消滅、近世森川氏陣屋跡、本丸空堀、主護神・生実神社、大手口、町並みなどを回る
生実重俊院（今井先生担当）＝森川氏菩提寺。重俊以下の歴代藩主舟形墓碑がならぶ。

＊１）徒歩１時間、自信のない方はバス移動してください
＊２）徒歩５０分、自信のない方はバス待機してください

館内の展示

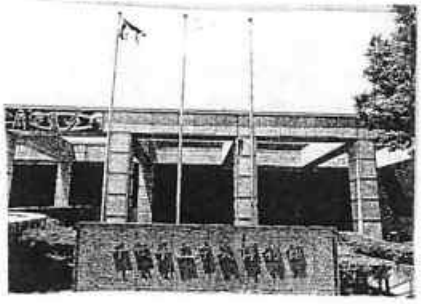
千葉市立郷土博物館

千葉常胤像

本丸跡

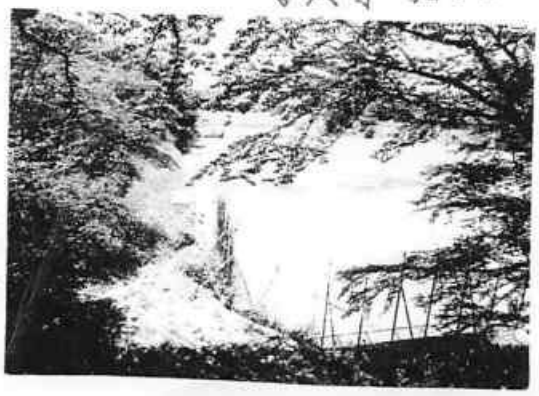
お茶の水

千葉大学

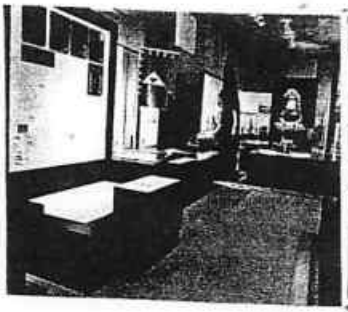


猪鼻城跡
（千葉城）
→
七天王塚

↓大手堀切



重俊院


県立中央博物館

八幡は戦国時代、生実（小弓）城の支配下にあった

1）戦国時代の八幡領主の変遷

①戦国時代、上総、下総国境に位置した八幡周辺の支配状況はほとんど解明されていない。
　しかし、大まかにいえば下総系で生実（小弓）城の支配下にあったといえる。

＊村田川周辺は両総国境の草刈り場（紛争地）戦国期を通じてほぼ千葉氏系が抑え、能満、市原、山木の３城も上総系とは言いにくい

＊八幡と生実は村田川流域の同文化圏で、菊間国造など歴史的な繋がりがある

＊飯香岡社などに天正期の原氏印判状が現存、下総と関係した寺院が多い

②生実（小弓）城主の変遷も未詳だがほぼ下記のように推移したと考えられる。

原胤房＝享徳４年か～文明３年小弓城主（小弓城討ち死に）、小金城主から、越後守、越後入道
原胤隆＝文明３年～永正１４年小弓城主（落城）、宮内太輔、讃岐守、越後守
足利義明＝永正１５年～天文７年小弓御所（国府台討ち死に）、左兵衛督
原胤清＝天文７年～２４年小弓城主（隠居）、弘治２年没、式部大夫
原胤貞＝天文２４年～永禄１２年小弓城主、臼井城主から、上総介
原胤栄（たねよし）＝永禄１２年か～天正１７年小弓城主、臼井城主兼務、宗家執権、式部大夫
原吉丸か＝天正１８年（豊臣秀吉の小田原攻略で滅亡）

③天正１８年の徳川家康の江戸入府以降生実の支配を離れた

2）馬加千葉宗家設立に貢献した生実原氏

①小弓城は八幡の村田川対岸、標高およそ２０ｍ、舌状台地先端に立地する平山城で、創建不詳だが１２世紀はじめ千葉介常兼が弟常途（原四郎）に下総、上総の郡郷を分け生実に住まわせたとされる。

②再興原氏（生実原氏）は千葉宗家氏胤の子胤高からはじまる。３代胤房は享徳４年（1455）関東動乱の時千葉宗家を滅ぼし、馬加系千葉氏を新たな千葉宗家として擁立した。この年古河公方足利成氏が一時千葉城に移り、あわせて胤房も小弓城に入ったとみられる。

＊原氏は新宗家成立で千葉家家宰（執権、執事）、実権№２となる

③城域は字古城、台、森台、松原と続く台地一帯で発掘調査の結果、大規模だが縄張りは単純、上総軍の侵攻に備えたＩ郭は房総往還を睨んでいる。『千葉市の戦国時代城館跡』は生実城の支城で戦国後期の築城とし、大手で発掘された丸馬出しを原氏滅亡後の西郷氏時代のものと推定している。

＊一方今井先生らは後出「東路のつと」の富士山の見え方や本行寺を小弓の館前とする表現などから小弓館＝小弓城と考えられている

④４代胤隆のとき宗長が本行寺と小弓館を訪ねた様子を紀行文「東路のつと」（↓　）に残す。

＊当時の本行寺は浜野の谷（や＝市原市古市場隣接）、京葉道路入り口の地にあった。

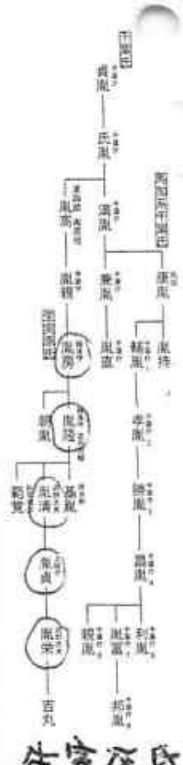
⑤胤隆は永正１４年（1517）真里谷武田氏と戦い敗れ、小弓城を追われる。

小弓城跡・生実城跡位置図（『千葉県の歴史』資料編中世１考古資料）

宗長肖像　妙覚寺蔵

東路のつと　千葉・生実関連記事抜粋

飯香岡社　新市　原胤栄印判状



3）真里谷武田氏の生実攻略と小弓公方足利義明

①永正１４年１０月、上総真里谷武田氏が小弓城を攻め、落城させる。

②翌１５年７月か、武田氏は小弓城に古河公方足利政氏の３男で、兄と対立関係にあった義明を盟主に迎える。義明は小弓御所を称して独自の権力基盤を築き兄の古河公方高基と対決した。

＊足利義明については平成２１年の八幡史学館②を参照されたい

＊八幡には義明の八幡御所伝説がある。八幡御所から小弓城を攻略したとする

③義明は武田氏と安房里見氏と同盟、その勢力圏を上総、安房に延ばした。

④天文７年（1538）１０月、国府台で高基を支援する小田原北条氏と決戦、義明は敗死し、近臣らは小弓城を焼き払い、嫡子頼淳を伴って房州に落ちた。

＊頼淳は里見氏の支援で再興、近世では喜連川に所領をえて関東足利家の血筋を伝えた

4）原氏の小弓城復帰

①義明滅亡後、原胤隆の子胤清が復帰、最後の胤栄が臼井城主を兼ねて本拠を臼井に移した。

＊天文から永禄にかけて原氏は里見氏と激しく戦ったが、小弓、臼井城にあって対抗した
永禄４年正木氏が小弓城攻略、元亀２年里見氏に小弓城を占領され北条氏の派兵を受ける

②歴代千葉氏の中でもっとも活躍したのは胤富であった。小田原北条氏の援助を得て安房の里見氏や常陸の佐竹氏、越後の上杉氏と戦い、よくこれを撃退した。最後の重胤は幼少で北条氏の庇護を受けて小田原に住みすでに傀儡と化していた。

③千葉宗家を実質取り仕切ったのは原胤栄であったが、風雲急を告げる天正１７年１２月逝去、後継は吉丸であったがすでに戦時体制、翌１８年早々北条氏の命を受けて小田原に出陣、籠城の後敗戦、開城後の帰途、野田宿十文字（現誉田駅近く）の戦いで酒井家次軍と遭遇、戦火を交え壊滅したとされる。

＊原氏は２５００騎を率いて出陣、八幡地区からも農兵が駆り出されたものと見られる。小田原城や野田宿の戦いの詳細は伝わっていない

④小田原籠城中の天正１８年５月、上総、下総に浅野、木村軍が進軍、主戦力を小田原に送り込んだ生実では戦うことなく開城している。

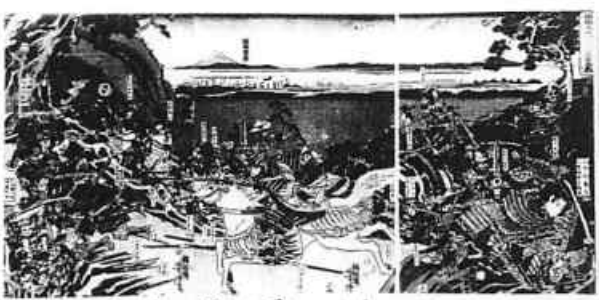
5）２つのおゆみ城と生実陣屋

①小弓城＝前出

②生実城（北小弓城）＝小弓城北方およそ２km、東京湾を見下ろす低平な台地先端に立地する。
通説は天文７年、生実復帰をはたした原胤清築城だがさらに逆上る可能性がある。また義明の小弓御所跡説もある。

＊標高２０ｍほどの平山城。城域は字本城、旧邸、宮腰、番後台の一画、北に谷津田、西に大池、南は空堀、東側台地方向に巨大堀切と空堀、大手を配置している。本城は空堀で３郭に分けられていたが、昭和３０年代の土地造成で破壊されたので現況から当時の様子を窺うことはできない。

＊「金ケさく紀行」（明和２年）＝重俊院の僧の語りしは、寺をさること東の方数歩にして小弓御所義明の館跡あり



足利義明の討ち死に

生実池（堀）
←
生実城本城跡

本土手遺構
←

生実城（陣屋）

③生実陣屋＝江戸時代はじめに成立した森川藩１万石陣屋。山城禁止などの幕府方針に沿って生実城を詰めの城とし、山麓のⅥ郭（近世の３の丸に相当）に陣屋地を開いた。

６）近世生実藩の成立

①天正１８年、北条氏の旧領は徳川家康に与えられ、両総に徳川家の家臣団が配置された。
②西郷家員は三河西郷の采地を改め生実に５０００石を拝領する。元は今川家に仕え、のち松平（徳川）家に勤仕した。父の養女（めい）が西郷の局で家康の側室となり２代将軍の秀忠と５男信吉を生んだ。
＊西郷家は忠員、康員をへた４代正員の元和６年５０００石を加増、東条１万石に栄進した
＊西郷氏の陣屋地は小弓、生実城のいずれかだが未詳
③寛永４年秀忠の腹臣森川重俊が上総、下総、相模のうちに１万石をえて生実に陣屋を構えた。
重俊は翌５年老中にすすむが、９年秀忠の死に殉ずる。以下、重政、重信、俊胤、俊常、俊令……と続き１２代俊方のとき明治維新を迎えた。
＊「恩栄録」と「寛政重修諸家譜」によれば元和年間に酒井重俊が下総生実に２５０００石を拝領している。詳細は不明で歴史書の多くが無視している
＊近世では八幡は生実の支配から離れ、交通要衝、市原最大の盛り場として繁栄することになる。

千葉宗家の本拠・千葉城、猪鼻城

１）千葉城、猪鼻城にみる日本城郭の歩み

①千葉市は中世千葉氏の本拠地で、江戸時代は宿場町、佐倉堀田藩１０万石の物資出入港とされた。
②千葉氏は常胤が鎌倉幕府創建に貢献して以来東国の武士団では高い家格を誇った。
しかし鎌倉公方と関東管領上杉氏と戦った関東動乱で２派に分かれ、上杉方の千葉宗家は公方方の馬加千葉氏に千葉猪鼻城を攻められて滅亡し、その後の混乱で猪鼻城も廃城となった。
③千葉氏３３０年間の本拠は
はじめ千葉地方裁判所（千葉堀の内＝通称御殿跡）にあったと推定される千葉氏館（千葉城）で、１６世紀ころ、戦国時代に猪鼻城に移ったとみられる。
＊猪鼻城のこれまでの発掘調査では鎌倉時代に逆上る遺構は発見されていない。また大椎城を前身とする説も現在は否定されている
④城郭史的角度からからみると、おおむね次のように推移したといえる。
鎌倉時代は方形館で周囲に溝と塀か柵をまわす程度
南北朝時代は溝が堀に変わり、周囲に土塁をまわす
室町時代前期は単郭から複郭へ、防御が一段と強化される
戦国時代前期は山城へ、城は大型化していく
戦国後期は一段と巨大化、複雑化、本城、支城、枝城へと広がる
＊以後、近世城郭のながれを続ける
山城禁止、戦う城からみせる城、政治と権威の象徴へ。慶長後期を城の最盛期とする
元和「一国一城令」城作りに制限が加えられ、新城禁止
明治維新の城の存廃令。多くの城が取り壊された
⑤全国の城数は２万とも３万ともいわれる。うち実際に戦った城は半分もなく、落城した城は一握りしかない。猪鼻城、生実城、小弓城の３城は何度も落城を体験した典型的な戦国の城といえる。

２）房総往還交通要衝、要害の地に立地した猪鼻城

①猪鼻城（通称千葉城）は千葉市街の中央部猪鼻台上にある。北は都川が流れ断崖となり、西は東京湾をを望む海蝕崖、南は深い谷津が入り組む要害の地である。
②猪鼻城の遺跡はほとんど壊滅して形態や規模を明確に把握できない。主郭部は郷土博物館周辺の一角で高さ２ｍほどの土塁がめぐる。花見会場となる猪鼻公園が本丸で神明社の[illegible]物見台との間に堀切がある。下るとお茶の水で外堀でもある都川に出る。一相当
③千葉大学医学部の高台は後世の３の丸、付属病院の一帯は外郭、諸説がある。
④大手門推定地周辺に将門伝説をもつ七天王塚が散在する。当日は博物館から千葉大学構内を抜けておよそ１km余りを中央博物館まで歩く。（自信のない方はバス移動）

郷土史コーナー＝飯香岡八幡宮の社紋(質問にこたえて)

①飯香岡八幡宮神官によると、八幡宮の多くは巴紋だが、当社は皇室の「菊紋」と「桐紋」を使用している。とくに拝領したとの記録はなく、昔は皇室紋もある程度自由に使えたのだという。社紋は八幡神である「応神天皇」に由来したといえる。
②参考までに「豊臣一族の紋章」など菊と桐の天皇家拝領紋資料２点を紹介する。

「歴史の旅」講談社MOOK「もっと知る」(2010-12)

豊臣一族の紋章

榆井範正
(姓氏家系研究家)

別冊「歴史読本」1996-7「豊臣一族のすべて」

家紋のおこり

平安のむかし、朝廷に仕える公卿たちは、牛車にのって参内したので、都大路や内裏前の広場はたいそう混雑したという。そこで、他家の牛車との識別の必要を生じ、各家ゆかりの文様を描いて目印とした。最初は一代限りのものであったが、やがて子孫が踏襲するようになり、衣服や調度にもつけられるようになった。これが家紋のおこりとされる。

公家にはじまった家紋は、源平の白旗・赤旗の時代を経て、急速に武士の間に普及する。

すなわち、鎌倉時代以降の武士は、戦場において、敵と対決し自己の存在を顕示するために、旗印に家紋をつけた。これを裏づけるものとして、『蒙古襲来絵詞』に竹崎季長の「三つ目結に吉文字」、菊池武房の「並び鷹の羽」、島津久親の「鶴丸に十文字」などが描かれている。

さらに、室町時代の応仁期（一四六七～六九）には、武家のはじめての家紋集『見聞諸家紋』が刊行される。群雄割拠の戦国動乱の世になると、陣幕・旗指物・織・馬印などに家紋がつけられ、遠距離からも彼我の区別ができるように、華麗な色彩がほどこされた。

豊臣秀吉と太閤桐

秀吉は織田信長の志を継承し、数々の戦勝を経て近畿を平定し、天正十三年（一五八五）、長曾我部元親を討ち四国を制圧した。この年秀吉は関白の位にのぼる。さらに翌年、後陽成天皇より太政大臣に任命され、同時に豊臣姓と菊・桐紋（五七桐）を賜る。

皇室の紋章は、菊が正式で桐が副式であると扱われている。では、そのどちらが古くから使われているのであろうか。

桐紋のおこりについて、天皇の御服と桐の文様が用いられたのは嵯峨天皇の御代（八〇九～八二三）である。一方菊紋については、天皇の輿車や御服や刀剣の文様として用いられたのが、後鳥羽天皇の御代（一一八三～一一九八）であるから、桐紋の方が菊紋より古いということになる。

ところが、皇室の紋章として桐紋よりも菊紋を重視されるようになったのには、それなりの理由があるようで、後鳥羽天皇は菊を非常にお好みになって、御手づから刀剣を鍛えられ、その柄の部分に菊紋をほりつけられた。これを世に菊作太刀と称された。後鳥羽天皇の趣味が紋章の価値を逆転させたわけである。

「桐壺」といえば、『源氏物語』の中の帖名を思い出すが、これは中庭に桐が植えてあるところから名付けられたもので、桐の庭のことを当時は淑景舎と呼んだ。平安京内裏の清涼殿のまわりの各庭には、桐の他に梅・藤・竹などが植えられていた。これから察すると、桐は昔から高貴な花木として、あがめられたようである。

中国の伝説によると、梧桐は聖天子の出現するのを待って、この世に現れる鳳凰という瑞鳥の宿る嘉木とされた。すなわち、「鳳凰は梧桐でなくては棲まず、竹の実でなくては食せず、甘い泉でなくては飲まない。飛べば群鳥これに従う」という中国の故事によるものである。そのために天皇の御服の紋様とし、不老不死の願いをこめて、桐・竹・鳳凰の三つが組合されて用いられた。そして、桐の花・茎・葉をデザインした紋様が王者を象徴するものとして天皇紋になったのである。

ところで、秀吉は五七桐を後陽成天皇から下賜される前から、実は桐紋を使用していた。それは五三桐である。この桐紋は天正元年（一五七三）に織田信長に願い出て、姓を木下から羽柴に変えた時に拝領したのである。それまでは、沢瀉紋であったようである。

織田信長が秀吉に与えた五三桐紋は、もともと信長が足利義昭将軍から下賜された紋である。足利家では、この紋を尊氏が、鎌倉の北条政権を倒した功績によって後醍醐天皇から賜っている。足利将軍は細川、今川、吉良など一門の諸氏をはじめとして、戦功を挙げた武将たちにも、この桐紋を与えた。こうしたことから、桐紋は栄誉ある紋章として広く世に知れ渡ったのである。

後陽成天皇から直接、豊臣姓と桐紋を下賜された秀吉は、その豪快な性格から、自己の権力を誇示するために、服飾調

6

26

本件については
11月9日に
再度連絡します

予告編

１１月１５日（火曜日）、＋１

足利義明ゆかりの小弓城をご案内します

①公民館の主催行事ではありません。講師の追加ボランティア教室です。
　八幡史学館名所１００選チームが当日の運営に協力します。
②１２時３０分八幡公民館前、または１３時００分千葉市埋蔵文化財センター前集合
　１６時現地解散、１６時３０分八幡公民館着
③見学コース＝大覚寺古墳（菊間国造一族の墓か）
　　小弓城跡（足利義明御座所、千葉原氏居城）
　　千葉市埋蔵文化財センター
④参加申し込み＝次回（１１月９日）
　少数なら講座参加者以外の方の参加もＯＫ、人員増減は連絡不要です。
⑤雨天中止のとき＝申し込み者には連絡（方法は次回）
　１０時から八幡公民館に山岸が待機
⑥無料（資料代をいただくこともあります）

ご希望があれば雨天のとき、辰巳公民館講座の「大河ドラマお江」をお話しします

集合場所←

千葉市埋文センター

土塁

空堀

館内→

のぼりがま

本丸跡

小弓城

大災手跡

八幡・五所の海苔生産の話

八幡公民館主催
平成２３年９月２０日
話　佐倉東雄

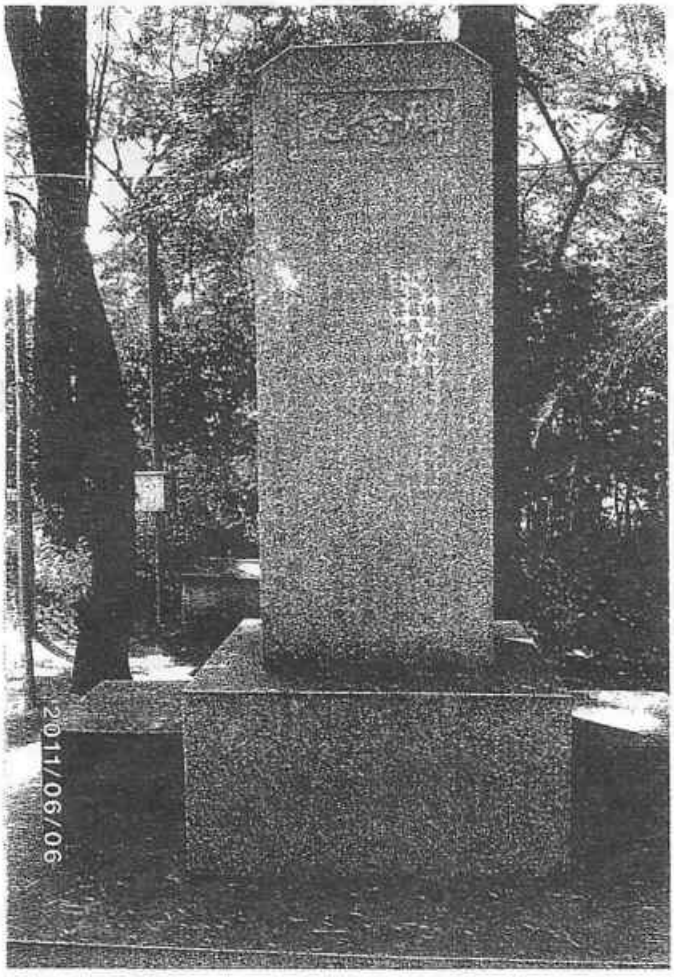
八幡五所漁業共同組合は、築き上げて来た長い歴史の末、昭和３２年１０月２３日、幕を閉じる。いわゆる、漁業権（海面）の全面放棄である。

東京湾の海苔養殖については、幾つかの本を広げると、それなりに歴史的経緯が詳しく書かれている。

今回はそれらを省略し、私自身が承知している海苔の話、又、先輩からお聞きした実際の話をさせていただく。

それには、何としても海苔の養殖に海で使った品々、また、各家々で使った使った品（重複するが）を写真に撮り資料としたので、それらを中心に前後はするが、話を進めさせていただきたい。

八幡の飯香岡八幡宮の境内（神楽殿正面向かって右側）に八幡五所漁業協同組合が、漁業権を放棄した記念碑が建立されている。写真と、文面を載せる。



漁業権放棄記念碑

※縦の文字数及び横の行数とも碑と異る

八幡五所漁業協同組合解散記念碑

明治三十五年十月五日建立
市原町長　鈴木敬介　撰文
八幡五所漁業協同組合長　宮吉長門　書

五所浦ソノ漁業権放棄ニ当リ八幡宮ニ記念碑ヲ建立シ以テ組合員ノ一致ヲ期シ神楽殿ニ向ヒ右側ニ安置シ以テ組合員ノ感謝シ境内ニ神楽殿ヲ造成シ八幡宮ニ奉納シ以テ組合員ノ徳ヲ永遠ニ伝ヘントスル

万坪ノ漁場ヲ放棄スル事ハ一億数千万円ニ達シ漁業権ノ面積ハ百六十四万坪ニ及ブ

明治三十年頃ニ発生シタ海苔ノ発展ハ一時ハ海苔ノ生産額ハ昭和三十二年ニ至リ漁業ノ発展ニ寄与シタ海苔ノ歴史ヲ祖父ノ代ニ伝ヘ来リ帯状ノ統一ヲ図リ八幡市原区ノ地内ニ記念碑ヲ建立シ以テ八幡五所漁業協同組合解散ノ日ヲ記念トスル

ニ努力シ十二月十日ニ解散ヲ決議シ昭和三十年四月一日ニ組合員ニ対シ操業ノ一切ヲ放棄シ協力全員ニ対シ感謝ヲ表シ

吉長七郎氏ニ主造ノ巨額ニ達シ同組合ニ対シ巨額ノ積立金ヲ提唱シ

宮吉名郎氏ニ対シ操業ノ一切ヲ放棄シ

他九名ニ対シ

有志ニ対シ

漁業権解散記念碑の裏面には、海苔養殖場所の貴重な浦の地図が彫られている。それも折角の機会であるから載せておこう。

海苔を採りに行くには、自分で木札に「イの一号の三番」と書いたものを腰に下げた。その木札には、漁業組合の印はなかった。紙ではあるが抽選で当たった組合の証明書を大切に保管していれば良かった。これは一年限りである。

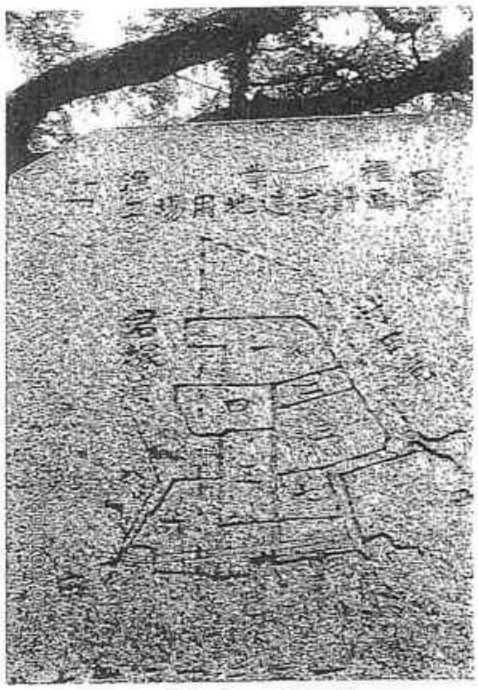
図面のタイトルは二段にして、上に「漁業権」下に「工場用地造成計計」最後に併せて「図」となっているが、極めて分かりづらい。使用した石そのものにも原因があるだろう。

欠かせない大事な碑がもう一つあるので、取り上げる。

飯香岡八幡宮に一対の狛犬が建立されている。文面は一切ない。

拝殿向かって、右側が阿、左が吽である。右側には奉の奉が一字刻んであり、下の填め込み石には、最初に海苔業総代とある。総代の氏名が終わると、各町名毎に組合員の氏名が刻まれている。

吽の方は、獅が彫られており、一対で奉獅となる。吽の方の最後に大正七年九月吉詳とある。建立日である。八幡五所漁業協同組合とは、全く別な組織として、海苔の生産関係者が建立したのだ。勿論どちの組織にも大方の人が加入していた。面白いことである。



記念碑の裏の図

飯香岡八幡宮狛犬

さて、海苔の話を始めましょう。用具を説明するなど、極めて簡単に記していく。

・内湾（現・千葉県）に海苔養殖の話をされたのは、海苔の売買を業としていた江戸四谷生まれの近江屋甚兵衛という人物である。生まれは明和３年（１７６６）であるから、今から２４５年前で十代将軍家治の時代である。

※田沼意次時代

・この時代、すでに品川や大森では、海苔の養殖が行なわれていた。

・近江屋甚兵衛は、海苔の養殖場を拡大すべく、下総の行徳に行き、漁民の説得にあたっが、断られた。

・次に上総の五井に行き、漁民に熱心に勧説したが、五井の漁民にも聞き

入れてもらえなかった。

・次に小櫃川河口の漁民に海苔養殖を勧説したが、ここでも断られた。

・次に小糸川の河口で漁業をしていた人見村（現・君津市）に行き、熱心に交渉をしたところ、当地名主の源左衛門と八郎右衛門の両名が承諾。近江甚兵衛は、ヒビを差し海苔の種（胞子）待ち、更に種の成長を待ったが、一年目は期待外れであった。二年目も同じようにやつたところ、成功し海苔が繁殖し採れたのである。

・言ってみれば、断った村々が人見村の成功を見て始め出したのである。それはやがて千葉方向に向けての村々といってよい。

・当八幡は、明治以前は遠浅の利点を踏まえ塩田事業をしていた。しかし、塩田が波で崩れるなど、大変なことであった。

・明治に入り塩田事業とは手を切り、これといった本格的な漁業はしていなかった。だが、牡蠣の養殖を手掛けてみたが上手くはいかなかった。

・八幡が海苔の養殖を始めたのは、明治の終わり頃ではないかと思う。五井村が県の指導で海苔養殖の最適地と認められ、明治４２年にヒビを立て養殖を行なったところ、海苔が生産され大変な収入を得たのである。

・君塚も八幡もそれを見ていて、海苔養殖に踏み切ったのではないか。八幡には『八幡漁業史』なるものがない。解散した時、それなりの関係書類があったわけで、関係者を回り、何処に保存されたかをお訊きしたが、分かる返事は全くいただけなかった。どうしてしまったのだろう。

・八幡に漁業組が組織されたのは碑の通りで、明治３５年１１月、隣の五所村と組んで「八幡五所浦漁業組合」という組織名であった。それからいつであるのかは知らないが「八幡五所漁業協同組合」に変更になった。

・海苔ヒビは一番最初は、栗・欅・楢・櫟等の粗朶で、葉を取り枝々を上手く活かし、海に差し込んだのである。これを木ヒビと言った。差し込むのには、振り棒を使った。

・粗朶を在から購入したのであるが、当然、大きな問題も起きた。在にしてみれば山がなし崩しに荒れていったからである。

・八幡には当然山が無いので、粗朶は在から買った。

・昭和に入り、１０年頃には、木ヒビから竹ヒビが主になってきた。木より運びやすく、木は１年毎に取り替えたが、竹は２年使用できた。しかし、竹は油が表面にあるので、新しい竹は水に漬けておき、２年目から使用した。それの方が海苔の着生が良好であった。

・竹も小枝を活かし、そこに海苔が着生したのである。

・網を使って海苔の養殖を始めたのは、地域地域によって差があるが、『松ケ島漁業史』を見ると、松ケ島では大正２年頃に創案されたとある。素材は椰子である。本格的な使用は同１１年頃からであった。

・五井にしてみると、昭和１５度年の時点で竹ヒビが0，７％、網が99，3％であるから網養殖に替わっていたのだ。

・八幡も隣として、それに準じてよいのではないだろうか。椰子から繊維を作るといっても、椰子の実から網を業者が作るのである。

・序であるから、椰子網等が化学繊維に替ったのは、五井で見てみると昭和３３年度で全網数の5%程度です。八幡ではこの時期すでに放棄していますから、化学繊維を試験的に或いは実際に使用していたかどうかは分かりません。

・八幡では、海苔網を使用して養殖が盛んになると、五大力船とのトラブルが起こり、浜本町（はもと）の関係者は、海苔養殖の推進者である南町の宮吉長五郎さんの家に押しかけたという。海苔ヒビが船の運行に邪魔になったからである。

この辺で知識不足の話は終わりとして、海苔養殖の実際を記していこう。

・海苔は若布や昆布と違い、根も無ければ葉もない。いわゆる海苔の菌が成長するのである。その菌は養殖が終わる３月頃から、養殖が始まるまでの１１月頃までは牡蠣や貝などの中にじっとしているのである。現在はプールの中に海苔の菌を培養し、海苔網をその中に漬け込んでいるようである。

・夏時分は、海苔網を木陰で編む。縦が25間、横幅が４尺で、これを１柵と言った。

・夏時分は、竹ヒビの用意もした。竹は真竹で在から売りに来た。竹は中の節を全部細い鉄の棒（かなんぼう）で抜き通した。浮きやすいのを無くするためである。

・夏時分は、子供たちも海苔の簀を編む仕事をした。葦は「ごろやんよしやま」と言って、胴埋塚の裏て村田川よりに葦の生えている所があった。

・ＪＲ八幡宿駅の裏は開発されない前は、松の木などに覆われた森になって、御墓堂があった。いわゆる墓地である。そこに池とも沼ともつかない湿地帯があり、葦が茂っていた。その葦を刈って海苔の簀を編む家もあった。決まりか何かあったのであろうか。

・五所の人達は、機械船で江戸川と中川に挟まれた葛西地区まで航き、刈り取った葦はトラックで運んだようだ。船の中に泊まり込み、食料や風呂は浦安の銭湯に行った。

・大人は別に縄を編んだり、むしろを編んだり、俵を編んだり、百姓の仕事をした。もちろん、田にも出かけた。畑仕事もした。用事も沢山あった。

・浦は幾つかの区分に分かれており、毎年８月の終わりごろ、抽選で竹ヒビを立てる場所が決まった。一軒あたり12か13柵であった。

・ヒビ立ては、９月の初め頃。海苔採り船が３艘必要で何処の家でも２艘は持っていたので、あとの１艘は融通しあった。２艘に竹ヒビを横に山と積んだ。もう１艘には水力ポンプを積んだ。家族も３人で仕事をした。２人が海に入りヒビを立てる作業。ただでは入らないので、ポンプでヒビの根元に水を強力に送り、穴を開けヒビが入り安いようにした。

・ヒビ立ては、協同でする家々もあった。

・海苔網を張ったのは10月半ばで、これは１人でも十分できた。

・金木犀の花が咲きだすと、海苔が網に付き始める。

・漉いた生海苔は、で一す（台簀）に並べ、乾燥させた。台簀のを作る葦しは、海辺にもあったが、リヤカーで高倉（旧市津町の大字）や草刈りの堰に取りにいった。作ったのは10月の終わり頃であった。新藁が出来ていたからである。南東向きに作った。斜めにして。

・台簀の裏に麦の種を蒔いて、時期になると収穫する家もあった。

・海苔の収穫は、11月初め頃からボツボツ始まった。手入れ海苔といった。干し終わった海苔の木羽をほんの少し摘んで口に入れると、非常に味がよく美味しかった。とろけるようでもあった。値段がよかった。

・海苔のヒビは、縦は６尺（１尺＝曲尺で約30・3㌢）毎に挿し25間、横は４尺。これを１柵と言った。

・１柵に上と下とで２枚張った。網は上を下に下の網を上に入れ替えた。上の方が日の光を下よりも多く受けるため、成長がよいからである。

・漉いた海苔は、先ほど言ったでーすと大阪干しの双方を使って乾燥させた。主体はでーすであるが。

・年内の海苔を新海苔と言った。干すときは、裏にして干した、簀の糸が乾き始めた頃、表に干し直した。そうしないと海苔がおかめになってしまうからである。

・海苔干しなどの人手の無い家では、干し子を在から住み込みで頼んだ。家の手伝いもしてもらった。嫁に行く前の人で、働きによっては縁談が生まれたりもした。

・正月を過ぎると、海苔がごわごわしてきて、値段も安く取り引きされるようになる。

・今では海苔腐れが起これば、海苔網そのものを取り替えてしまうが、昔は海苔腐れが付いたまま、治るのを待っていたが、お手上げだった。

・竹ヒビにフジツボが付き、小さいうちは棕櫚の皮を丸めて束子状にし、擦って落とした。しかし、大きくなってしまったものは、それでは剥がせないので「せーおとし」という道具を使って落とした。「せー」と言うのは方言でフジツボのことをいう。

・海苔採りに出かけるのは、海苔採り船に乗ってであるが、冬の普段着に綿入れ半纏をまとって出かけた。海苔網から海苔を採るのは素手であるから両手が麻痺するどころか、感覚が無くなっしまうのである。そうすると両手を船の縁に叩き付け、完全に感覚を無くしてしまうのである。

・昼飯は、何処の家でも鰹節か梅干しを入れた海苔巻きであった。水筒も持っていく。カイロなどはなかった。海苔巻きは板子の上で食べた。

・海苔採り船が戻ってくる頃合になると、何処の家も澪までリヤカーを曳いていき、海苔籠を積んで戻ってきた。

・拾い海苔というのがあって、これは海苔の柵の中に入ってはいけないが、専用の網で掬ったり、幅の広い拾い海苔網を作って、引っ張って採ったりした。漁業権はいらなかった。隣の千葉市生浜では、海苔拾いと言えど鑑札の木札を腰にさげていた。千葉市とはいえ、組合によって違うものである。

・拾い海苔はゴミが入っているので、ちゃぶでー（卓袱台）に少しずつ広げ、電球をかなり下まで下げて箸で拾う作業をした。

・海苔は大きな欅の厚いまな板（輪切りのまま）に載せて包丁で叩いて適当に刻んだ。これは長年の感で教えごとにならない。戦後、千葉市村田町の小島製作所で海苔刻み機を作成したので、それを使うようになった。全国的にこの機械は普及した。

・海苔の収穫時期は例年決まっており、別添の通りである。澪にしが（氷の方言）が張った時は、一番最初に澪を出ていく人がしがを叩き割る。洗剤を使ったの水を流すこともなく（まだ無かった）、澪も海水もきれいそのものであった。

・話はばらばらになるが、海苔をまな板で刻むのは、各家々の技量にあった。刻み過ぎてもいけないし、刻み足りなくてもいけない。刻んだ海苔の長さを計ることなど、出来ようが無い。隣の家に聴きにいっても何ら収穫はな

い。刻みすぎると漉くときに水の捌けが悪くなる。これは漉く海苔が詰まっているからである。逆に刻みが足りないと、漉いたときに水捌けが早くなりすぎる。海苔の刻み具合は、難しいの一期につきる。しかし、刻んで漉いているのである。漉く技術もその家その家のもので、教えごとにならない。

・隣の千葉市村田町（中央区）に小島覚という方が住んでおられ、若いうちから東京に出て町工場の勤めた。この方が独立して自分の家の前に小島製作所を立上げた。そして生海苔を刻む機器を生産した。機器には小島製作所と銘をうった。どこの家でも購入した。これで海苔の刻みが一定した。画期的なことであった。この機器は、海苔が終わったあと、味噌を作るのに煮た大豆をつぶすした。丁度よい具合に出できたのである。

・何れにしても海苔はバクチといわれた。自然のとの戦いでもあったからである。できあがった海苔は、長野県から冬になると業者が来て価格をつけた。長野の業者が価格を仕切ったのである。

・海苔の豊作祈願に八幡に限らず、湾内で海苔養殖をした人たちは、君津市の小櫃川上流上総亀山駅から南へ3キロほど行ったところに三石山（みついしやま）に豊作祈願に出かけた。山頂の巨岩の間に十一面観音を祀る観音堂が建っている。ここの観音様は昔から三石山観音と呼ばれ、海運や縁結びに霊験があると昔から伝えられており、祈願に出かけたのである。願いごとは、一言で済ませないといけない。かなえてくれないのである。別名「一言観音」とも呼ばれている。余計なことだが、帰りに木更津で遊ぶ人もいた。

三石山観音堂

・浦掃除もしなければいけない。三月の中頃には、海苔採りは終わりになる。柵のヒビ竹を抜き取るのであるが、一度に全て抜き取る小とは出来ない。折れてしまうヒビ竹もある。それを組合員全員が出で砂地にすれすれに折れているものもある。浅蜊なども始まるので浦掃除をするのである。

・拾い海苔は、収入として馬鹿にならなかった。たも網みで掬う方法と、舟にけた網をつけて引っ張って採る方法とがあった。底引きと同じである。何れの拾い海苔も柵の中に入ることは違反であった。風の吹いた翌日などはよく拾えた、海苔網から海苔が風で千切れるからである。

・拾い海苔は、漁業権を持っていなくてもできた。菊間あたりの人も来ていた。

・台簀干しと大阪干（枠干し）しとに海苔の違いはなかった。屋敷の庭には大阪干しが便利であった。空模様が悪くなってきた時など、そのまま物置などの軒下に取り込むことが出来た。今でも大阪干しを蒲団をほしたり、洗い物を広げて干したりしている。

まだまだ言いたりないが、この辺で海苔採りの準備や作業をの話を終わりとして、諸道具を羅列する。その道具を簡単に説明させていただき終わりとしたい。諸道具の大方は、千葉市指定文化財の旧生浜町役場に保存管理されているものを許可をもらい撮らせていただきました。

御湯花講顕彰碑　銘文

神恩奉謝

我が郷土の祖神諏訪大社は悠久の昔信濃の國諏訪の地に鎮座のこと國史に明らかにして妃神と共に國土を拓き殖産興業の道を開き給いし彌高き御神徳は全國に普く其の御分霊を奉祀する神社は実に壹萬有餘社に及べり　殊に海の守護神としての御神徳は枚挙に遑なくわけても我が國海苔業界の尊崇することきわめて篤く常に報徳反始の至誠を捧げて今日に及ぶ　古来吾が諏訪の地に氏子等寒冷の期を利し年年歳々江戸大森品川の沿岸に赴き海苔業に従事し天賦の資性と強固なる團結のもと常に幾多の艱難辛苦を克服し我が國海苔業界今日の隆盛の礎を築き全國海苔商の名聲を四海に博したるは應に吾が諏訪大社の御神威の致すところなり嘉永五年に至り先考同士相寄り相讓り神恩奉謝のため御湯花講の集を結び同年七月十日大神の神前に太々神楽を奉納せしより爾来ここに壹百弐拾年相継ぎ相承けて祖神崇敬の誠を捧ぐ　更に又明治十六年に至り柴田是真の筆に成る品川沖海苔採製の大圖額を献納し神徳の発揚と業界の隆昌を祈念せしより九十周年の春秋を併せ迎えたり　ここに御湯花講創設百弐拾年並に献額九十周年に當り吾人亦諏訪大神の彌高き御神徳を仰ぎ神恩を奉謝し先考の遺風を偲び併せて業界の隆昌と本講の彌栄を祈い本碑を建立し以って後昆に傳う

諏訪大社宮司　三輪磐根書

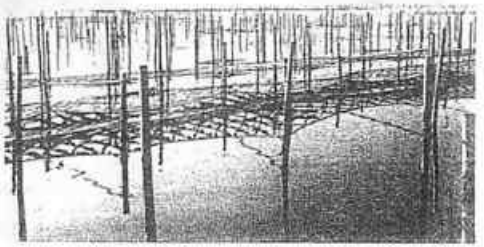
昭和四十七年七月祥日

海苔商團御湯花講

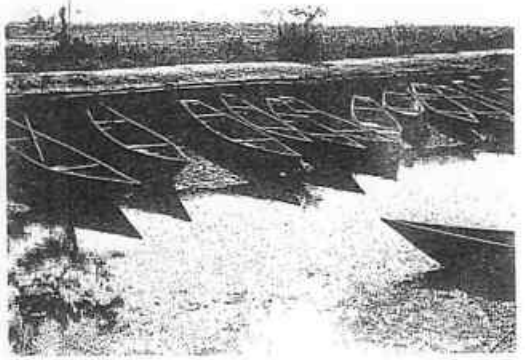
・悠久……長く久しいこと。
・彌……いや（いよいよ）
・普く……あまねく
・遑……いとま　・天賦……天性
・反始……祖先を顧みて恩徳を謝すること。
・應に……まさに
・神威……しんい（神の絶対的な力）
・先考……死亡した父
・発揚……さかんにあらわすこと。
・彌栄……いやさか　・太々……たいたい（婦人の総称）
・祈い……こいねがい
・後昆……後世の人。子孫

海苔の網を編んでいる子供

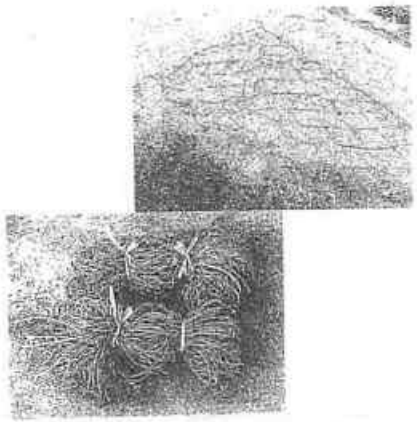
海苔を採っているところ



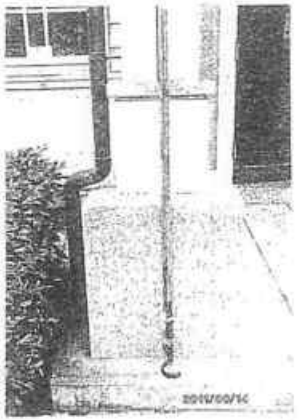
のり網の風景



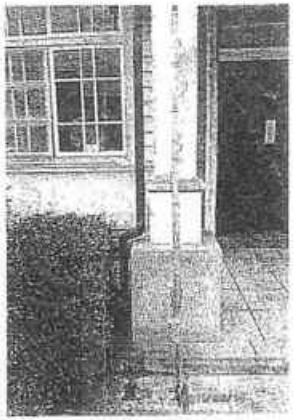
陸に繋がれた海苔採り舟



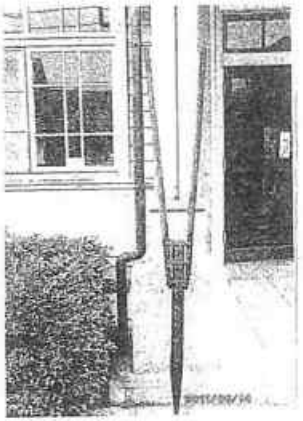
海苔網（化学繊維）



せー苔とし（フジツボ苔とし）



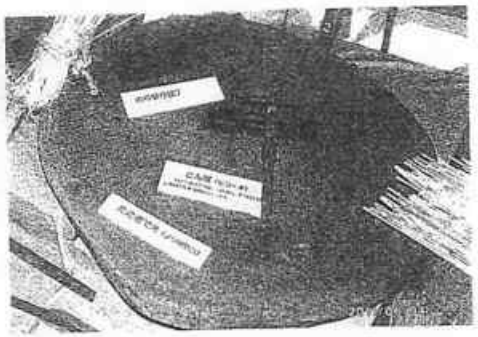
竹ひび（籠げが付いている）



振り棒

棒を差し込んでいるところ

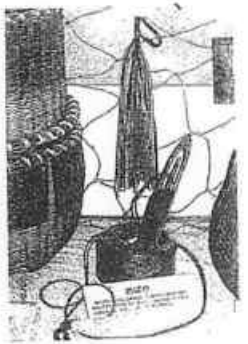
海苔簀



海苔の叩き台（まな板・包丁・とんぼ（包丁））

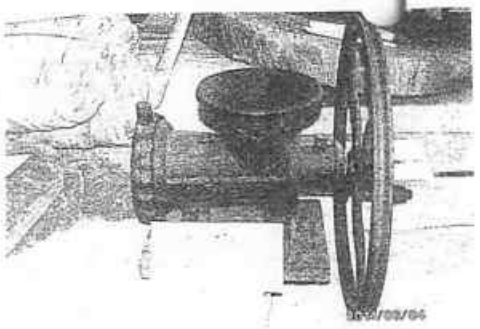
拾い海苔に行くところ

海苔網定規



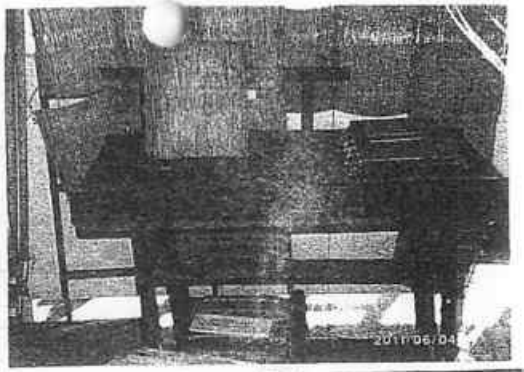
あばり（海苔網を編む道具）

塗取り

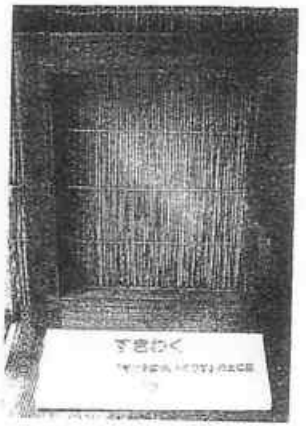


海苔切り機

馬（簀を整理して入れておくもの）



海苔を漉く台



海苔の漉き枠

海苔を漉く桁

海苔の簀を片づけているところ

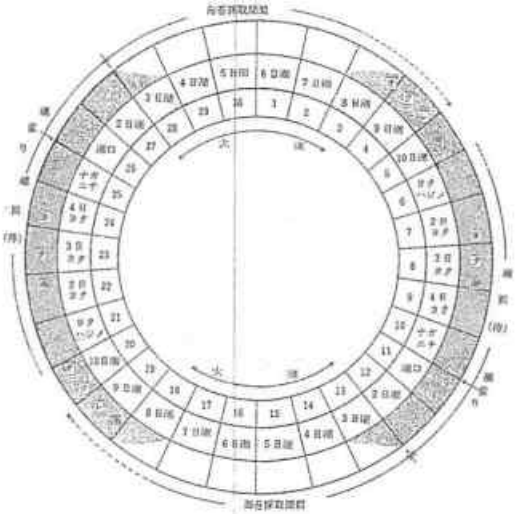


図6　1ヶ月間の陸海と潮の関係（海苔明市HP）市原市史別冊より

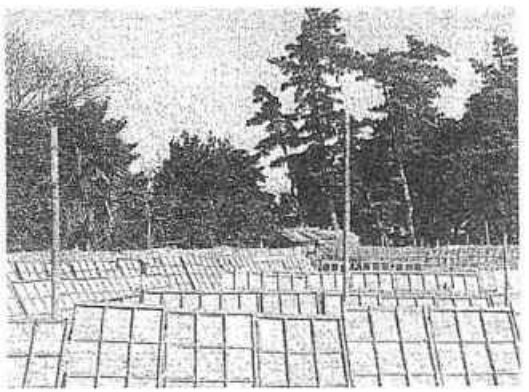
海苔の採取期間

台簀干しをしているところ

めぐしとめぐし箱

海苔を簀から剥がす板

干し上がった海苔を簀から剥がしているところ



大阪干し（障子干し・枠干し）

平成23年度主催事業　『八幡史学館』バス研修

千葉宗家の千葉城と原生実城を歩く

講師　山岸　弘明　先生

日時　11月9日（水）　8：30　～　16：30

見学場所　千葉市立郷土博物館（千葉城）、千葉県立中央博物館

生実重俊院

集合時刻　8：30（厳守）

日程　公民館集合……出発→→千葉市立郷土博物館＝＝＝

8:30　8:50　9:20～（見学）～　10:30　徒歩

千葉県立中央博物館→→生実重俊院→→八幡公民館着

11:30～（昼食）～13:00　13:15～（見学）～15:40　16:20

費用　65歳未満の方…350円（中央博物館240円＋郷土博物館50円＋駐車場代60円）

65歳以上の方…110円（郷土博物館　50円＋駐車場代60円）

＊お釣りのないようにお願いいたします。

持ち物　・弁当　・飲み物　・筆記用具　・雨具（雨合羽や傘）

服装　・歩きやすい服装と靴　・帽子

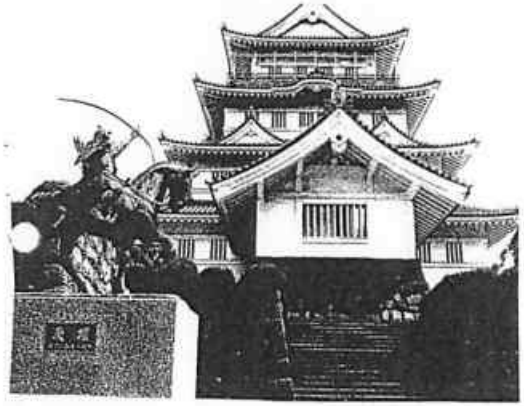
注意　＊やむを得ず、当日欠席される時は、8：10～8：30の間に公民館へご連絡ください。

八幡公民館　☎　41－1984　担当　田口、清水

八幡公民館主催事業「八幡史学館」④バス研修
「千葉城」と八幡ゆかりの「生実城、生実陣屋」を歩く

平成２３－１１－９

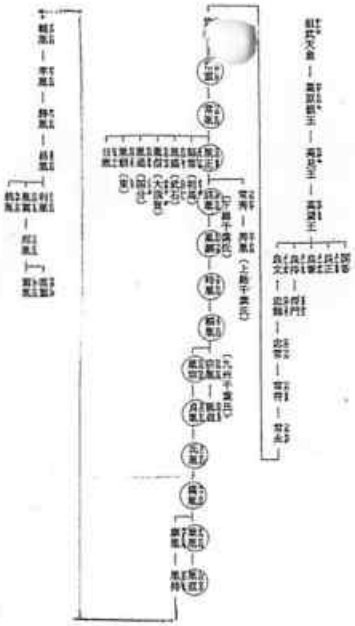
山岸弘明



本日の行程スケジュール（進行にご協力ください）

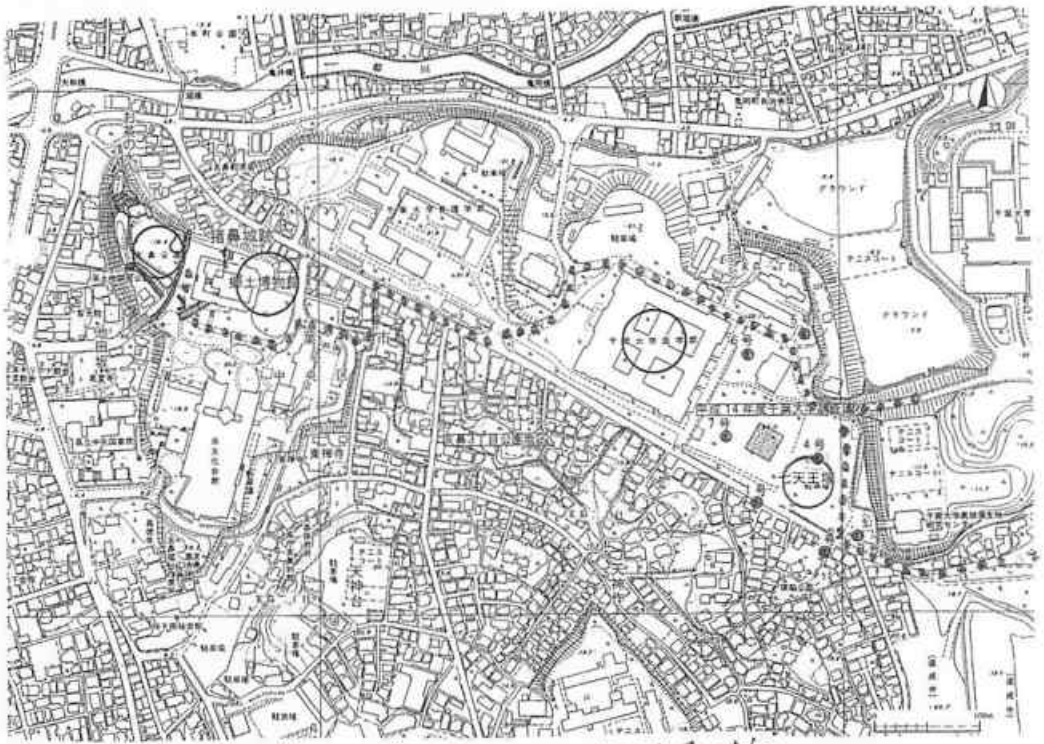
８時５０分	八幡公民館出発、千葉市立郷土博物館着
９時２０分	郷土博物館見学
９時５０分	千葉猪鼻城跡主郭部巡見
１０時３０分	猪鼻城跡千葉大医学部巡見（徒歩移動） （自信のない方はバスで移動してください）
１１時３０分	県立中央博物館（昼食、自由見学）
１３時００分	中央博物館出発、生実重俊院着
１３時３０分	生実城（北小弓城、生実陣屋）跡巡見 （自信のない方はバスで待機してください）
１４時３０分	生実重俊院見学（今井公子先生）
１５時５０分	〃　　出発
１６時２０分	八幡公民館着、解散

番外＋１＝１１月１５日（火）小弓城周辺を歩く

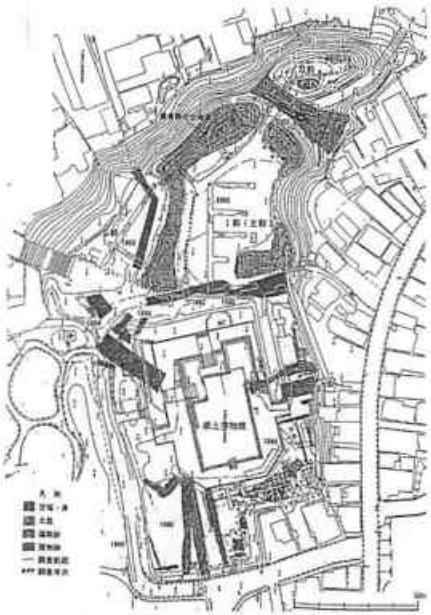


千葉氏系図

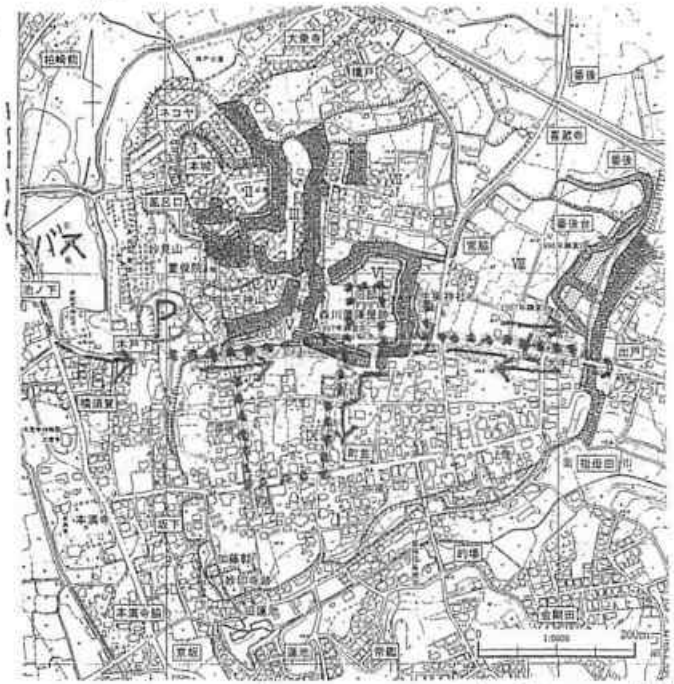
内係城館位置図



午前のご案内コース（千葉支城）



千葉支城の発掘調査



午后のご案内コース（生実城）

主なる用資料＝千葉市の戦国時代城館跡

中世千葉氏居城跡に建つ天守風博物館

1）史実に基づかない町のシンボル ―― 千葉市立郷土博物館

①昭和４２年、古代から中世にかけて活躍した千葉氏の居城跡に建設された郷土博物館。千葉氏に関する資料などを展示公開している。

②外観天守風。通称「千葉城」として地元民に親しまれているが史実に基づかない模擬城。
外観４重５階、鉄筋コンクリート造り、層塔型。石垣はコンクリート表面にやや厚めタイル状に切断した石材を張り付けて質感を強調している。

＊小田原城をモデルとしたと云われる

2）鎌倉幕府創建に貢献 ―― 千葉氏の興亡

①１階＝旅してみよう千葉のむかし。千葉市域の変貌をパネル紹介（今回は見学しない）
２階＝企画展＝武器・武具など（今回は見学しない）
３階＝千葉氏の興亡と妙見信仰
４階（プラネタリウム跡）＝近現代の千葉（今回は見学しない）
５階＝展望台

②２階正面、千葉介常胤座像＝鎌倉幕府創設に貢献した千葉氏中興の武将像

③３階・千葉氏の興亡と妙見信仰＝千葉氏の勃興から滅亡まで、要点だけを解説します
Ａゾーン＝東国の混乱と千葉氏の勃興
(1)東国武士団の館、(6)両総平氏の成立、(7)千葉氏のおこり
Ｂゾーン＝千葉氏の興隆
(9)源頼朝挙兵と千葉介常胤
Ｃゾーン＝千葉氏の分立と南北朝の内乱
Ｄゾーン＝関東の騒乱と千葉氏の分裂
(16)関東の動乱と千葉氏の分裂、(18)千葉氏と小弓の合戦
Ｅゾーン＝戦国の動乱と千葉氏の滅亡
(24)小田原合戦と千葉氏の滅亡、後北条氏の勢力分布図、徳川家康朱印状

④エレベーターで展望台へ昇る
南側＝蘇我、八幡方面。千葉港が垣間みれる
西側＝本千葉駅、海岸埋め立て地方面。かつて５００ｍほど先が本千葉海岸。海水浴や潮干狩り客で賑わった。その昔、海岸沿いの房総往還は軍用道路で源頼朝や里見、北条軍が往来した
北側＝千葉駅、千葉市街方面。直下の都川は千葉城の外堀でもあった
東側＝加曽利、千城台方面。直下の千葉大医学部、病院は外郭。徒歩移動の県立博物館ルートを確認

⑤下りは自由見学＝博物館前に集合

天守風郷土博物館

千葉氏の興亡

千葉氏時代武士の館

展望台

国府台の合戦

千葉介常胤

鎌倉幕府創立に貢献した千葉宗家本拠

1）千葉宗家本拠 —— 千葉館（城）と千葉猪鼻城

①千葉氏の祖先は桓武天皇の曾孫高望王で平姓を名乗る。
高望王は上総介の任務が終わった後土着し、その子孫が関東各地に支配を広げた。

＊平氏は平安はじめ皇族賜姓によって生まれた氏の名、桓武、仁明、文徳、光孝天皇の平氏４流の１つだが高見王、高望王の子孫がもっとも栄え、のち清和源氏とともに武家の棟梁となった

＊国香の子孫から平成２４年度大河ドラマ「平清盛」が生まれ、良持から平将門、良文からは千葉氏、上総氏が誕生した

②平安時代中、後期にかけて房総地方は「平将門の乱」「平忠常の乱」と平氏一族による戦乱が続く。戦後許された忠常の子孫が上総、下総一帯に勢力を広げ両総平氏となる。

＊忠常は源頼朝の先祖頼信に降伏、頼信の計らいで罪を許されたことで源氏との深い絆が生まれ、のち頼朝の挙兵に参陣することになる

＊両総平氏＝大椎（のちの千葉）氏（千葉市＝当時上総）、上総氏（市原など県中部）、千田（ちだ）氏（多古町）、大須賀氏（大栄町）、海上（うなかみ）氏など

③両総平氏の１つ大椎常兼は上総の大椎を中心に下総に勢力を振るい、その子常重が大治４年（1126）房総往還の交通要衝の地千葉に本拠を移して千葉氏となった。

④治承４年（1180）源頼朝下総通過に常胤が応じ、幕府成立に貢献して下総守護に任じられた。室町時代も鎌倉府御分国の「屋方」を名乗ったが次第に勢力を失っていった。

＊板東８御屋形＝三浦、上杉、千葉、小田、佐竹、小山、宇都宮、武田

⑤康正元年（1455）鎌倉公方と上杉管領（幕府方）家の対立に始まった関東動乱で一族は２派に分かれて戦う。分家馬加康胤は宗家千葉介胤直を千葉城に襲って自害させるが、自らも幕府の追討軍に追われて上総との国境村田川で敗死する。

⑥以後宗家は康胤の子孫が継承、本佐倉に本拠を移し、天正１８年（1590）小田原落城で滅亡している。

⑦千葉氏初期の館（千葉城）跡は未詳。都川近くの千葉市中央区４千葉地裁説が強い。

＊関東地方の室町中期居館は方形館で、主屋、対屋、厨の回りを水濠と土塁が囲み、虎口に櫓門を配し、周囲に馬場や矢場を設置した。のち複郭化など時代とともに防御性を強めていった。

⑧千葉氏本城の通説は、千葉猪鼻城で、康正元年馬加康胤に攻められ落城、以後廃城とされる。
発掘調査の結果、博物館東側で千葉氏時代と見られる建物遺構が検出された。当時まだ山城は発展していないものの初期の「詰めの城」が考えられる

＊詰めの城＝戦国時代城形態の１つ。普段は山下の居館に住み、戦時に備えた背後の山城

⑨千葉氏後期、本佐倉移城後の千葉猪鼻城は原氏生実（小弓）城支城として整備されたものと考えられる。
下がって江戸時代は佐倉藩蔵屋敷、幕末期は海防陣屋？とされた

＊太平洋戦争の防衛拠点を踏まえ千葉氏以降の城地改変にも注意が必要だろう

千葉亥鼻城概略図

亥鼻公園

I郭（本丸）跡

2）謎に包まれた巨城 —— 千葉猪鼻城の立地と全体像

①千葉猪鼻城は中世千葉氏居城で、房総の歴史に大きな役割をはたしたとされる。
県庁舎を眼下に見下ろす政令都市の中心部に立地、周囲の都市化は進行したが遺構は比較的良好な状態で現存している。

②立地条件と城の形式
千葉市街の中央部、舌状台地先端に立地
北は都川が流れ断崖となり、西は東京湾を望む海蝕崖、南は深い谷津が入り組む要害
平山城（丘城）、連郭式縄張り

③参考図で城の概要を確認する。（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ郭などの表記は本丸、２の丸など近世的表現に置き換えた）
主郭部（猪鼻公園、郷土博物館の一帯）＝近世の本丸、２の丸などに相当
外郭Ａ（文化会館の一画）＝近世の２の丸に相当か
外郭Ｂ（千葉大学医学部、看護学部の一画）＝近世の３の丸に相当か
外郭Ｃ（千葉大学付属病院の一画）
矢作砦

＊堀切＝主郭部＋外郭Ａと外郭Ｂは堀切されていたと考えられる。また、外郭Ｂの２か所の切り込み虎口も堀切が考えられる

3）千葉館（城）詰めの城か —— 主郭跡を歩く

①郷土博物館周辺＝博物館建設時は発掘調査が行われなかったが、後年の調査で直下南北に空堀が、東南側に１４－１５世紀ころの建物跡（一部礎石付き）を検出（前出）、城に関係すると見られる。

②本丸と２の丸を分ける堀切または空堀。

＊堀切と空堀は地面を掘って２つの曲輪に分け、敵の攻撃を遮断すること
空堀は平面だけ、竪堀は山裾だけ、堀切は平面と山裾を掘り切ること

③本丸跡＝発掘調査では建物跡は検出されなかった。

＊主郭部一帯から多数の人骨や石塔などが出土、城の前は墓地と考えられる

④現存する土塁＝高さおよそ５ｍ。曲輪の平場を作るとき削った土を押し出して作る。
本格的な土塁であり原氏時代に構築されたものだろうか。

＊土塁上から城の立地を体感する。雑木を切り払えば千葉港（江戸湾）と房総往還が一望

⑤神明社との間に堀切。橋（土、木）の形式や虎口は不詳

⑥物見台＝最先端に立地。井楼櫓？を建てる

⑦お茶の水への下り坂＝観光用後付け。城は防御のためわざと不便に作る

＊急がけ、城側から土を押し出し、切り岸

⑧お茶の水＝通路下りると源頼朝伝説のお茶の水（以下のコースを省略することがある）

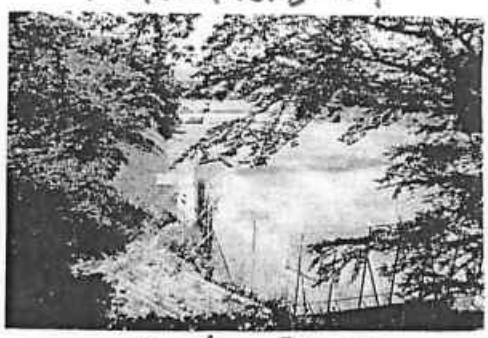
⑨都川と旭橋、大和橋＝千葉猪鼻城の外堀、軍港？
千葉館（城）といわれる千葉地裁を遠望

本丸土塁

千葉大医学部

大手内跡

お茶の水


大手堀切

←七天王塚

4）千葉大構内を散策しながら移動 —— 千葉猪鼻城外郭

①本隊は千葉城博物館前をスタート、およそ１時間をかけ県立中央博物館へ移動。
②外郭Ａ＝いまは文化会館になっている。
③外郭Ｂ＝千葉大学医学部、看護学部の一角。大学正門から構内へ。
　静かな構内の紅葉を楽しみながら数少ない城遺構を探る。
＊千葉大学＝戦前の千葉師範、千葉医大などを合わせて昭和２４年新制の国立１期校に
　人文、理、教育、医学部など７学部と大学院がある
④正門先の低地と亀岡橋側入り口は外郭Ｂの虎口で、バス通りを挟んだ切り口と大堀切か？
　次の医学部横の小路（虎口）も反対側に大きな切り口があり、同様大堀切が考えられる。
＊構内ではごく一部しか発掘されておらず未解明
⑤唯一の発掘調査地＝平成１４年の千葉大学調査区で古墳石室を検出。しかし中世の遺構、遺跡が発見されなかったことから千葉猪鼻城の規模を過少評価する考えもある。
＊当所および猪鼻３丁目公園調査で古墳主体部、五輪塔、宝きょう印塔、堀状遺構、かわらけなどを出土、また博物館周辺から多数の人骨が発掘されたことから城の前は墓域であったといえる
⑥千葉大学薬学部旧学舎飾り屋根
⑦七天王塚＝将門伝説などの謎に包まれた古塚。大手土塁残欠、一部は古墳跡と考えられている。
＊市教育委員会看板＝千葉大学構内に散在する７つの古塚は「七天王塚」または「七つ塚」と呼ばれ、古くから疾病、災害を除く神として崇められています。塚の上の古碑に刻まれている「牛頭天王」は千葉氏の守護神の一つで（中略）このことから千葉氏は猪鼻城の大手口に崇敬する北斗七星の形に七つの塚を配置して牛頭天王を祀り、一族の繁栄を祈ったものと考えられています。また一説にはこの七天王塚は千葉氏の七人の兄弟を葬った墓であるとか、平将門の「七騎武者」の墓とも伝えられていますが定かではありません。
⑧大手大堀切（野球場、テニスコートなどの低地）＝巨大堀切から付属病院の外郭部Ｃを遠望。
＊人工的でなく天然の独立丘陵の可能性もある
⑨大手虎口（大手門）跡＝櫓門？

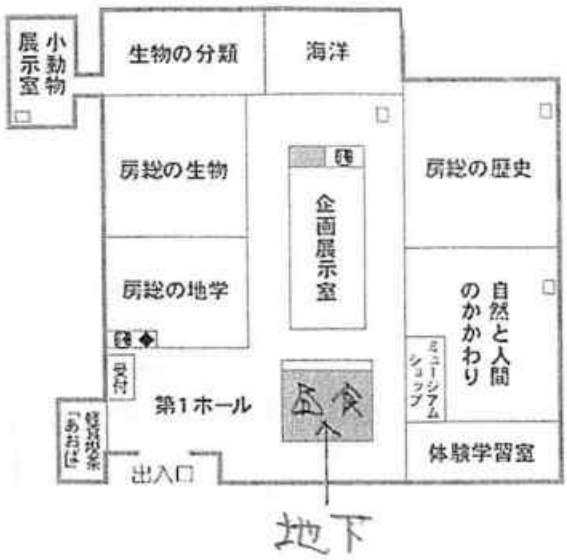
千葉県の自然と人間テーマに「房総の歴史」

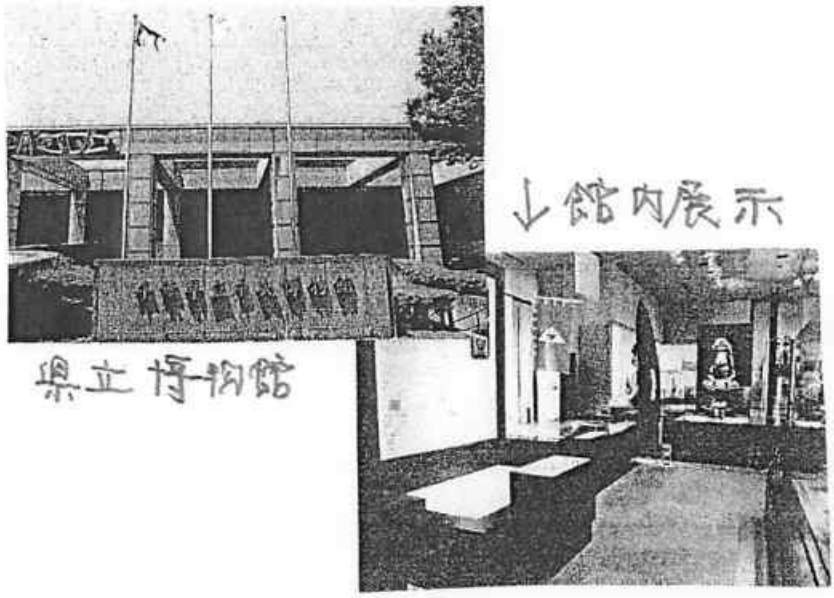
1）テーマは「千葉県の自然と人間」 —— 県立中央博物館

①平成元年開館の県立博物館。テーマ＝千葉県の自然と人間
＊中央博物館本館（千葉市青葉の森公園）＝
　房総の地学、房総の生物、海洋、生物の分類、房総の歴史、自然と人間のかかわりコーナー
＊屋外の博物館「生態園」を併設
＊大多喜城分館（大多喜町）、大利根分館（香取市）、海の博物館（勝浦市）

2）「房総の歴史」コーナーを自由見学 —— １１時３０分から昼食、自由見学

①１階ロビーで昼食
　席を用意していただいて いますが、公園内または軽食喫茶・あおばの利用もできます
②「房総の歴史」自由見学
　旧石器から古墳時代、古代、中世、中世から近世へ、近代・現代、郷土の歴史を見直そう
③特別展（本年度秋の展示）「砂のふしぎ」小さな砂、大きな物語（１２月４日まで）





原下総×上総、両総攻防境目の城

1）千葉宗家№２の実力者・原家居城 —— 生実（北小弓）城

①生実の地名由来＝古代の帰化人・麻積連（おみのむらじ）とその一族が住み付いたことに由来。おみのがおゆみに転訛、はじめ大弓、小弓と書き江戸時代に生実となった。

②生実城（北小弓ともいう）＝天文７年（1538）千葉一族、原胤清築城とされるが、それより６０年ほど早い文明はじめ（1470ころ）原種房築城説もある。

＊原氏＝千葉氏一族。関東戦国時代、馬加千葉氏と組んで千葉宗家を倒し、代々千葉氏№２の執権職を勤めた。生実を本拠に勢力を拡大、胤貞のとき臼井城を奪取して両領を支配、本拠地を移した。
以後千葉氏から自立して直接北条氏に属した。

③小弓城、生実（北小弓）城、千葉猪鼻城、原生実系３城の親子関係は不詳。

＊立地的には生実城を本城に、小弓、猪鼻城、市原・能満城を支城、枝城を繋げたいが？

④小弓城、生実（北小弓）城は主に原氏居城であったが房総往還交通要衝、両総境目の城で、争奪が繰り返された。所領変遷は未詳だがほぼ別掲ようであった。

⑤小弓御所＝足利義明の居城（御座所）。小弓城または生実城を居城とした。

＊足利義明＝鎌倉府の正統・古河公方２代政氏の２男に生まれるが、兄高基と対立、上総武田氏に迎えられ小弓城を居城として小弓御所を称した。上総、下総、安房を勢力下において兄と同盟関係を結んだ小田原北条氏と関東の覇権を争うが天文７年国府台の戦いで敗死。八幡地区には伝八幡御所跡、伝小弓公方の墓などがある

＊「重俊院の僧語りしは「寺を去ること東の方数歩にして小弓御所義明の館跡あり」（明和２年、金ケさく紀行）

⑥足利義明八幡御所の再検討＝最近、新しい発表があった。今後の研究解明が期待される。

＊「小弓公方足利義明」（千野原靖方著）＝

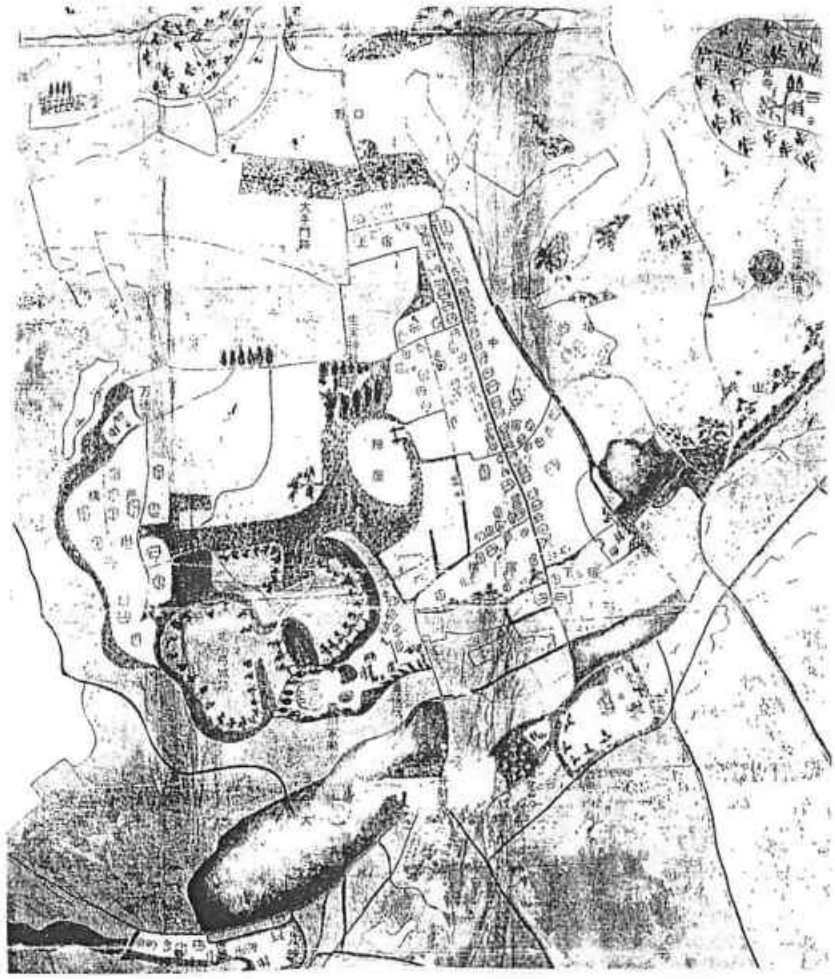
永正１４年（1517）１０月		真里谷武田氏、小弓城攻め取る
〃	１５年７月	足利義明、高柳（埼玉県栗橋町）から八幡郷へ移座
〃	１７年または１８年	義明、小弓移座

⑦天正１８年（1590）豊臣秀吉の小田原攻略で原氏は後北条、千葉氏とともに滅亡する。

＊原勢は小田原の役帰路、野田十文字　（千葉市誉田）の戦いに敗れ滅亡したとされる

生実陣屋

北生実村に所在した藩陣屋絵図（清和正神氏旧蔵）



生実城（陣屋）絵図

2）生実城を詰めの城とした近世陣屋 —— 生実森川藩１万石陣屋

①天正１８年（1590）徳川家康の関東入府にともない家康の家臣・西郷家員が５０００石で入封。忠員、康員、正員の４代、元和６年加増を得て東条１万石に栄進した。

＊西郷氏＝徳川家康の側室・西郷局（お愛）の婚家。お愛は夫西郷義勝の死別後家康に仕え秀忠と忠吉を生み２８才で逝去、義勝の兄家員が家康の関東入府にしたがった。子孫は生実、東条、下野上田と転封したが元禄時代に勤務不良として改易、のち許され５千石の旗本として明治維新に及んだ

＊西郷氏の居城（居所）は小弓または生実だが未詳。幕府は「元和えん武」前の慶長後期から山城廃止を先行しており、生実陣屋地の可能性もある

⑥寛永３年（1626）森川重俊が１万石で入封、旧生実城を利用、山城の本城（ほんじょう）地区を詰めの城として接続する平地に陣屋を構築する。重俊は秀忠に近仕、西の丸老中に進むが、寛永９年秀忠が没すると４９才で殉死した。

＊当時の風評は将軍継承をめぐり忠長派であった重俊が家光新政権での改易を案じたと噂された。

⑦子孫は譜代大名として１２代続き、内若年寄が４人、大坂定番が１人出た。最後の藩主は俊方。明治４年の廃藩置県で東京に招集され明治１０年没２８才、明治１７年嫡男恒が子爵。近年絶家している。

⑧陣屋は明治７年廃城。新政府大蔵省により建物、設備は競売、残りは処分された。

＊移築建造物は伝承されていない

3）森川氏御殿跡にレストランや民家が立ち並ぶ —— 生実城と陣屋地を歩く

①生実池と北側低湿地（プロローグは車中から）

車中左正面に望む生実池は戦国期生実城、近世生実陣屋の外堀（水濠）。

生実城東側、房総往還方面からめての守り、南側の外郭部へ迂回していた。

一方北側は兵の進撃を阻む低湿地帯、昭和４０年代の宅地造成で一変したが生実堀正面に比高１５ｍほどの急丘が聳え、そこに生実城の本丸があった。天然要害の地を車中から体感しながら城地へ。

②元城内、生実重俊院駐車場で降車。生実城、陣屋地を巡検して再び重俊院に戻る。

＊案内は徒歩１時間。自信のない方はバスに残るか、途中引き返してください

③見渡す高台一帯が城地。重俊院の中世はネゴヤ、山門周辺に木戸、中央大通り坂上が大手方向、主郭本城は北側５０ｍにあった。しいて縄張りをいえば「輪郭式＋梯郭式」、本城部分は「うろこ型」とでもいうべきだろうか。城下を城内に取り込んだ「総構え」となっている。

④生実（北小弓）城遠望＝城山遺構は団地造成のため消滅、跡地本城公園方向を遠望する。

＊本城（ほんじょう）公園看板＝

千葉氏は上総方面の備えに小弓城を築き、重臣原氏に守らせていた。その後後北条氏と小弓公方足利義明、里見氏との勢力の拮抗する所となった。天文７年第１次国府台合戦に勝った後北条方の原氏は、領地を取り返し、新らたに北小弓城を築きここを本拠地とした。天正１８年後北条は滅亡しこの城は徳川家康のものとなり西郷家員が支配するところとなった。寛永４年生浜地区を中心に１万石の大名となった森川重俊は生実城の一画に陣屋を築き、この付近を治めるようになり、以後１１代２４３年間続きました。

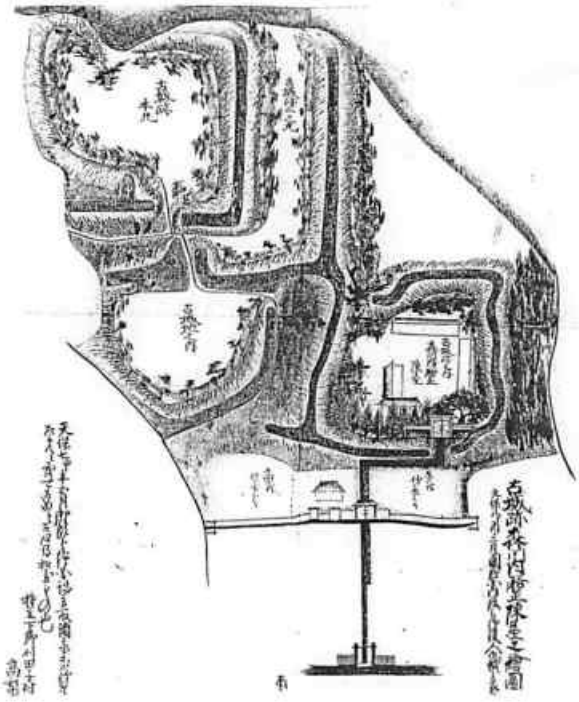
生実（小弓）城主、生実藩主の変遷

享徳４年か－文明３年	＊原　胤房＝越後守、越後入道。小金城から、小弓城で討ち死に		
文明３年　－永正１４年	＊〃　胤隆＝宮内太輔、讃岐守、越後守。落城、蓄電（討ち死に？）		
永正１４年－〃　１６年	＊武田信保（番城？）＝三河守、如鑑。真里谷城から攻め取る		
〃１６年か－天文７年	＊足利義明＝小弓公方、左衛門督。古河公方３男招聘、国府台で討ち死に		
天文７年　－〃２４年か	＊原　胤清＝式部大夫。復帰、隠居		
〃２４年か－永禄４年	＊〃　胤貞＝上総介。臼井城から		
永禄４年　－〃　７年	＊正木時茂（番城？）＝里見方、勝浦、小田喜城主。＊１		
〃　７年　－〃１２年	＊原　胤貞＝前出。復帰		
永禄１２年－天正１７年	＊〃　胤栄＝式部大夫、千葉宗家執権、千葉介。臼井城主兼務		
天正１７年－〃　１８年	＊原氏番城（原吉丸？）		
〃　１８年－慶長２年	西郷家員＝弾正左衛門	生実５千石	
慶長２年　－〃　６年	〃　忠員＝孫九郎	〃	
〃　６年　－元和６年	〃　正員＝若狭守	〃	東条１万石へ栄進
元和６年　－寛永４年	幕府直轄天領		
寛永４年　－〃　９年	森川重俊＝出羽守	生実１万石　秀忠老中	
〃　９年　－寛文３年	〃　重政＝伊賀守	〃	
寛文３年　－宝永３年	〃　重信＝出羽守	〃	
宝永３年　－享保１７年	〃　俊胤＝紀伊守、出羽守	〃	若年寄
享保１７年－〃　１９年	〃　俊常＝内膳正	〃	
〃　１９年－明和元年	〃　俊令＝兵部少輔	〃	
明和元年　－天明８年	〃　俊孝＝紀伊守	〃	
天明８年　－天保９年	〃　俊知＝紀伊守、内膳正	〃	若年寄
天保９年　－安政２年	〃　俊民＝紀伊守、出羽守	〃	若年寄
安政２年　－〃　５年	〃　俊位＝出羽守	〃	
〃　５年　－文久２年	〃　俊徳＝出羽守	〃	
文久２年　－明治４年	〃　俊方＝内膳正	〃	廃藩置県

前回記載分の一部を修正再掲

＊印＝八幡地区は生実城の支配下に置かれた

＊１＝取り合い、不安定な状態が続いた



城は鎌取方面から東京湾に向かって東西に延びる台地の先端に築かれ、北と南側は谷、西は生実池によって囲まれ、東は北から入り込んだ浅い谷に堀切を入れて台地を区切り、その規模は６００m四方に及んでいる。森川氏は城の一画に陣屋を構えたので主郭部はそのまま残っていたが昭和４４、４５年の団地造成により土塁、空堀などの施設は消滅しました。

＊森川氏陣屋時代は詰めの城で遺構は昭和４０年代まであった

⑤陣屋絵図（北生実村高梨家旧蔵）

陣屋地＝本丸御殿跡。ほかの城や陣屋に比べて規模は小さい。１万石クラスの陣屋。

玄関、表（役所部分）、中奥（藩主私邸）、奥（藩主家族）、蔵、厩、下級藩士長屋

＊現況はレストラン、ラーメン店、民家など。藩主御殿の面影はない。東面に土塁、空堀は現存、西、北面空堀跡などの地形が遺構を偲ばせる

⑥生実城と生実陣屋（教育委員会説明看板）＝

いまから５００年ほど昔の戦国時代後半、千葉市南部は房総の武田氏と、千葉氏、小田原の北条氏が覇権を争う舞台となりました。生実町の台地上に広がる生実城は天文８年の築城から天正１８年の落城までの約５０年間に幾多の攻防戦が展開されています。江戸時代になると城の一部が陣屋に改められ、寛永４年から幕末までの約２４０年間、幕府の要職に付いた森川家の城下町として、また房総往還を望む交通要衝として生実町は栄えました。生実城の堀跡は戦国時代後半から江戸時代にかけての貴重な資料や情報を秘めた第１級の遺構です。

⑦生実神社＝創建不詳で生実城主原氏の時代に逆上ると見られる。宝永７年森川俊胤が社殿を造営して城の守り神とした。現存土塁、空堀。かつて幅およそ１０m、深さおよそ７m、土塁高さおよそ７m、屏風折れ、横矢、北条流二重土塁、中世弓矢の戦いを意識している。

＊元気な方は途中まで降りる

⑧大手口跡碑＝生実城大手門跡。土塁、空堀は現存、升形、丸馬出しは土中消滅、門形式は櫓門か？

＊発掘調査で升形、丸馬出しを検出、５００m先千葉急行線学園前駅の近くの窪地も大堀切りか？

⑨陣屋本丸虎口門跡、二重升形、土塁一部が現存。門形式は未詳、現存絵図は冠木門と棟門？と異なる。

⑩大手南西側の郭（絵図参照）＝大手門？、続き塀は長屋風で武者窓、土塁で囲む。絵図は内部を長屋とする。１万石の小藩であり、一部重臣を除き藩士の大半は長屋住まいであったといえる。

＊南西側の郭と生実神社、北側の郭が２の丸、３の丸的機能をはたしている

⑪参勤交代のスタート地点。毎年１２月出府、正月は江戸、８月に暇、国許に戻った。

＊大手門？前の細長い小さな広場は行列の供揃い地、馬つなぎといったとも言う。

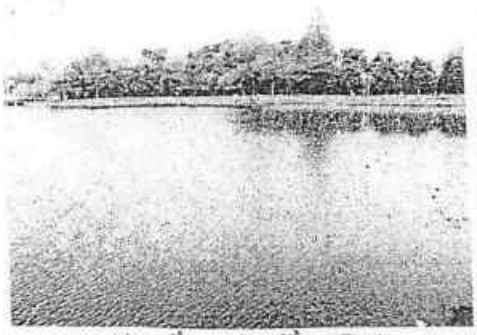
⑫総曲輪、町並、上宿、中宿、下宿

⑬土下座場＝領民たちが土下座して藩主を見送り、出迎えた場所

＊参勤交代の供揃いは継ぎ立て人足を含めておよそ１００人。村名主が先導した。

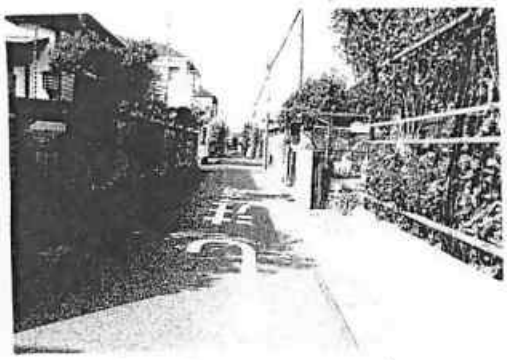
房総往還を船橋、千住経由で陸路１２里、江戸をめざした。

生実重俊院と生実の歴史＝今井公子先生（別資料）



外濠（生実池）

本城公園



陣屋御殿跡

陣屋空堀

大手口跡

重俊院

千葉氏〈下総国〉

家紋／九曜星
居城／下総国佐倉城

常胤…(略)…満胤―廉胤―孝胤―勝胤―昌胤―利胤―親胤―胤富―邦胤―重胤

千葉氏は、源頼朝の鎌倉幕府創設にあずかって力のあった常胤以後、下総国を基盤とする名族であったが、南北朝期頃より一族の内部が分裂して互いに争い、勢力が衰えていった。特に康正元年（一四五五）、馬加康胤は千葉介胤直を千葉城におそい、胤直とその子胤宣は敗れて千田荘に逃れたが、そこも囲まれ、ついに自殺した。これによって康胤は千葉家を相続し千葉介となったが、上杉氏は胤直の弟胤賢の子実胤・自胤をたすけて市川城に居らせ、千葉氏を再興した。これ以後、千葉氏は二流に分かれて相争うようになる。

戦国時代の千葉氏歴代のなかで、最も活躍した人は胤富であろう。胤富は千葉介昌胤の二男で、下総東部に領地を与えられて森山城に住した。いっぽう昌胤の嫡男利胤は千葉介を継いだが、早くこの世を去り、その後を嫡子親胤が相続した。しかし、親胤は驕慢な性格で人望がなく、家臣に殺された。その後を森山城にいた胤富が一族におされて佐倉城に移り、千葉家を相続した。胤富は小田原北条氏の援助を得て安房国から北上して来る里見氏、常陸から南下して来る佐竹氏の勢力と戦い、永禄九年（一五六六）には越後上杉謙信と里見氏との連合軍に臼井城を囲まれ、落城寸前となったが、よくこれを撃退した。

胤富死後は邦胤が相続したものの天正一三年（一五八五）に近臣に殺され、幼少の子息重胤が跡を継いだが、ほとんど名目のみで、実質は後北条氏の庇護を受けて小田原に住した。天正一八年の豊臣秀吉の小田原攻めには、小田原城に籠城、後北条氏とともに滅亡した。（川名）

「歴史読本」（'84-3）戦国大名総覧

正友　市十郎　藤左衛門　伊豫
井伊兵部少輔直政につかふ。

遺跡を継西郷に住す。元和二年三月四日竹腰の戦に潰員等と共に防戦して討死す。法名義勝。　妻は鍋鮫部出羽守定久が女、後妻は霞笠之助正尚が養女。

家員
初員好　新太郎　孫九郎　彈正左衛門　實は潰員が長男、母は忠次が妹。

元和二年三月宗家義勝竹腰にをいて戦死す。男子ありといへども僅に一歳なるが故に、家員遺跡を継て其女を妻とす。三年十二月三方原の役に東照宮にしたがひたてまつり、力戦して疵をかうぶり、家臣等もおほく討死す。家員が騒年にして武勇ある事を感じたまふ。天正二年四月武田家の森山藤三郎兵衛昌長西郷をせむ。家員馳駆郷大玉川に陣してその軍をむかふ。ときに宮沼定盈加勢として隠岩り、共に力戦して火炮を放てきびしく攻討しかば、昌長終に敗走す。これを追て寶寺の金剛堂に至る。このとき敵兵死傷のもの多し。三年五月長篠の役に、酒井左衛門尉忠次が手に属して、寄鼎の砦にむかひ奮戦し、家臣等多く討死す。六年三月遠江国牧野城を守衛す。十一年駿河国江尻の城番を勤む。十月駿臣大岡尾張国に侵向の時仰により赤見の砦を守る。十六日従兵を増の料として月俸五百口を賜ひ御朱印を下さる。十八年小田原の役に供奉す。この年関東御人国により、八月十九日家員が西郷の采地を改られ、下総国千葉郡生実にうつされ五千石を知行す。十九年七月九戸一揆のとき岩手沼に扈従す。慶長二年八月十八日死す。年四十二。法名日如。妻は義勝が女。

女子　家員が妻。

勝忠　孫兵衛
紀伊大納言頼宣卿につかふ。

忠吉　勝助　助左衛門　庶長子たるが故に家を継す。近藤石見守秀用が養子となる。

忠員　孫九郎　母は義勝が女。
文禄三年東照宮（台徳院殿）にまみえたてまつり、御山緒の故をもつて御前にをいて元服し、台徳院殿より御諱字及び左文字の御脇指をたまふ。慶長二年遺跡を継、五年九月関原の役に供奉し、十七日佐和山落城のとき、石川長門守康通内藤紀伊守信正と共に仰をうけて城受取の役をつとめ、それより伏台徳院殿に仕へたてまつり、采地を賜ひ、後加増ありて上総、下総、相模三国の内にをいて一萬石を領し、下総国千葉郡生實を居所とす。八年奉行職に列し奉賞に判形を加ふ。この年大猷院殿川越に放鷹あり。重俊御使をうけたまはり彼地に赴く。後出羽守にあらたむ。九年正月二十四日台徳院殿薨じさせたまふのとき殉死す。年四十九。活国正英重俊院と號す。生實の重俊院に祭る。これ重俊かつて開基せるところなり。後代々邪地とす。宮は大久保相模守忠隣が養女。

重政　半弥　伊賀守　従五位下　母は忠隣が養女。
寛長十三年生る。寛永五年はじめて台徳院殿に拝謁し、九年遺領を継、十一年大猷院殿洛に上らせたまふの時従ひたてまつり、十四年本城大奥修造のことを助く。明暦三年十二月二十七日従五位下伊賀守に叙任し、寛文三年正月二十三日卒す。年五十六。国徳全照一院と號す。宮は坂倉周防守重宗が女。

重名　森川織部俊世が祖。七兵衛　下総守　母は上におなじ。

重頼　森川越三郎俊傳が祖。金三郎　八郎右衛門　母は上におなじ。
母は上におなじ。浦口出雲守宣直が宮。

女子

森川氏　家政流（封分）　西郷氏

【森川】本国尾張

森川紀伊守俊知

菊之間
天明八申八月　家督
朝敵大夫
御内室　分部左京亮光実娘
参府　毎年十二月
御暇　毎年八月

黒ぬり
白角ときだし
徒のわき
押こん もん メ引
かごこん 紋メ引

御嫡森川為三郎俊乂
御内室　妻父紀伊守俊知娘

〔時献上〕参府干鯛　在菊同　夏寄居虫塩辛一壺　冬坊一龍

縛

○上　麻布日ケ窪　大手ヨリ廿五丁
○中　あさふひろを
○下　四谷つきち
禅宗　位牌所　にしのくは　忠岸院
菩提所　下総生実　重俊院

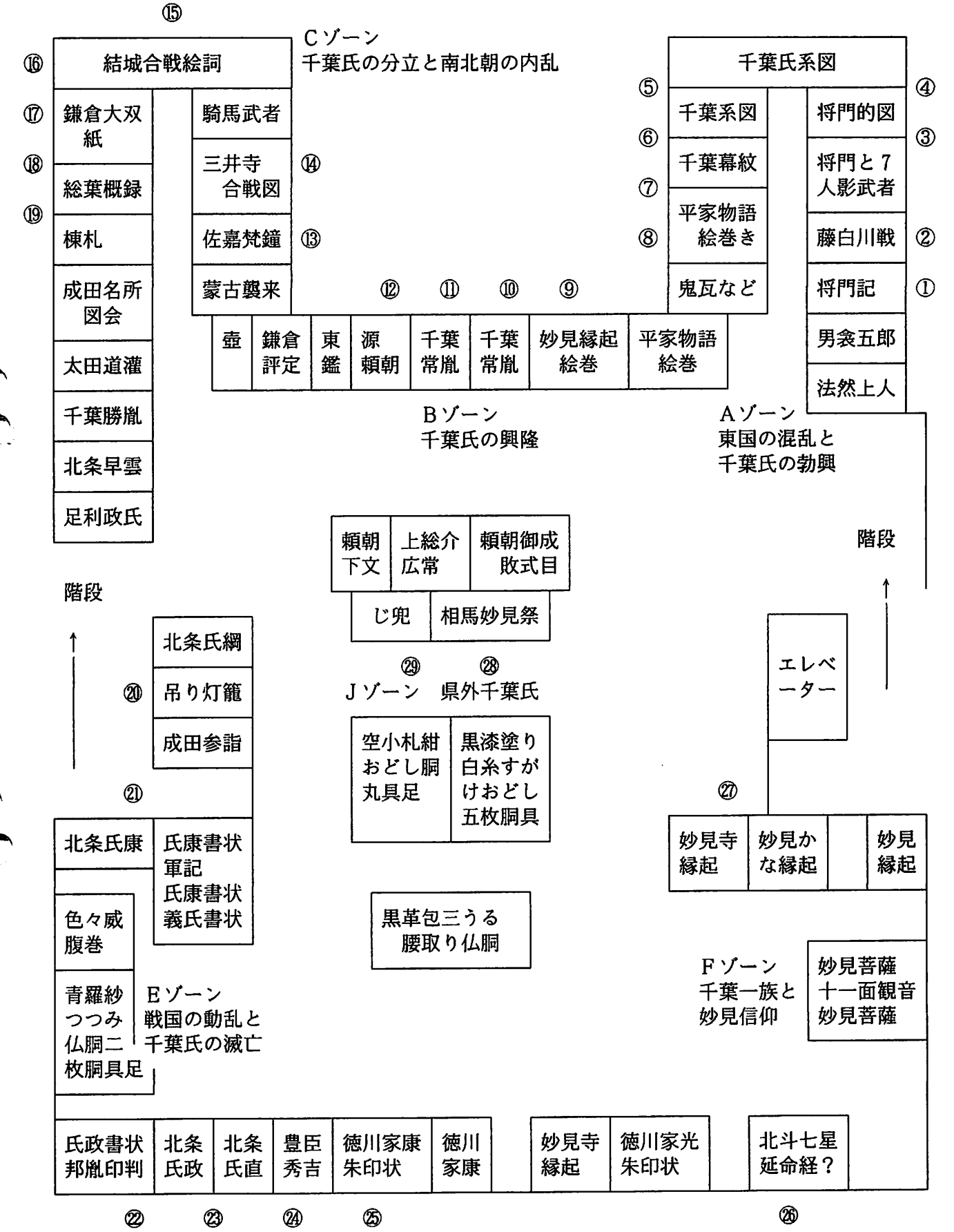
▲菅木七郎右衛門　▲京僧極左衛門
〔用人〕▲安藤佐治右衛門　▲市原車之助　▲大野久右衛門
〔側用人〕▲増井七左衛門
〔御城使〕▲大野久右衛門
〔添役〕▲氏家求馬
・一万石　在所下総千葉郡生実
・江戸ヨリ十二里
・寛永年中ヨリ森川氏代々領

足利義明
原氏
武田氏
正本氏資料は
次回（十一）に
掲載します

「編年江戸武鑑」文政十年

千葉市立郷土博物館　3階「千葉氏の興亡と妙見信仰」配置図

○数字はパネルNo.
解説シートが常備されています



千葉城博物館と千葉城跡主郭部分

物見やぐら跡

館内展示

駐車場

堀切　空堀り

千葉城跡

千葉城博物館正面

お茶の水

本丸広場

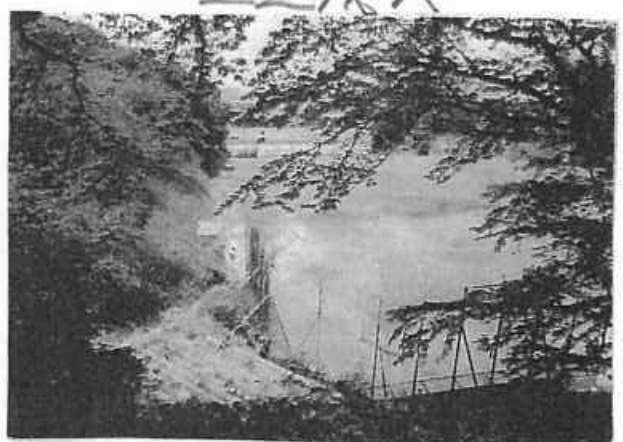
千葉常胤

2 千葉城跡：外郭（千葉大周辺）

土塁残欠

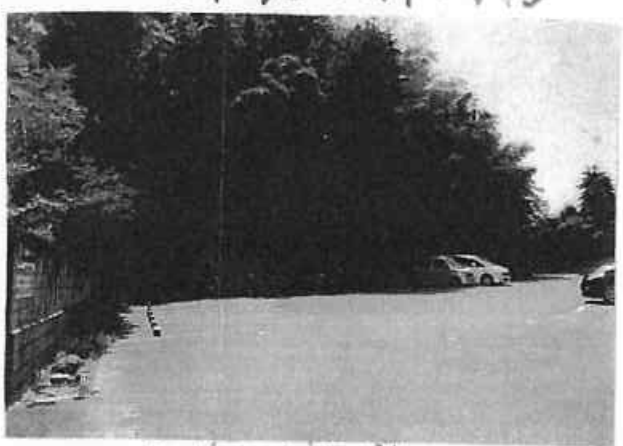
千葉城外カク

外堀（鬱川）



大手空ボリ

外郭金沢



土塁、切岸

3 中大博物館、生俣院

森川生俣の墓

生俣院

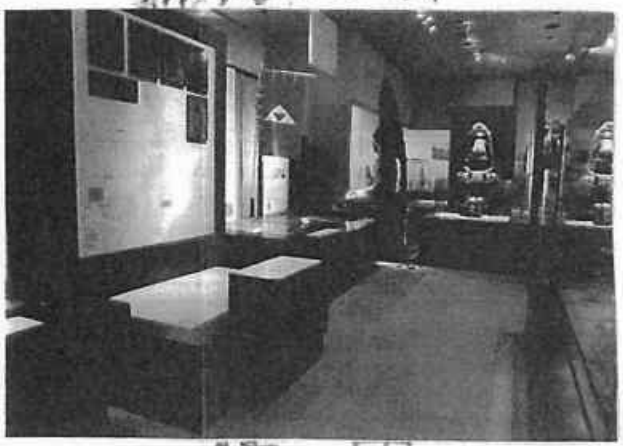
中大博物館

牧本山門

展示のアーチコーナー

歴代藩主の墓

森川家墓所入口

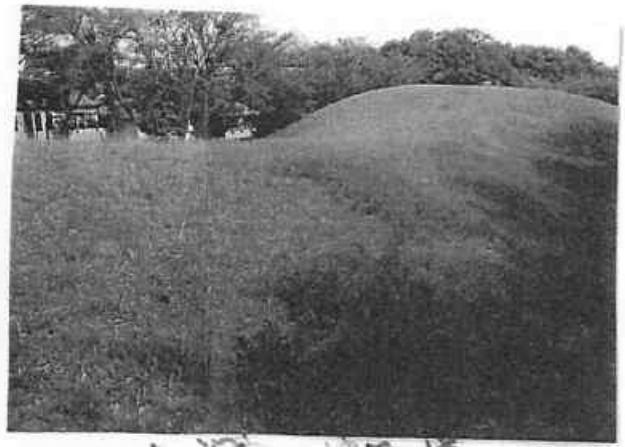


館内

千生城と生実陣屋

陣屋大手表口

生実神社



大覚山古墳

小城大手山

付板跡

生実陣屋絵図

本城公園

空堀

外堀

5 埋蔵文化財センター、小弓城

小弓城工部（本丸）

小弓城空堀

千葉市地域センター

残る空堀

小弓城全景

館内風景

八幡史学館＋1

千葉市埋蔵文化財センターと足利義明ゆかりの「小弓城」を歩く

平成２３－１１－１５　　山岸弘明

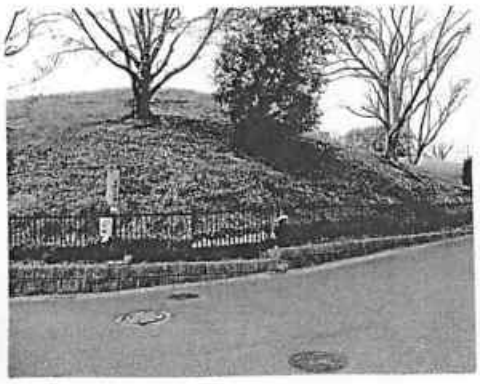
大覚寺山古墳と埋蔵文化財センター（山下亮介先生）

１）菊間国造ゆかりか、千葉市最古最大の「大覚寺山古墳」

①県市教育委員会史蹟看板＝千葉県指定史蹟、大覚寺山古墳

生実丘陵の南端に突き出した小支丘全体を利用して築かれた。全長約 63m の前方後円墳です。未発掘ですが墳丘の規模や形態などから４世紀後半のものと思われ、千葉市では最古最大の古墳です。

５世紀(4 世紀後半)ころは中央政権の確立とともに南関東に古墳が出現する時期なので、生実中学校の校庭にあった七廻塚古墳とともに当時の大和朝廷と東国との関係を知る上で貴重な存在です。

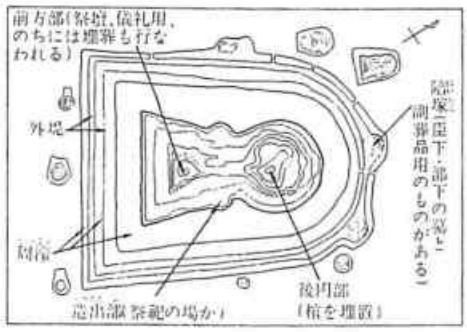


古墳時代　高い封土をもった有力者の大墳墓が築造された４世紀初めころから７世紀までを古墳時代という。古代国家の成立と浸透の時期であり，中国・朝鮮との外交が積極的に行なわれ，その影響は文化面でも著しい。

＜古墳時代の時期区分＞　４世紀になると大形の前方後円墳が畿内を中心に出現するが，これらの古墳は竪穴式石室内に木棺や石棺をおき，中国製の鏡や硬玉の勾玉，碧玉の装飾品，鉄製品が副葬されることが多い。墓であるとともに祭祀の場であり，大王や中央豪族の司祭者的性格を示している。

下表に古墳時代の時期区分とその特徴をあげる。古墳は北海道・東北北部と沖縄諸島を除く各地にひろく分布するが，それぞれ地方色をもつものもあり，統一国家形成の過程が単一の歩みでなかったことがわかる。

時期	年代	形態，性格	石室，埴輪	主な副葬品
前期	4 世紀初頭 〜 4 世紀後半	山麓・台地利用 前方後円墳 首長の権威を誇示	竪穴式石室・粘土槨 円筒埴輪，家形・器財埴輪	中国鏡と仿製鏡，玉類，剣，鉄製農工具 石製模造品
中期	4 世紀末 〜 5 世紀末	平地利用 前方後円墳，二重の周濠をめぐらすものもある 大王と有力豪族の墓	人物・動物埴輪の出現 横穴式石室があらわれる	馬具・金銀製装身具など朝鮮系 直刀・鉄鏃・甲冑など 須恵器
後期	6 世紀初頭 〜 7 世紀後半	小規模化 群集墳・横穴群ふえる 地方官吏・有力農民の家族墓的性格	横穴式石室 円筒埴輪，器財・人物埴輪が関東で発展	直刀・土師器・須恵器・金環など 壁画表現がふえる 仏教的遺物もある



前方後円墳の部分名称（仁徳陵古墳の場合）

＜古墳の形状と分布＞　土を高く盛った古墳を外形からみると，円墳・方墳・前方後円墳の三つに大別される。前・中・後期を通じて一般的な形は円墳で，方墳の築造は地域的性格がかなり強い。前方後円墳は，前期に西日本各地の丘陵部を中心に造営され，中期には河内平野などでは平野部にも巨大な王陵が出現し，このころから，北海道・沖縄を除くほぼ全国につくられるようになる。大和政権の政治的影響が反映していったのだろう。

特殊な墳形として，前方後方墳・帆立貝式古墳，まれに双方中円墳などもある。後期には，小円墳が密集する群集墳や，丘陵の傾斜地に穴をあけた横穴などがみられ，古墳造営の階層が広がっていったことを示している。

古墳の形式

「歴史散歩事典」

2）千葉市の埋蔵文化財を紹介する「埋蔵文化財センター」

①千葉市の遺跡、遺物調査研究、保存管理、公開活用を目的に平成□年創館、1階展示ホールに市内の各地遺跡で発掘された埋蔵文化財を紹介するほか、餅ヶ崎遺跡の竪穴住居や南河原坂遺跡の瓦窯を復元展示している。年末年始祝祭日などを除き通年開館、無料。

②前回の「八幡史学館」バス研修でご案内した生実城遺跡、平成21年度生浜地区巡見の浜野城(生実藩蔵屋敷)跡遺跡を展示、また復元の南河原坂の瓦窯遺跡では上総国分僧寺、尼寺の瓦を焼いている

主要説明パネル

①竪穴住居の変遷＝

竪穴住居の出現は獲物を追って移動する生活から脱し、すみやすい土地を選んで定住したことを意味します。餅ヶ崎遺跡では約8千年前の竪穴式住居址が発見されていますが人々が定住し集落を形成するのは縄文時代前期になってからと考えられています。（中略）

竪穴の形は初期のものは長方形で浅く、縄文時代中後期では直径4～5mの円形のものが一般的となります。弥生時代には楕円や隅丸方形のものが多く、このころから住居に大小の差が生じてきます。古墳時代の竪穴は正方形となり後期になるとそれまでの炉に変わってカマドが作られます。

②芳賀輪遺跡と古代住居の復元＝

芳賀輪遺跡は千葉市では比較的数の多い奈良、平安時代の遺跡のうちでも代表的な遺跡といえます。多様な出土品から古代東国の人々の生活を伺うことができます。(後略)

③昔のアクセサリー＝

耳、腕、首などを飾るアクセサリーの一つに玉があります。旧石器時代より作られ、その伝統はその後の縄文時代、弥生時代、古墳時代にも受け継がれています。発掘調査によりさまざまなかたちの玉が発見されています。

④豪華な副葬品(七廻塚古墳)＝

生実町周辺の台地に広がる低地は南方の村田川の三角州へ続き市内でも有数の水田地帯となっています。この低地を見下ろす台地上に作られた大覚寺山古墳、七廻塚この地域を支配した豪族の墓と考えられています。七廻塚古墳は生実東小学校内に所在した古墳で昭和33年に調査されました。(中略)鉄製武器、農工具、滑石製立花が副葬され、また葬儀に用いられた銅鏡、石ぐしろ、石製模造品も埋められていました。5世紀代前半の製造と考えられています。

⑤掘り出された千葉市の遺跡＝

旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代(南河原坂瓦窯跡群)、中近世(生実城)

⑥南河原坂窯跡群の瓦窯＝

あすみが丘(旧小食土町)で発掘された平安時代初頭(9世紀前半)の瓦窯を忠実に復元したものです。長方形の焼成室と逆三角形をした燃焼室をもち、これらの室を3本の穴(分炎孔)で直結しています。燃焼室で生じた炎が分炎孔をくぐり抜け、焼成室床面の溝を伝って牀台上に並べられた瓦を焼き上げる構造です。焼成室の天井は瓦を取り出すために破壊されているので残っていません。焼成室床面が水平で瓦を積み重ねて作った床を」築き、溝を造り出している構造から［有牀式平窯」あるいは［ロストル式平窯」と呼ばれています

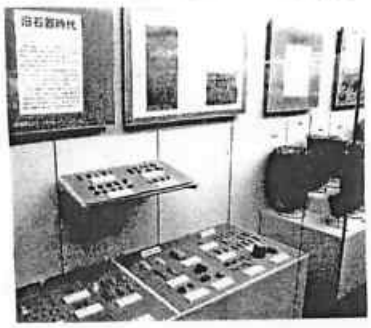
埋蔵文化財センター

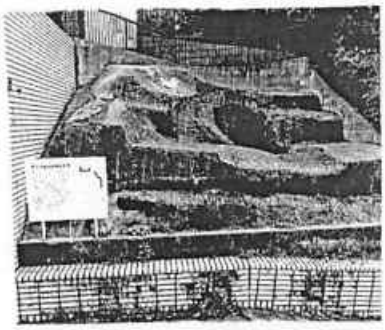
瓦窯の復元

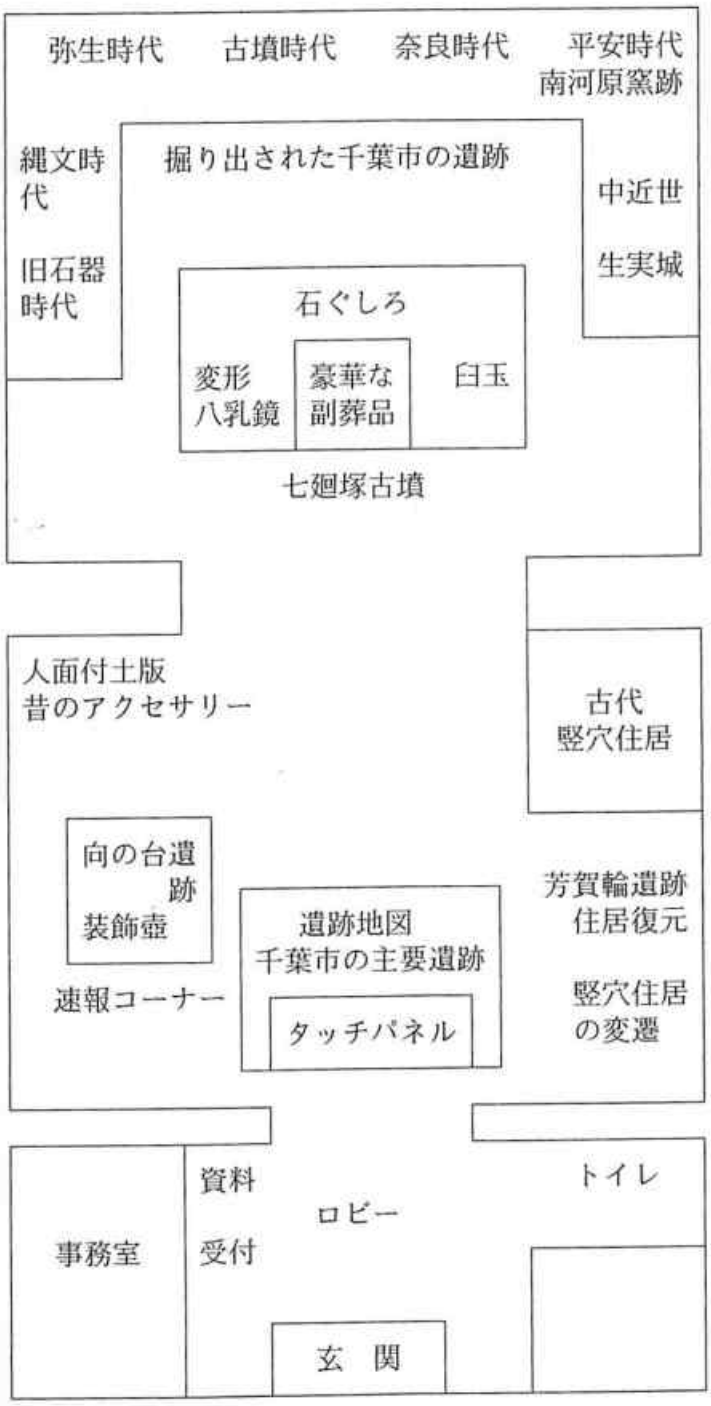
→ 竪穴住居の復元

速報コーナー

副葬品コーナー







千葉市埋蔵文化財調査センター　配置図

屋外展示

南河原坂窯跡群の瓦窯

小弓公方(伝八幡御所)足利義明御座所＝小弓城

1）少なくとも５回は落城した上総、下総争奪、境いめの城

①生実原氏と生実(北小弓)城については「八幡史学館目」第４回資料で紹介した。今回は続編。

②小弓城は生実城の南東およそ１ｋｍ、下総台地先端に立地する平山(丘)城で、創建は不詳だが享徳４年(1455)ごろ生実原氏築城が考えられる。天文７年以降本拠を生実城に移して支城となり、天正 18 年または江戸時代はじめに廃城となった。戦国時代、上総、下総国境、境いめの城で、生実支城時代を含め少なくとも上総武田氏、小田原後北条氏、大多喜正木氏、小田原北条氏、豊臣秀吉軍によって落城または不戦開城した。

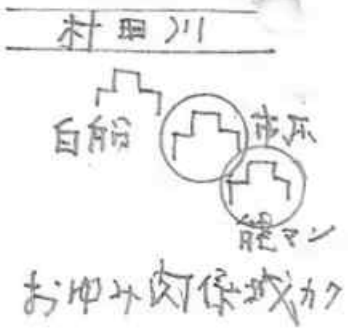
＊全国の城は２万とも３万ともいわれる。うち実戦の経験のある城は30%以下、落城した城は一握りしかない。房総戦国の代表的な城といえる。

③はじめ生実原氏の本拠で、永正 14 年上総武田氏が攻め取り、小弓公方足利義明が御座所とした。

④戦国中後期も両総の取り合いが続き、最後は北条氏の所領で原氏が復帰したが豊臣、徳川軍に敗れた。後期は生実(北小弓)城を本城に、小弓城、千葉猪鼻城、上総市原城、能満城を含めた房総往還沿い城郭群で本支城網を形成したと考えられる。

＊本城公園教育委員会看板＝千葉氏は上総方面の備えに小弓城を築き、重臣原氏に守らせていた。(中略)天文７年新たに北小弓城を築きここを本拠地とした(前報参照)

＊近年の研究で義明当時の本城は生実城で、小弓城は後世の支城とする説がある。縄張りの比較、明和年間の重俊院僧語録(前報)などを根拠としている。しかし永正６年(1509)におゆみを訪れた宗長の紀行文「東路のつと」の記述が小弓城と合致するなどの問題点もある



小弓城ご案内コース

2）兄高基と対立、上総武田氏に迎えられて小弓御所を称した風雲児

①足利義明は長禄年間(1488 ころ)古河公方足利政氏 2 男として誕生。幼名愛松王丸、得度して空然、後宗斉と改める。文亀年間鶴岡八幡宮若宮別当＝雪下殿(古河公方№2、寺社行政担当)に進み、高柳(埼玉県栗橋町)を御座所とした。永正はじめ父子兄弟が対立、兄高基は父を追放して古河公方 3 代に就任。永正 9 年(1512) 宗斉は自立のため還俗、義明を名乗る。

②一方八幡、生実地区も上総、下総両勢力の争奪地で千葉原氏と上総武田氏が激しい所領権争いを繰り広げていた。永正 14 年 10 月真里谷を本拠とする武田信保が原胤隆を攻め落として一帯を制圧、しかし戦況はなお不安定であった。信保は盟主として義明を招聘する。武田氏にとって傀儡とするはずの義明であったが目論みは大きく崩れる。まもなく義明と不仲となり信保は憤死した。のち一族間の内紛で勢力を減退、天正 18 年武田氏は滅亡する。

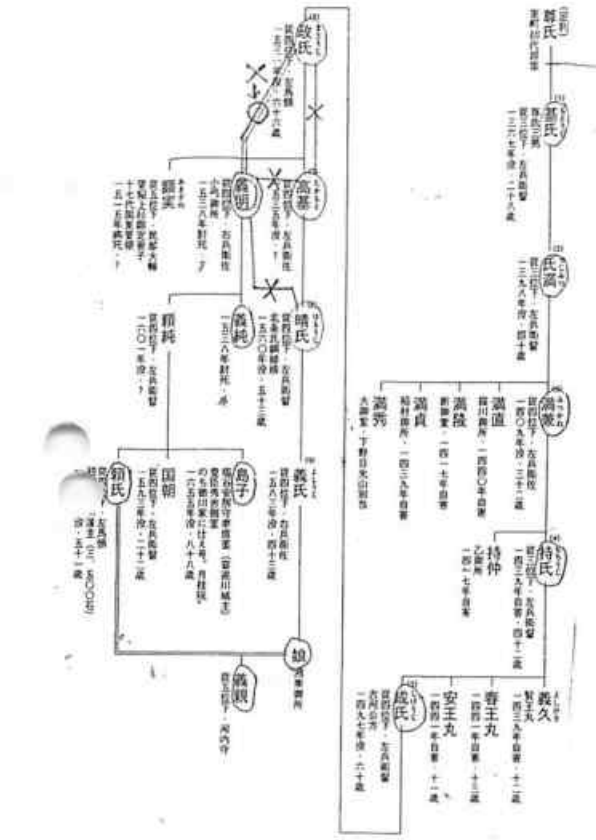
③武田氏に招聘された義明は永正 15 年 7 月高柳からいったん八幡郷に移座、永正 17 年 6 月から 18 年 8 月までの間に小弓(生実)城移座。この間 2～3 年間八幡に座所を構えた(「小弓公方足利義明」)。地元伝承などからはじめ飯香岡八幡宮の別当寺・霊応寺首座の満徳寺、のち御所の地名転訛とされる五所がこれにあたるといえよう。

＊「市原市史」や地元伝承＝義明は陸奥黒川城食客から迎えられ、八幡御所から小弓城を攻略した

＊「千葉県の歴史」＝小弓落城時、義明は高柳にいたことを記し八幡御所は無視

＊「国府台合戦を検証する」＝義明は同年 7 月に高柳から小弓に移ったといわれている

④義明は里見氏と同盟関係を結び、上総、下総、安房の大半を勢力下において兄高基と同盟関係を結んだ小田原北条氏と争うが天文 7 年(1538)の［国府台の戦い」に敗死。八幡地区に伝八幡御所跡、伝小弓公方の墓など関連する遺跡がある。



関東では、京都で応仁の乱（一四六七）が起こる前から、将軍に関東の支配を任された鎌倉公方（関東足利氏）とその補佐役の関東管領上杉氏とが争うなど、すでに戦国の様相を帯びていました。房総でも各地に在地領主が割拠し、十六世紀前半には足利義明が小弓（千葉市生実）を本拠として周辺に勢力を伸ばすなど、戦乱は拡大の一途をたどりました。

足利義明戦死の図（「成田参詣記」）

原孫二郎不可無不忠、数ヶ度以智謀申上候之間、被拡御御新恩之処、去廿二日戦、敵合戦、井上者被討ち候、敵方無色無者、可為神妙候也、

（足利義明）

十二月十一日

（花押影）

井田刑部左殿

義明は兄の古河公方高基との対立の中で、上総の武田氏らに擁立されて房総に赴き、小弓を本拠として千葉氏や原氏らと争いました。

義明は小弓公方と呼ばれ、千葉氏にとってはその所領を脅かす存在でした。彼はこの文書で、原孫二郎（「新討」）に対し、相馬氏と相談して与すぐ味方につくよう千葉方の井田氏に要請しています。

足利義明判物　年未詳（千葉県文書館保管）

伝八幡御所跡

高柳時代の御座所

3）なぜ多い巨城＝小弓城跡を歩く

①小弓城千葉市教育委員会史蹟看板(主郭)＝小弓城址

千葉城築城のころ小弓城も千葉城の南部の守りの要衝として築かれ、重臣の原氏に守らせました。永正6年(1509)連歌師柴屋軒宗長は城主原胤高(隆)に招かれ、小弓館で猿楽や連歌に興じたことをその日記［東路の津登」に記しています。永正15年10月15日真里谷城の武田恕鑑は古河公方高基の弟足利義明を奉じて胤高の守る小弓城を落とした＊。ここを本拠とした義明は「小弓御所」とも「小弓公方」とも呼ばれるようになり、里見氏の支援を受け、後北条の方の千葉・原氏と争った。天文7年(1538)国府台の戦いに義明は戦死し、再び原氏が入城したが、城を北西1.5km先のところに新たに築き（北小弓城)、本拠地としました。城は南と西側は水田で、北は支谷に、東は大百池にそれぞれ画された標高 20～25m の台地一帯で、城跡の内外に古城、東堀、城出下など城郭に関係した地名が残され、ここが城址であったことを示しています。現在でも城の北西端と南西端の墓地脇に土塁状のものが認められます。

＊前出、当時義明は高柳にいたことが証明されている。小弓城は武田氏の単独攻略といえる

＊城域は大型だが遺構に乏しく、信頼できる縄張りや概念図もなく概要は不祥といえる

②中鼻(埋蔵文化財センター)＝空堀に区切られた三角形の郭。最北端に立地、城門跡(からめ手?)、後出虎口に付属する馬出しなどが考えられる。

＊大手側は未詳。普通敵方に大手を構えて迎え討つが、攻守が入れ替わる争奪地では結果的に全方向を意識することに?

台(2の丸相当)

①空堀(堀切?)と土橋＝スタート直後、埋蔵センターと城地の間に大型空堀が横たわる。普通空堀はおよそ深さ7m、土塁 7m、実質比高 10m 以上に掘る。堀底は平底またはやげん、工夫も見どころだが未発掘のため不明。折れひずみがみえる。平面調査で3か所?の土橋を確認、その1つから城内へ。

②左側土塁と高まりは櫓台跡か、土橋と虎口に攻め込む敵兵に横矢をかける。せいろう櫓(隅櫓)を立て、敵軍の動きを見張る。土塁は城地を一周、柵をめぐらした。

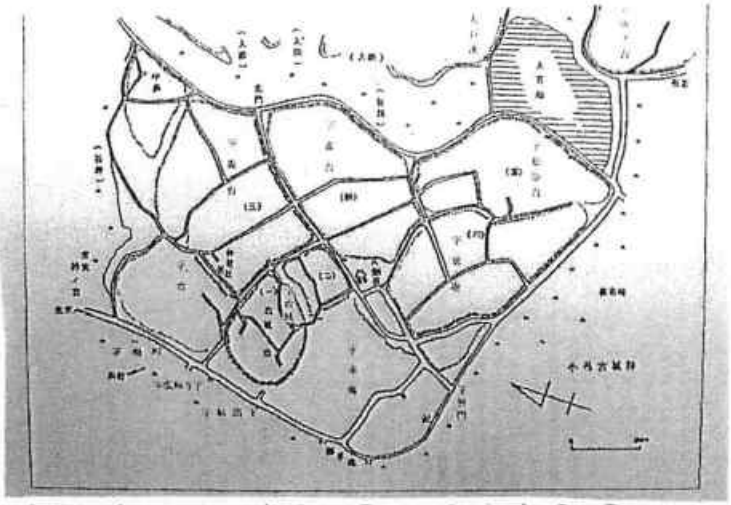
＊横矢＝塁線に攻め寄せる敵に対し、側面から弓矢、鉄砲を射掛けること

③台=後世の2の丸に相当か。3の丸相当も遠望。削平された平地で、特別な防御施設はみあたらない。台は高台のことで城郭と無関係。しかし同読みの「第」は、てい=やしきとも読める。未発掘であり現況から当時を推測することはできない。

④妙見社跡=千葉一族の氏神。北斗七星を神格化した菩薩を祀る。原氏の居(支)城を物語る。

⑤小弓城と森台貝塚碑文=中世原氏の居城。古河両方の関東覇権の争乱を秘めて廃城となる。またこの貝塚は縄文時代の原始集落を埋蔵する重要な遺跡である。

⑥腰郭=主郭周囲の平地。土塁を囲む家が多い。地形から重臣邸跡が考えられる



千葉市の史跡看板にあるナワ張り図

← 城址碑と史跡看板

小弓城址 →
(千葉市発行「郷土マップ」から)

古城(主郭＝本丸相当)

①屈曲する主郭空堀(堀切)、土塁＝主郭を画す巨大な空堀と土塁。参考概念図の塁線は防御のため屈曲している。「入隅」や「出隅」(出枡形)といった横矢が見てとれる。大正時代の「史蹟名勝天然記念物調査」は「東方および北方に高さ数尺の土塁。空堀は深さ10数尺、幅7～8間」としている。

②古城(ヨウガイダイ)＝小弓城の本拠、後世の本丸に相当。一般的には城主居所でまだ天守は出現していない。当時の城館は主殿造りで主殿、会所、遠侍、台所、対屋、馬屋、庭園などからなった。古城地下に遺構が眠っていると考えられるが未発掘のため不明。現況は畑と墓地でわずかに土塁一部が現存する。先端は崖地で眼下に水田と江戸湾を眺望、房総往還を迫る敵兵の動きも一望できた。残念ながら現況は藪地で視界はない。

＊要害＝地形が険しく敵を防ぎ守るに便利な地

③前出史蹟看板、小弓城跡碑

④三山信仰塚(後作)

大手?と森台(3の丸相当)周辺

①天神社高台＝神社脇の坂道が大手道か、大手の守りの横矢、マス形? ヤグラ門?

②八剣神社＝白鳳年間創建とされる古社で日本武尊伝説、源頼光伝説などがある。剣＝武の神様であり、当然小弓城と関係するものと考えられるが未解明。例大祭での神楽行事は市の文化財に指定されている。

③本郷＝村の中心地、本村の意味。城下で城側は根古屋に相当か。

④東堀＝大手側に備えた水濠跡。

⑤森台＝3の丸に相当か。その先松原は的場＝弓の練武場といわれる。城域の南東端に立地、三方が崖地で物見跡?

⑥大百(おおど)池＝北側先に続く低湿地とともに外堀に相当、城の台は外郭であろうか

⑦大堀切りか＝2の丸と3の丸を分ける通路は空堀、堀切りとみられる。大手道を登ると堀底道が考えられるが未詳、埋め戻されて現状から推定はできない。

⑧北門跡

⑨急崖＝切り岸。城北東側低湿地を遠望、出発地の埋蔵文化財センターに戻る。

⑩解散

以上

埋文センター横の堀切り

土橋と土塁の横矢

台(2の丸相当)

夏城跡碑

本丸空堀

主郭(本丸)跡

八剣神社

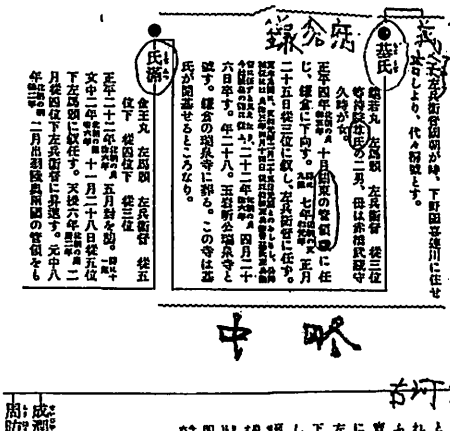
森台(3の丸相当)

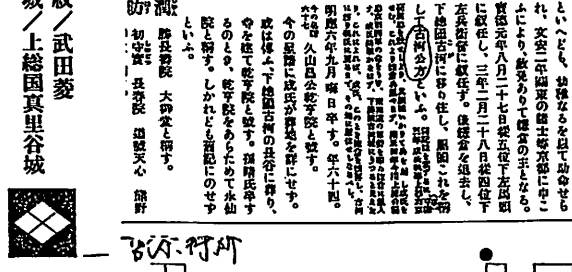
北門跡

寛政重修諸家譜巻第七十八

清和源氏　義家流　足利

尊氏　直義　運川　足利氏





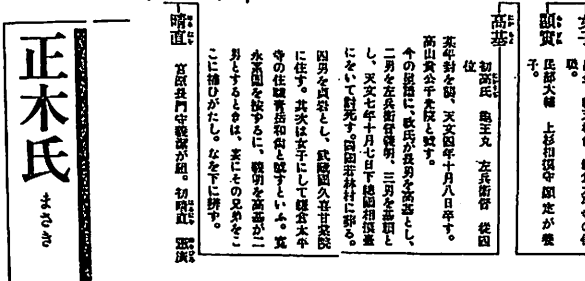
武田氏　たけだ〈上総国〉

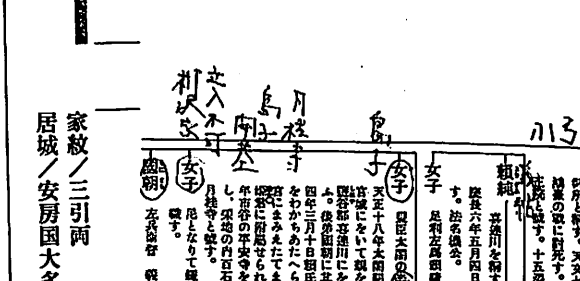
信長―信高―信興（道鑑）―信勝―信保（恕鑑）―信隆
　　信応―信高

家紋／武田菱
居城／上総国真里谷城

房総武田氏は、康正二年（一四五六）、足利成氏の命により甲斐国守護武田信満の子信長が上総に入国し、真里谷・庁南の二城を築いたことに始まるという。しかし、金石文等で確認し得るのは二代信高以降である。文明一〇年には、信高・信興親子が武蔵国の方まで出兵し、争乱による討死者が多数出たと、太田道灌の書状にある。一族が最も活躍したのは文明から天文の約六〇年くらいで、信興が江戸浅草寺を再建したり、上総佐貫の鶴岳八幡宮を再興している。また、永正七年（一五一〇）には禁裏御服御料所であった上総畔蒜荘を真里谷某（武田氏）が押領するなど、着々と勢力を拡大していった。

五代恕鑑（信保）は下総への進出をはかり、小弓城主原二郎と対戦したが、常に形勢不利で、陸奥を漂泊していた古河公方高基の弟・足利義明を迎えて大将とし、小弓城を奪った。小弓に移った義明は、「小弓公方」と称し真里谷武田氏ら豪族をバックに権勢を振った。武田氏は、真里谷・庁南の二城を拠点に、久留里・佐是・峯上・佐貫・大多喜・造海・笹子・中尾・椎津と上総一円に勢力を拡大した。しかし、その後、恕鑑は義明と不仲となり、天文三年（一五三四）に憤死した。その家督相続をめぐって長男信隆と信応の間に争いが生じ、信隆は峯上・造海城を拠点に北条氏綱をたのみ、信応は真里谷城に拠り義明の支援を得た。一時は義明方が勝利をおさめたが、同七年国府台合戦で義明が討死すると立場は逆転。一族間内紛で勢力は著しく減退、天正一八年（一五九〇）、一族滅亡へと暗転する。（網）





正木氏　まさき

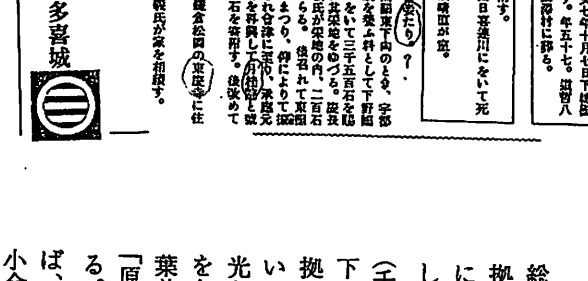
通綱―時茂―憲時―時茂
　　時忠―時通
　　頼忠―為春

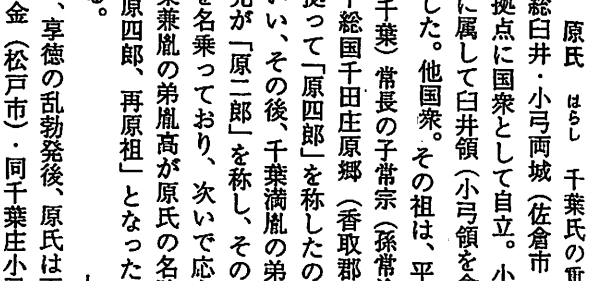
家紋／三引両
居城／安房国大多喜城

正木氏の祖は、相州三浦氏という。三浦郡新井城主三浦介義同道寸の子荒次郎義意が、北条早雲に攻められて永正一三年（一五一六）に新井城で滅亡する時、一子を船で逃し、これが安房国に上陸して、正木郷で成長し正木氏を名乗った。房総正木氏の始祖という。しかし、この伝説では年代的に不合理なので、故大野太平氏は、正木氏の始祖を義意より三代前の三浦介時高の実子とし、明応三年（一四九四）に時高が養子の義同道寸に攻められて討死した時、幼少の実子は船で安房国に逃れ、正木郷で成長したとした。しかし、これも年代的に辻褄を合わせただけで、三浦氏を祖とするという証明にはなっていない。それ故、房総正木氏の出自はいまだ不明である。

始祖通綱は正木郷で育ったというが、その活躍が明らかになった時には、安房国の東部、長狭郡を地盤として勢力を持っていた。正木氏が最も活躍し発展したのは時茂、時忠兄弟の代で、里見氏と同盟して安房から東上総に攻め入り、時忠は勝浦城を、時茂は大多喜城を攻落して本拠とした。時茂の子憲時は里見氏に背き、里見義頼に攻められて敗死した。義頼は正木氏の断絶を惜しんで次男弥九郎に正木家を継がせた。時忠も、一時、里見氏に反し後北条氏と結んだが、その後、里見氏の下に復帰した。

里見氏滅亡とともに正木氏も運命を共にしたが、頼忠の娘万は徳川家康の側室となり紀伊頼宣・水戸頼房を生んだので、その縁で為春は紀州藩の家老となり幕末まで続いた。（川名）

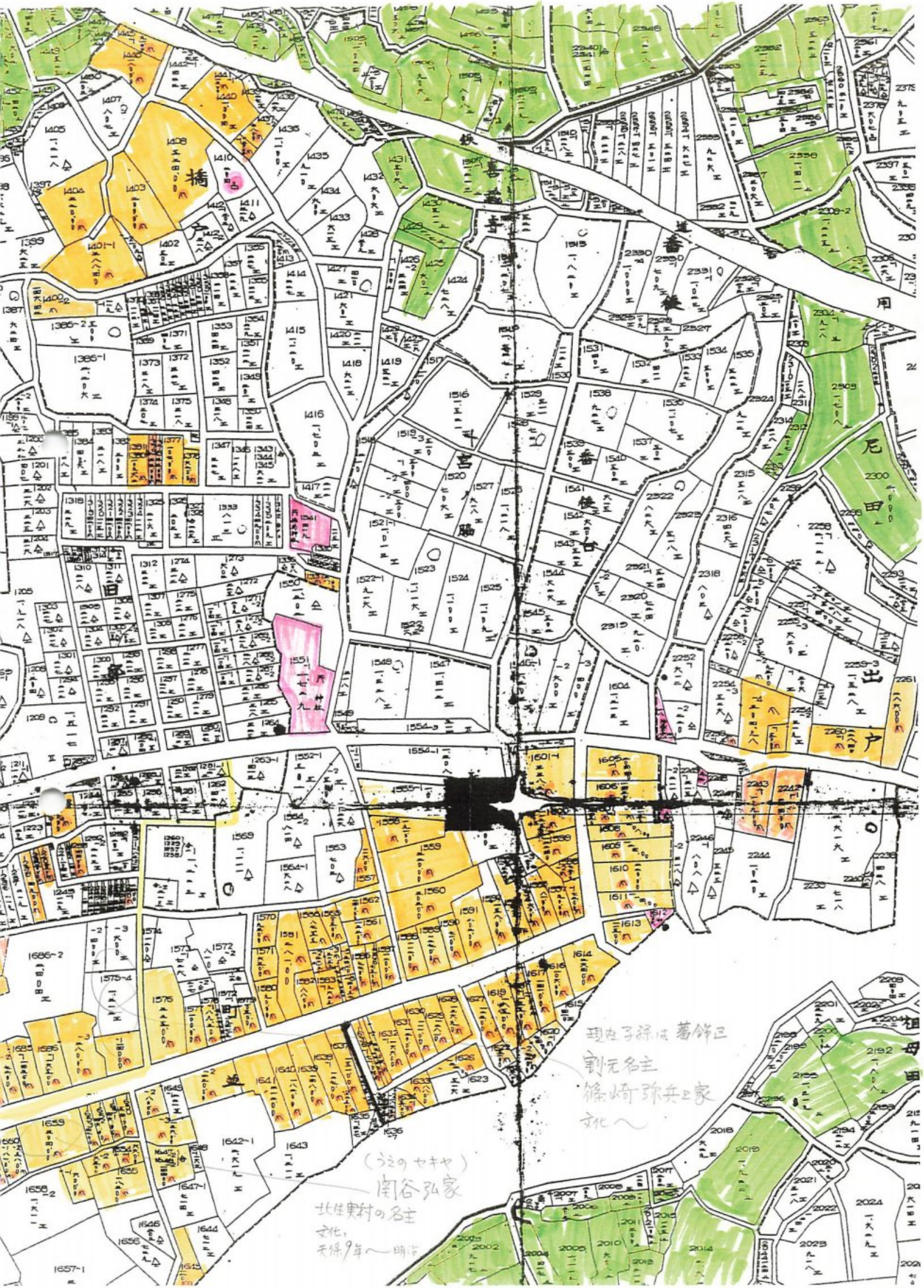


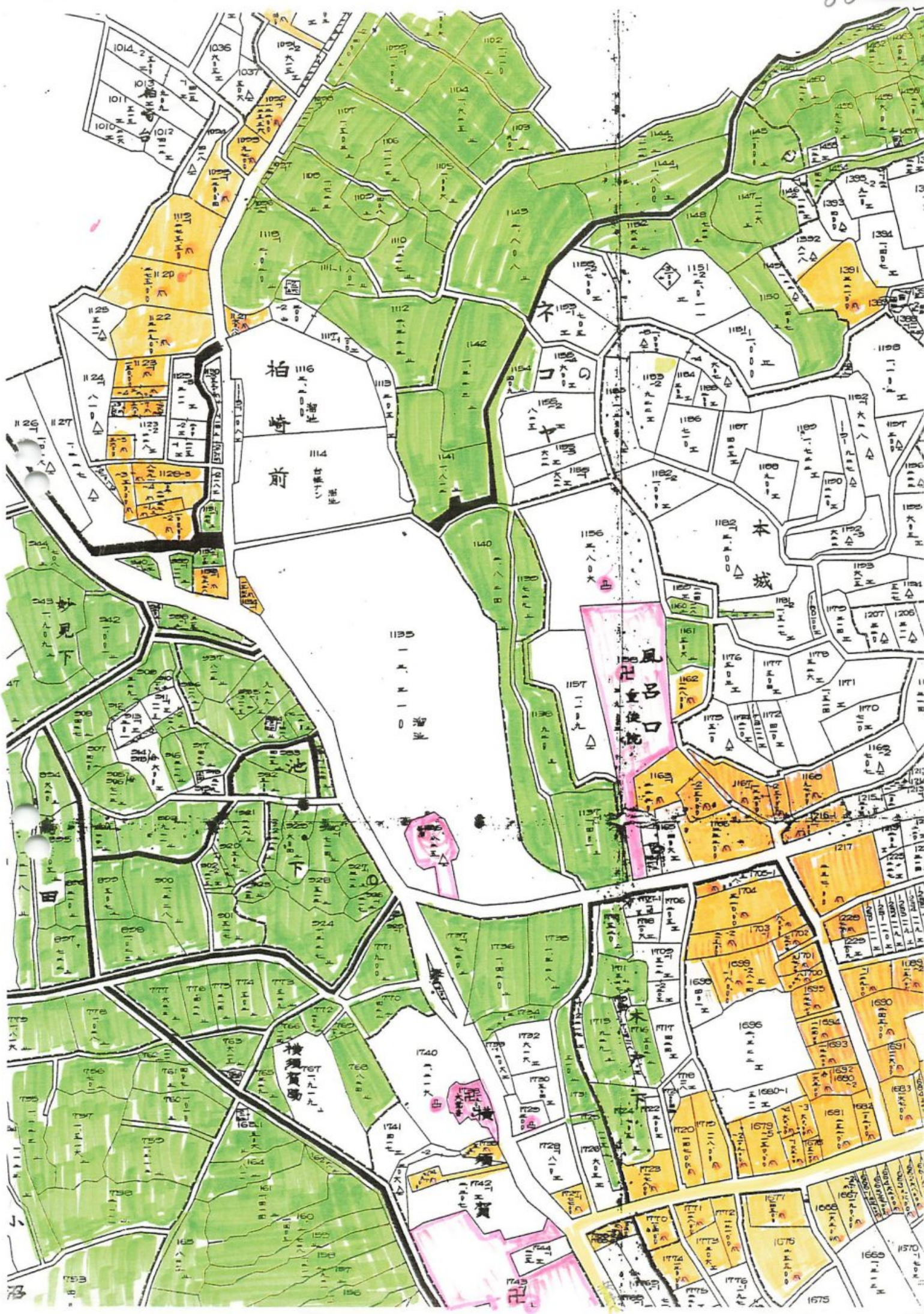


原氏　はらし　千葉氏の重臣。のち下総臼井・小弓両城（佐倉市・千葉市）を拠点に国衆として自立。小田原北条氏に属して臼井領（小弓領を含む）を支配した。他国衆。その祖は、平安末期に平（千葉）常長の子常宗（孫常途とも）が、下総国千田庄原郷（香取郡多古町）に拠って「原四郎」を称したのに始まるといい、その後、千葉満胤の弟満氏の子常光が「原二郎」を称し、その子孫も原氏を名乗っており、次いで応永年中に千葉兼胤の弟胤高が原氏の名跡を継いで「原四郎、再原祖」となったと伝えている。

十五世紀半ば、享徳の乱勃発後、原氏は下総風早庄小金（松戸市）・同千葉庄小弓・同千田庄多古・同八幡庄大野（市川市）・白井庄弥富（佐倉市）及び上総国山辺郡小西（大網白里町）など一族が両総の各地に拠って勢力を拡大し、主家千葉氏を凌ぐほどに成長した。戦国期には、原胤房が本拠地を小金から小弓城へ移し、胤隆―基胤―胤清と続き、天文十九年（一五五〇）十二月、当時香取郡の米野井城（香取市）にいた胤清の子胤貞が臼井久胤（→臼井氏）の後見役として臼井城へ入城し、やがて同城を奪取して本拠地とするに至り、以後、千葉氏から自立して、下総の国衆として北条氏に属した。そして、その子胤栄の代には北条氏の他国衆として分国支配の一翼を担って臼井・小弓領を領域支配し、同氏に従属して活動したが、天正十八年（一五九〇）小田原落城とともに滅亡した。

「戦国房総人名辞典」から


現在子孫は葛飾区
創元名主
篠崎弥兵ヱ家
文化～
（うえのヤキヤ）
関谷弘家
北住宅村の名主
文化、
天保9年～明治


柏崎前
本城
妙見下
池
田
下
横須賀
風呂口
横須賀
横須賀

市教辰公第 12-17 号
平成 23 年 3 月 22 日

山 岸 弘 明　　様

市原市立辰巳公民館
館 長 刀 根 譲

平成２３年度辰巳公民館主催事業の講師について（依頼）

早春の候、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

平成22年度主催事業につきましては、熱心かつ丁寧なご指導を賜り、誠にありがとうございました。

さて、本年度の主催事業を下記の通りに計画いたしました。

つきましては、公私ご多忙の折り、誠に恐縮に存じますが、主催事業の講師としてご指導くださいますようお願い申し上げます。

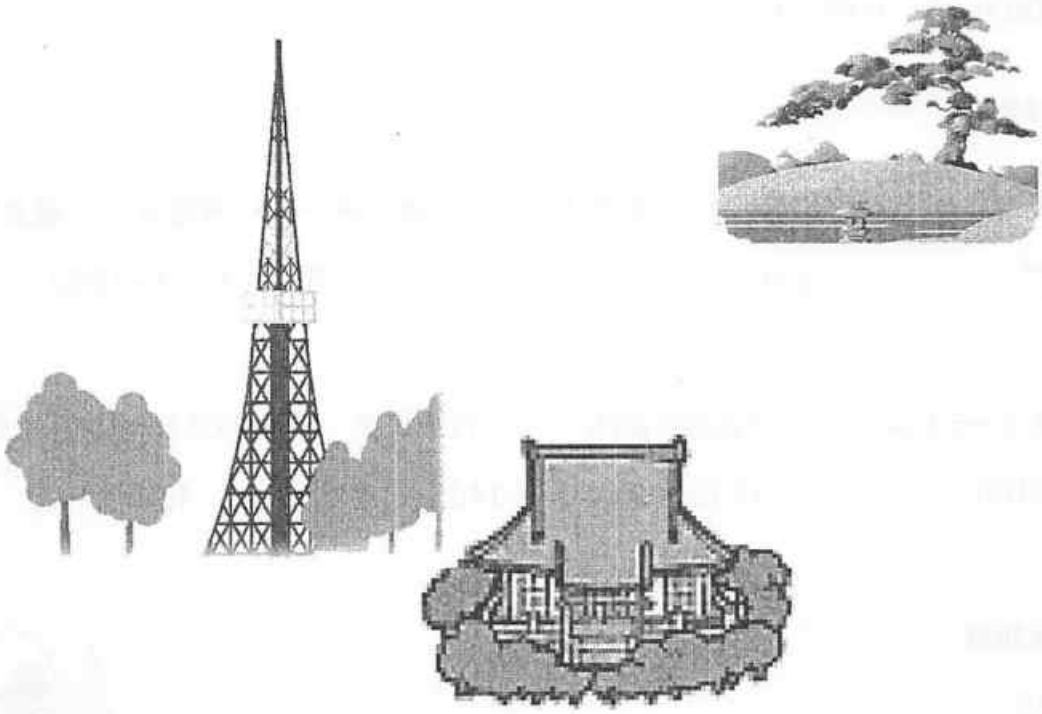
記

１．事業名　歴史散策
２．日　時　平成 23 年 8 月 29 日（月）講議
　　午前 9 時 30 分～11 時 30 分
　（場　所）市原市立辰巳公民館　視聴覚室

　　平成 23 年 9 月 15 日（木）バス研修
　　午前 8 時 30 分～16 時 30 分予定
３．内　容　江戸・東京歴史散策。
４．対　象　一般成人　４０名
５．その他　・公民館で用意するものにつきましては、事前にご連絡いただけましたら準備の都合上幸いです。
　　・講座の当日ご印鑑をお借りいたしますので、ご用意をお願いいたします。

担当　小関　照代
ＴＥＬ 0436 (74) 8521
ＦＡＸ 0436 (74) 8543

歴史散策



第２回　バス研修

行き先　増上寺　東京タワー（お江展）　旧芝離宮恩賜庭園

講　師　山岸　弘明　先生

期　日　平成２３年９月１５日（木）

平成 23 年９月１５日(木)

氏名（　　）

辰巳公民館主催事業「江戸東京歴史散歩」①　　成２３－８－２９

お江と江戸と大名庭園

華麗な血縁 —— 大河ドラマ「お江」の世界

山岸弘明

織田が搗き　羽柴がこねし天下餅　座して食らうは徳川家康

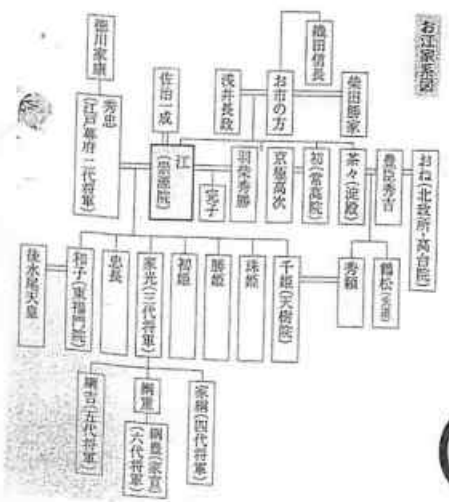
鳴かぬなら　殺してしまえほととぎす　　織田信長＝短期、自分勝手な性格

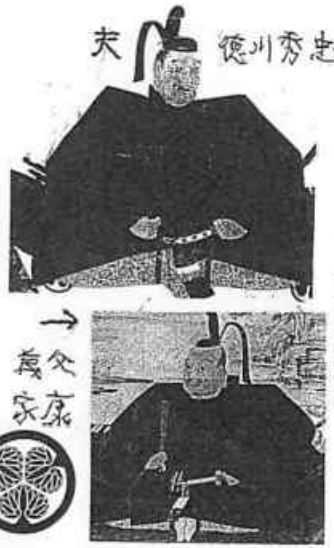
鳴かぬなら　鳴かせてみようほととぎす　豊臣秀吉＝自信家

鳴かぬなら　鳴くまで待とうほととぎす　徳川家康＝たなぼた

お江(崇源院)の肖像画(京都養源院所蔵)＝ずきん、黒衣、数珠(没後の肖像画)

おだやかなやさしい人柄を伝えている。





信長　織田　長政　浅井　勝家　柴田

義兄秀吉　養父　　長女千姫　　千女和子

「太閤大坂城」とともに散った長女茶々、将軍家の女として生きた３女お江、両家の　橋渡しに心を砕いた２女お初

戦国武将の女として強くしなやかに　それぞれの人生を生き抜く

母は織田信長の妹お市、父は近江の戦国大名浅井長政。歯車の狂いは時局を見誤った　　の信長離反に始まる。茶々、お初、お江の３姉妹は誕生の地・小谷城で父を失い、北の庄城落城で母と２人めの父柴田勝家を亡くした。燃えさかる炎を脱出、父母の仇・秀吉の軍門に下る。以後養父・羽柴（豊臣）秀吉の手ゴマとされる。男たちの権力争いに翻弄されながらもそれぞれの道を生き抜く３人の姫たち。やがて茶々は秀吉の側室となり後継者・秀頼の生母として権勢を奮うが大坂の陣で夏の露と消える。お初は１大名の正室としての生活をまっとうするが唯一の気掛かり、姉と妹の嫁ぎ先・豊臣×徳川両家の取り持ちに奔走する。お江が最後にたどり着いたのは日本一権力者の妻の座であった。将軍秀忠の御台所として息子は３代将軍、娘は天皇の中宮となる。３人の姫たちの歩んだ苦難の道を辿りながら、戦国の女たちの生きざまを探る。

＊

きょう２つめテーマは江戸大名庭園。安土桃山から江戸時代にかけ、城郭建築の発展は剛健質素の禅宗庭園を豪華絢爛な大名庭園へと転換させる。石なし水なしの江戸庭園のその不利をみごとに克服、潮入り池泉回遊式技術が誕生する。今回バス研修でご案内する旧芝離宮恩賜庭園は箱庭と評価されるコンパクトな作りが魅力。江戸大名庭園の歴史と見どころをご紹介する。

バス研修のみどころ

東京タワーと大屋

増上寺三門

将軍家墓所

お江霊屋所跡

お江特別展

東京タワー大展望台

竹芝桟橋

芝離宮恩賜庭園

3
浅井３姉妹、大河ドラマ「お江」ゆかりの城を歩く

１）織田信長、豊臣秀吉、徳川家康 —— 持ち回った天下人

①織田信長＝人気№１の戦国武将。カリスマ性に富み「天下布武」をかかげて安土城を築くが、天下統一直前に本能寺で明智光秀に討たれた。お市の兄で３姉妹のオジだが、それぞれに夫、父の仇でもあった。

＊安土城＝信長が「天下統一」の拠点として天正４年（1576）築城。総石垣造り、豪壮華麗な５重７階天主と城下を近世城郭の始まりとする。１０年本能寺の変では光秀一族が占拠、敗報で坂本に撤去したが、追討の織田信雄が残党刈りのために放った城下の火で類焼。信長の城らしい最後でもあった。

②豊臣秀吉＝信長の後継者。北の庄城でお市とその夫であったライバル柴田勝家を滅ぼして３姉妹を引き取る。秀吉にとっての３姉妹は「手中の珠」手駒として活用することに、茶々をお市とダブらせて側室にする。百姓から関白へ成り上がった実力者だが大河ドラマではひたすら「バカ殿」ぶりを発揮する。もはやもはやだれの声も耳に入らない。「はだかの大将」は無謀な朝鮮出兵へ駆け進み、本人の死でようやく終戦となった。

＊秀吉大坂城＝天正１１年秀吉が天下取り本拠として築城。５重８階、金色さん然の望楼型天守を上げ、後継をアピール。３姉妹が暮らし、茶々は秀吉の側室となり秀頼生母として実権を握る。元和元年大坂夏の陣で落城。跡地を埋め立て秀忠が徳川大坂城を建立、現在の大阪城は昭和６年の鉄筋コンクリート再建。

③徳川家康＝秀吉の死後、豊臣家を滅亡させ、徳川幕府を開く。「狸じじい」は明治以降、天皇の神格化にともない徳川家が批判されたことでの悪評。お江は嫡男秀忠の正室に治まり、徳川歴代の礎となる。

＊江戸城＝天正１８年関東入りした家康は当初太田道灌の旧城を利用、江戸幕府成立後、秀忠と家光が諸大名を動員した天下普請で幕府首都に大改造した。城域は現在の千代田区と中央区すべて、文字通り日本最大の巨城が完成した。

２）「遠交近攻」から破滅へ —— 時代の趨勢を見誤った浅井長政

①浅井（あざい）氏は東近江の戦国大名。亮政、久政、長政３代５０年間、小谷城にあった。

＊小谷城＝琵琶湖北東の山城。本丸跡や大広間跡近くに空堀、石垣が点在する。長政は勢力拡大のため信長と同盟を結ぶが朝倉攻めで破約、天正元年攻め落とされた。

＊長浜城＝天正２年浅井氏の旧領は秀吉に与えられたが、小谷城は不便なため湖畔に長浜城を築いた。琵琶湖の水を引き込んだ３重の堀と石垣で囲み、本能寺の変後は柴田勝豊が入ったが秀吉に攻められ、賤ケ谷の合戦の舞台ともなった。博物館の模擬天守、市内に浅井親娘像などが立つ。

②遠交近攻＝近くの敵の敵と同盟すること。共通の敵をもつものは味方。
永禄１１年（1568）、美濃斉藤龍興と戦うため尾張清洲城から本拠を小牧山城に移して、近江の浅井氏と同盟を結んだ。友好の印として浅井氏に嫁入りしたのが信長の妹お市であった。

③お市は茶々、お初、お江の３人の女子を出産するが、長政お市親子の幸せは長く続かない。

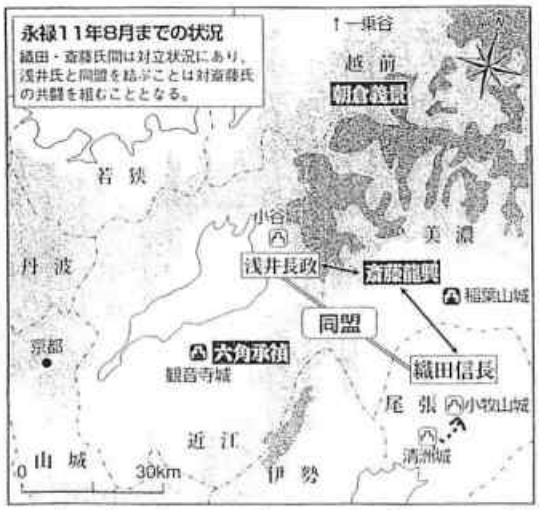
④永禄１１年信長は足利義昭を１５代将軍に擁立、しかしその本心は自ら天下統一に利用することにあった。まもなく義昭は対立、越前の朝倉義景と結託しているとして元亀元年（1570）信長は３万の兵を率いて若狭、越前に侵攻した。

⑤長政の離反は正にこの時に起こった。その第１報に「虚説たるべき」（信長公記）と耳を疑い、ほうほうの態で京都に逃げ戻った。

⑥浅井謀叛の通説は「朝倉氏との旧誼」だが真相は未詳。論功行賞への不満、義昭の働きかけ説など。
いずれもせよ時代の趨勢を見誤ったことに間違いはない。

⑦天正元年（1573）８月１日一乗谷に迫り朝倉氏を滅亡させ、９月１日小谷城落城。長政が自害。
お市と３姉妹は信長の陣所に送られた。嫡男万徳丸は脱出に失敗、捕縛、処刑。母にお市説もある。

安土城跡



「遠交近攻」オダ・浅井同盟

長浜市内に立つ
長政・お市親子像

3）織田家長女のプライドを守り抜いた３姉妹の母お市

①天文１６年（1547）尾張の武将・織田信秀の娘として誕生。織田信長の妹。

②永禄４年（1561＝大河ドラマは１１年）信長の命で浅井長政に嫁ぎ、３姉妹を生む。

③小谷落城の時３姉妹を伴って信長の元に帰る。はじめ清洲城、のち兄織田信包の伊勢上野城に移る。

④天正１０年（1573）信長が本能寺に急死すると家督争いに巻き込まれ、３姉妹を伴って信長の重臣・柴田勝家と再婚、北の庄城に入る。

⑤１１年勝家は賤ケ谷でライバル秀吉と戦うが敗れ北の庄に逃げ帰った。城は秀吉に包囲され運命を悟った勝家はお市に退去を促すが勝家との自害を選ぶ。行年３６才、織田家長女としてのプライドを守った戦国の女の最後であった。

＊清洲城＝信長が斯波氏を攻めて那古野城から移った桶狭間出陣の城。小谷から脱出したお市と３姉妹が一時生活。のち徳川義直が城下ごと名古屋に移して廃城となる。城址公園近くに模擬城の資料館がたつ。

＊津城、伊勢上野城＝お市が勝家に嫁ぐまでの居所。上野城は津城１０kmほどの岡城。伊勢湾が一望できる。

＊北の庄城＝天正３年朝倉氏の旧領を与えられた勝家が現在福井市に巨大平城を築く。信長の死後、秀吉と勝家ライバル争い激化のなかお市が再婚。しかし１年後に賤ケ谷の戦いで敗れ落城した。跡地は発掘され石垣根石列、勝家像、お市と３姉妹史跡看板などがある。

4）「太閤大坂城」とともに散った３姉妹の長女・茶々（お茶、菊子、淀、淀殿）

①永禄１１年（1569）長政お市長女として誕生。北の庄落城後は秀吉に保護され、清洲、のち大坂城に暮す。

②天正１６年（1588）ころ秀吉の側室となる。

③まもなく懐妊、茶々の産所として築かれた淀城に移り「淀」と呼ばれる。１７年５月鶴松を生むが夭逝。

④文禄２年（1593）２男秀頼を出産、３年京都に父長政の菩提供養のため養源院を建立。

⑤慶長３年（1598）秀吉逝去、８年徳川秀忠とお江の長女・千姫を秀頼の妻に迎える。

⑥慶長１９年大坂冬の陣、翌元和元年の夏の陣で秀頼とともに自害。千姫は徳川家に戻した。

⑦悪女イメージが定着、豊臣家滅亡の元凶、不倫説も。

＊淀城＝天正１７年茶々の産所として築城。秀吉待望の鶴松が誕生するが早世、永禄３年朝鮮出兵の和平使者を迎えるため築城中の伏見城建設資材として取り壊された

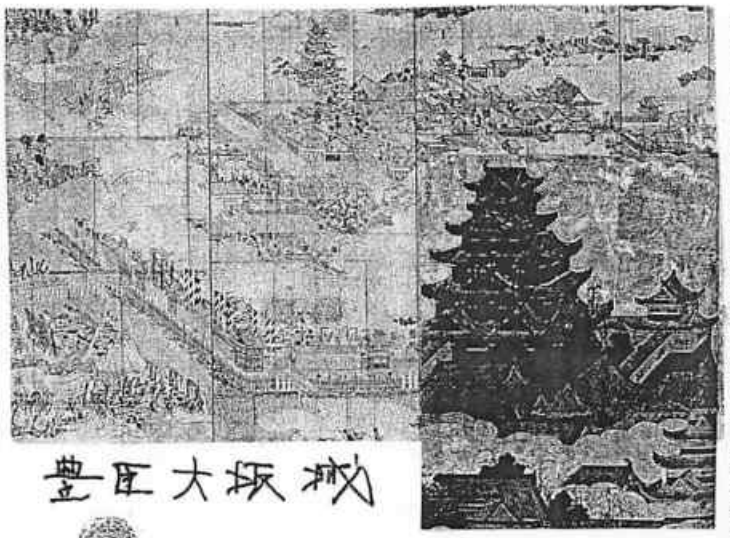
5）豊臣、徳川両家の橋渡しに心を砕いた次女・お初（常高院）

①元亀元年（1570）生まれ、天正１５年（1587）イトコの京極高次に嫁ぐ。高次は大津城主となる。慶長５年関が原の合戦が始まると当初西軍に与したがのち東軍に寝返った。大津城は攻められて落城、しかし徳川の勝利で小浜１１万石に列せられた。

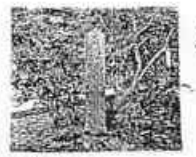
②大坂の陣が始まると大坂方を代表して徳川、豊臣両家の橋渡しにつくす。落城寸前まで説得、しかし実ることはなく３度目の落城で姉とオイを失う。寛永１０年没、６４才。

＊小浜城＝お初の夫京極氏若狭８万石居城。城の大半は明治の火災で焼失したが、天守台、石垣などが現存

北の庄城跡



豊臣大坂城



淀城跡

小浜城跡

史跡看板と
柴田勝家像

→出土した天守台

江戸城跡（皇居）

6）徳川将軍家の女として生きた３女・お江（達子、江子、お江与。崇源院）

①天正元年（1573）生まれ、この年小谷城落城で父を失い、１０年北の庄落城で母と２人目の父が自害して果てる。以後秀吉の保護下に置かれ１５才ころ佐治一成に嫁すが離婚させられる。

＊大野城＝お江の初婚、佐治５万石居城。伊勢湾を望む青海山に立地する
秀吉は家康と戦った小牧長久手の戦いで佐治が家康に味方したことを許さず所領没収
「佐治は予が相ムコ（妻同士が姉妹）には不足なり」

②文禄元年（1592）秀吉のイトコ羽柴秀勝と再婚、しかし秀勝も朝鮮戦線で戦病死する。

＊岐阜城＝戦国期斉藤道三の稲葉山城、美濃支配を進めた信長が攻め落とし岐阜城と改称した。一時秀吉の後継者とされた豊臣秀次の弟秀勝が秀吉の家族として岐阜城を与えられたが文禄元年朝鮮出兵中病死。新婚生活は７か月で終わる

＊幕府公式文書「柳営婦女伝」は３度目の嫁ぎ先九条道房を記し２女を生むとする

③文禄４年秀吉養女として６才年下の徳川秀忠の正室となり２男５女を生む。

＊伏見城＝秀吉晩年の居城で没地。当時秀吉の人質となっていた秀忠が居住、２人の新婚の地で長子千姫が生まれた

④慶長５年（1600）家康が関が原の合戦勝利、８年徳川幕府創設、１０年秀忠の２代将軍就任で御台所と称される。

⑤長男家光を託した乳母・春日局はオジ信長を殺害した明智光秀家老の娘でお江の仇相手でもある。忠長誕生後はこれを溺愛して春日局と対立するなど確執が続いた。

⑥寛永元年秀忠隠居して大御所、お江は大御台所となり西の丸に移る。

⑦寛永３年９月１５日夫に先立って逝去５４才。秀忠は寛永９年没、同じく５４才。

＊お江の法号は崇源院殿、秀忠台徳院殿、ともに芝増上寺に埋葬された

7）栄華を極めたお江の子女とその子孫

①長男家光＝３代将軍となり徳川幕府基盤を確立する。お江とは距離を置き乳母春日局を母とも慕った。
墓所ははじめ寛永寺でのちに日光の家康東照宮廟に隣接する輪王寺に移葬された。

②次男忠長＝駿河大納言５０万石となるがのち兄家光といさかい自害を命じられた。

③長女千姫＝７才で豊臣秀頼に嫁すが大坂落城のとき夫除名嘆願のため脱出、のち本多忠刻に再嫁、一時姫路城に居住、ゆかりの西の丸化粧櫓が現存する。

④４女和子＝後水尾天皇の中宮で後継した明正天皇（女帝）の生母。つねに徳川家と天皇家との軋轢回避に心を傷めた心労の生涯であったとされる。京都月輪陵に眠る。

⑤２女珠姫は加賀前田家、３女勝姫は越前松平家に輿入れ、５女初姫は子供のなかった姉お初の養女に迎えられた。

⑥嫡男家光の子孫は歴代将軍家を継承、和子は天皇家織田、浅井、徳川の血統を残した。

8）東京周辺にあるお江のゆかり地

①江戸城＝お江の江戸城での生活は慶長３年ころ、２６才ころから。主に本丸（現皇居東御苑）、晩年は西の丸（現皇居）に居住し没地となった。大奥制度はお江が作り春日局が完成させた。

②芝増上寺＝お江の墓所。徳川家としてはめずらしい火葬で春日局との確執に由来するともいう。寛永５年忠長が御霊屋を建造、墓所に隣接した現在芝プリンスホテルの地と考えられる。忠長自害後家光が現ザ・プリンスパークタワー東京ホテル敷地内に再建、明治維新後旧国宝とされたが昭和２０年５月の東京大空襲で秀忠霊廟とともに焼失した。しかし忠長建造の御霊屋は当時鎌倉建長寺に移築されて現存、焼失を免れた勅額門などが戦後買収した西武グループによってドーム球場前の狭山不動寺に移築された。

③狭山不動寺＝家光建造の秀忠勅額門、御成門、お江丁字門、家光側室桂昌院宝塔、唐金灯籠群、石灯籠群などがある。入り口正面の勅額門は後水尾天皇の直筆額がかかる。１００余基が整然と立ち並ぶ唐金灯籠群も圧巻、一見をお勧めする。

狭山不動寺

祐天寺くう殿

建長寺移築霊廟

徳願寺本尊

356 桂昌院坐像 一軀
像高 三四・五
木造 玉眼 彩色
江戸時代

市の調査報告書 →

④鎌倉建長寺＝正保４年立て替えの時譲り受け建長寺の中心である仏殿となった。本尊地蔵菩薩を奉る。唐門も同時に移築されたもの。また鶴岡八幡宮参道の大鳥居は家光安産祈願のお礼参りにお江が石造りで建造、４代家綱の時完成したとされる。

⑤目黒祐天寺＝お江化粧代跡地に享保３年創建、８代吉宗の命で駿河宝台寺にあった忠長建立のお江宮殿（くうでん）が寄進され現存。ＮＨＫお江展で中心展示物となった。

⑥行徳徳願寺＝家康の帰依で建立、本尊阿弥陀如来は元北条政子所蔵、運慶刻ともいう。家康がお江のため鎌倉から江戸城に移しお江が念持仏としたものを没後寄進されたという。

⑦市内西国吉の医光寺＝伝崇源院（お江）像を所蔵。もとは桂昌院（５代綱吉生母お玉）像として伝承されたが近年見直し変更された。お江とする根拠は薄く市調査報告書や市原郡誌は桂昌院、ＮＨＫお江展では浅井家ゆかりの女性とされた。

９）最後にまとめ＝つよくしなやかにそれぞれの人生を生き抜く

①茶々、お初、お江。この３姉妹ほど日本の歴史の舞台を渡り歩いた女性はいないだろう。まさに戦国の乱世から太平の時代への転換期のヒロイン＝戦国武将の女としてそれぞれの人生を生き抜く。

②もし男だったら ―― 落城は死、相手に渡れば即処刑。女なら寺入りが普通。子孫を絶つ。

③戦国武将の女は戦略上の道具。政略結婚は人質だが、多くは家のため進んで敵地に赴いた。
普通、同盟破れれば実家へ戻され「宣戦布告」を意味した。（お市の居座りはまれ）

④３姉妹の幸運は秀吉が信長の後継者であったことだろう。お江の初婚と２度目、お初の結婚も身内と恵まれた。そこには秀吉の信長とお市への思いが垣間みれる。

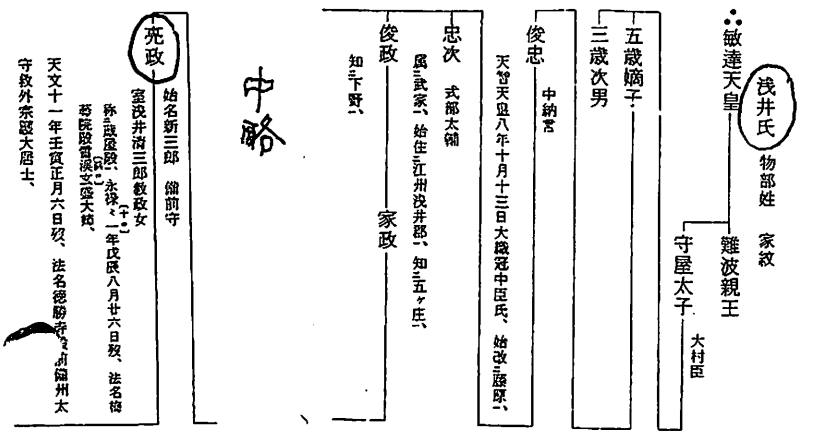
⑤秀吉の側室となった茶々＝淀君は念願の男子を生んで「大坂城の女アルジ」に昇りつめるが、結末はわが子とともに自害という悲しい最後だった。

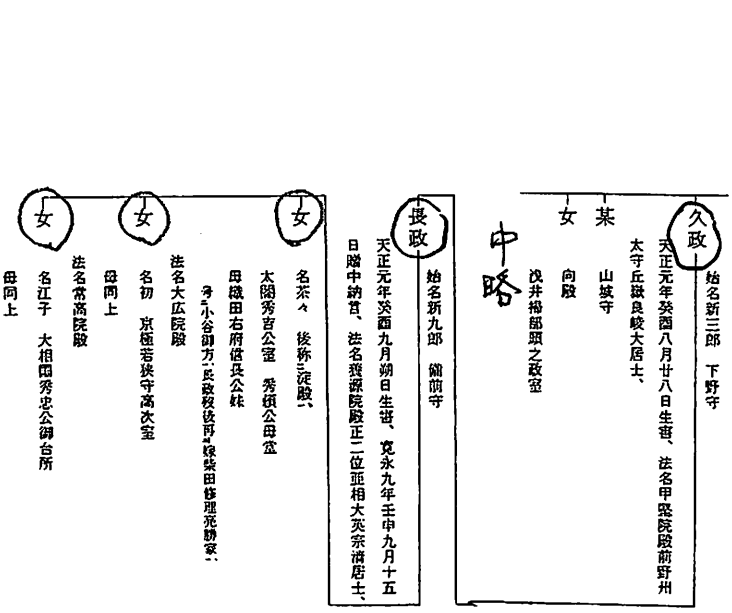
⑥一方お江が最後に獲得したのは「天下人の妻」の座だった。織田、浅井家の血統を徳川将軍家と天皇家に残す。３姉妹の生きざまは、時代の波に翻弄されながらもつよくしなやかに、そしてある時はしたたかにそれぞれの人生を生き抜いた。その生きざまはまさにわが国「中近世の歴史」そのものでもあった。

「柳営婦女伝七」

大猷公御母堂
崇源院殿之伝系

崇源院殿は江北の浅井備前守長政の息女也、元亀元年庚午浅井長政、越前の朝倉義景と合戦して、織田信長に楯を突き、信長の為に長政討滅さるるの後、長政の室（信長の妹、小谷御方）、其息女三人を倡ひ、柴田勝家に再嫁せらる、天正十一年癸未勝家も亦秀吉の為に滅され、自殺の時、勝家の咄の者中村文可と云者、勝家・小谷御方共に介錯して自殺せしめ、天守に火を放ち、文可も亦火中に投して死す、其時文可差心得、勝家・小谷の御方へ告て、彼ノ三人の息女を逃去さしめ、一乗の谷へ遣置く、秀吉是を聞、急に安土へ送入る、後長女は秀吉の別妻則淀殿、（母堂也）、二女は京極若狭守高次（大津城主、五万石を領す、）に嫁し、三女は尾州大野城主佐治与九郎平一成（佐治八郎信方の二子なり、母男、母は織田信長の妹なり、）に嫁す、然るに信長の弟織田上野介信包の長臣津田左近将監直政、故あつて佐治八郎信方を殺害せしむと雖共、其子与九郎一成は、猶も織田信包に従属し大野城に居住の所に、天正十二年甲申四月上旬尾州小牧一戦の後、東照宮参州へ御凱旋の路次、尾州佐屋の渡にて乗船なり、既に難儀に及ばせらるるの時、与九郎一成進んで乗船を出して、無故なく渡し奉り、東照宮御感悦の所に、此事秀吉（公聞）及び問て甚だ立腹し、淀殿病気と称して使者ヲ遣し、与九郎一成妻（織田信包の妹）を迎へ招て淀殿の許に差遣き、且ツ秀吉宣ふハ、佐治は予が相聟には不足なりとて、彼妻を留置て終に返さず、与九郎是を悔み怒るといへ共、如何共すべき様なく、薙髪して佐治三郎入道と名を改め居れり、其後彼妻を秀吉養女として（信長の孫、丹波少将秀勝、織田信長の四男）に嫁せらる、然るに秀勝、文禄元年壬辰高麗の役の時、彼土に於病死せらる、孀婦と成給ふを、秀吉又養女として九条左府藤道房公（秀忠）に嫁せられ、九条の政所と称せられ、御息女二人を産し給ふを、後に台徳公御養女として、二人共に本願寺東西両御門跡に嫁せしめ給ふ、道房公薨去の後、彼政所を秀吉公又養女として、文禄四年乙未九月十七日台徳公（秀忠）に嫁せられ給ふ、是を世に大御台と称し、後崇源院殿と号し奉る、男女の御子七人を産し給ふ、





江戸大名庭園の魅力はその華麗さにある

1）「日本３名園」

①金沢兼六園、水戸偕楽園、岡山後楽園を「日本（天下の）３名園」という。

＊兼六園＝加賀前田１００万石、金沢城石川門に連続する高台に立地。ことじ燈籠と曲水、成巽閣がある

＊偕楽園＝水戸徳川３５万石外郭として作庭、３０００本の梅園と好文亭、隣接する千波湖の景観がみごと

＊後楽園＝岡山池田３１万石、江戸時代の「御後園」を改名、パノラマの池泉景観が圧倒する

②すべて地方の大名庭園から選ばれていることに注意。明治以降の呼称で由来や根拠もいまいち。「日本３景」をまねた３都市のＰＲ作戦か。

③「３名園」同等かそれ以上の大名庭園は全国にある。

＊全国の著名大名庭園

将軍家＝京都二条城二の丸庭園、名古屋徳川家＝名古屋城二の丸庭園、
彦根井伊家＝彦根城玄宮（げんきゅう）園、紀伊徳川家＝和歌山城西の丸庭園、
高松松平家＝高松城栗林（りつりん）公園、熊本細川家＝熊本城水前寺成趣（じょうじゅ）園など

＊東京の著名大名庭園

将軍家＝江戸城二の丸庭園、浜離宮恩賜庭園、紀伊徳川家＝赤坂御所（非公開）、
水戸徳川家＝小石川後楽園、小田原大久保家・紀伊徳川家（明治の皇居別荘）＝旧芝恩賜公園、
大和郡山柳沢家（吉保）＝六義（りくぎ）園、
それぞれ名園として知られている。

＊その他の東京の現存大名庭園

加賀前田家＝東京大学育徳園三四郎池、彦根井伊家＝ニューオータニ庭園、明治神宮御苑
尾張徳川家＝戸山公園、徳川清水家＝甘泉園公園、関宿久世家＝清澄公園、高遠内藤家＝新宿御苑、
盛岡南部家＝有栖川公園、高松水戸家＝自然教育園、宮津松平家＝安田庭園、岡山池田家＝池田山公園
熊本細川家＝新江戸川公園、松山松平家＝戸越公園

2）日本庭園の発達

①庭園の定義＝住居や寺社の周囲に樹木を配し、人工的に造成された景観をいう。

②平安時代、京都雅びの世界で発達した庭園

飛鳥時代（７世紀）にはじまり、奈良時代（８世紀前半）に定着したとされる。当初は屋敷地に池を掘って岩を組み、白砂を敷きつめた程度であったが、８世紀中期には各地に離宮や山荘が築かれ次第に完成していく。

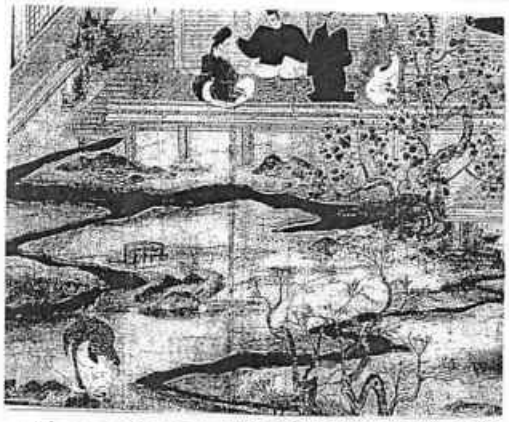
③８世紀末、都を京都に移す平安時代が始まると寝殿造り建築様式が出現、庭園も一大飛躍を遂げる。中島や築山を築き、やり水を流し、石を立てて滝を落とす。貴族の雅びな遊びの舞台としての「大和絵風」庭園文化が一気に花開く。

④禅宗文化が生んだ枯山水から華麗な大名庭園へ

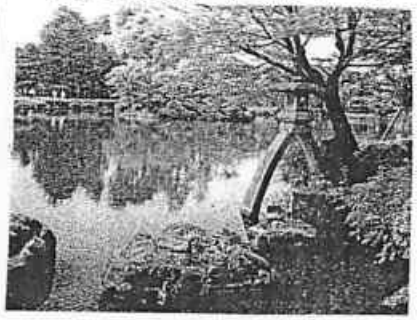
鎌倉時代（12世紀～）、室町時代（14世紀～）にかけて武士の時代が始まり、貴族文化が崩壊すると庭園も大きな変革する。剛健簡素の気風は枯淡な象徴的庭園を生み出し、禅宗寺院を中心に枯山水が出現、庭は回遊式から座観へ。龍安寺石庭などの名園が続々と誕生している。

⑤安土桃山時代と続く江戸時代（17世紀～）は禅宗庭園が後退、城郭建築の発達にともなった大名庭園は豪華絢爛、その特徴は池泉回遊式と茶庭の混合加味にある。桂離宮もこの時代に生まれた。

⑥庭園史上は室町期を最盛期に江戸時代の大名庭園を質の低下とする。専門的評価はともあれ今日残された大名庭園の華麗さは見る者を感動させずにはおかない。



↑龍安寺 ↓兼六園



東京の現存大名庭園→

菅原道真→偕楽園

3）江戸大名屋敷庭園のおこり

①徳川家康の江戸入り

天正１８年８月１日、豊臣秀吉の転封命令で徳川家康が江戸城に入城。家康が未開発の江戸を選んだことには諸説あるが、後背地に武蔵野の原野を抱えた立地が後の巨大都市・江戸の発展、広大な大名屋敷誕生の基盤となる。

＊近年の研究で、当時江戸は未開地ではなく物流拠点として発展途上にあったことが確認されている

②その第１は京都や鎌倉では不可能であったスケールの大きな土地が与えられたこと、
第２は江戸が山坂の多い自然景観に恵まれたこと、
第３は水なし、石なしの不利が海水取り入れという新しい庭園技術を生んだことなどである。

③参勤交代と江戸屋敷

慶長５年（1600）関が原の合戦で家康が勝利すると、諸大名は二心のないことを証明するため競って人質（証人）を差し出し、幕府は屋敷地を与えて江戸屋敷が建設されるようになった。

＊人質と江戸屋敷の第１号は加賀前田利家の妻で嫡男利長の生母お松。関が原合戦直前、江戸屋敷は千代田区大手町の大手町ファーストスクエア一角であった

④３代将軍家光の寛永１２年（1635）参勤交代が制度化され、大名は妻子を江戸に残し、原則として１年ごと（関東は半年）に江戸と国元を往復することになった。

⑤大名屋敷は当初１か所、明暦大火後の市街拡大で３か所以上になった。

＊上屋敷＝江戸城に近い公式屋敷で幕府や諸藩との外交窓口。藩主と人質の正室が居住
中屋敷＝少し離れた予備屋敷。通常隠居屋敷または嫡子住居で上屋敷万一の時代行した
下屋敷＝やや郊外の別荘。広大な庭園を作った
蔵屋敷＝江戸湾または隅田川近くの蔵地。国元から運ばれる米や物産などを収納した

＊下屋敷は複数の場合が多く、合計が１０か所以上におよぶこともあった

⑥拝領は名ばかり。幕府は屋敷地を与え、建物は拝領された大名が作ったが頻繁に入り替えされた。
諸大名は自らのメンツにかけて豪壮な御殿を建築した。

⑦表門は大名の顔。家格によって形式が決められた。

＊上野・東京国立博物館横に旧因幡池田家屋敷門＝元丸の内にあった鳥取３２万石上屋敷の現存門

4）寛永年間の「江戸図屏風」にみる豪華絢爛の大名屋敷庭園

①天下城江戸城本丸御殿、５重の天守閣そびえる。残念ながら「明暦の大火」で焼失した。

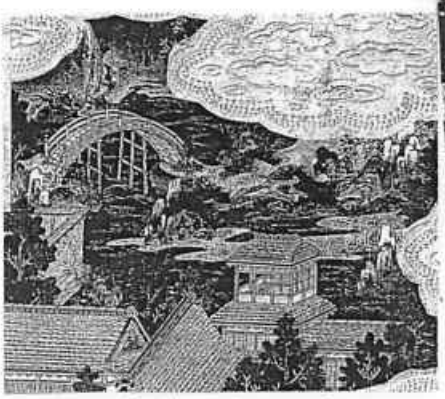
＊伊達政宗、加藤清正、黒田長政、上杉景勝、毛利輝元ら名だたる外様大名邸が続く。
御三家尾張義直、紀伊頼宣、水戸頼房邸、徳川一門の松平忠輝（松平忠昌）邸が並ぶ。

＊黄金に輝く御成り門＝屋根切妻造り、軒唐破風、檜皮（ひわだ）葺き
豪壮な表門＝外様大名は瓦葺き檜門、御三家は大棟門（四脚門）
檜皮葺きの玄関、遠侍、広間は大工技術の粋を尽くした華麗な彫刻が飾る。

＊屋敷周囲を石垣＋白壁塀（長屋）で囲み、四隅に角櫓を乗せる。一国一城の主を意識した城造り。

江戸図屏風

御三家 尾張、水戸、紀伊邸



水戸徳川下屋敷

越前松平邸

加賀前田下屋敷

③家光

②遊楽の下屋敷をみると

＊水戸下屋敷（後の小石川後楽園）＝初代頼房作庭当時の様子を伝える。仲が良かった将軍家光好みとされる。大きな池泉を中心に奇岩、滝や反橋も見える。家光の御成りが繰り返され檜皮葺き２階造り数寄屋から庭と池を一望したことだろう。

＊加賀前田１００石下屋敷（後の上屋敷）＝赤門で有名な東大の前身。慶長年間拝領、寛永６年の将軍家光御成りに備えて３年間かけて整備されたという。池（三四郎池）を中心に奇岩や滝、ここにも数寄屋や亭（ちん）が幽玄の世界を造り出している。いまも当時の雰囲気が残っている。

③明暦３年（1657）の大火は江戸城と周辺屋敷、市中の半分以上を焼失、死者は１０万人を数える。被害に懲りた幕府は江戸市街を拡大して大名家に広大な下屋敷を与える。豪華御殿の建設は禁止されるが、一方で「江戸大名庭園文化」が花開くことになる。

５）江戸大名庭園の特徴

①人口１００万を数えた世界最大都市

江戸の人口は俗に「１００万都市」という。その内訳は町人５０万、武士５０万、寺社神官僧侶その他若干であった。（１昨年の講座「大江戸八百八町」を参照）

②江戸の７割は武家屋敷

江戸はおおむね山手線の内と浅草、深川あたりまで、３分の２は武家地で江戸城周辺は大名上屋敷街、江戸湾や隅田川沿いや郊外に下屋敷が連なった。

③大名屋敷には上、中、下屋敷にはそれぞれ付属した庭園が作られた。上屋敷は藩主が将軍や大名たちを接待の場で庭園もとくに優れたものが作られた。

④下屋敷は通常藩主の別荘で隠居屋敷とされることが多かった。御殿と家臣長屋、庭園で構成された。壮大な敷地の大部分は庭園で数千坪からときに１万坪以上におよんだ。

⑤江戸大名庭園最大の特徴は池を中心にした「池泉回遊」にある。中央に据えられた池の回りを歩きながら移り変わる景観を満喫する。

＊西洋庭園を幾何学的に整然と区画された人工の庭とすれば、日本庭園は自然美の追求にあるといえる。大名庭園の主役は文字どおり自然の山野と石と池、当初の地形変化も最大限に活用された。植木と季節の花々も大事な要素の１つとして彩りとされた

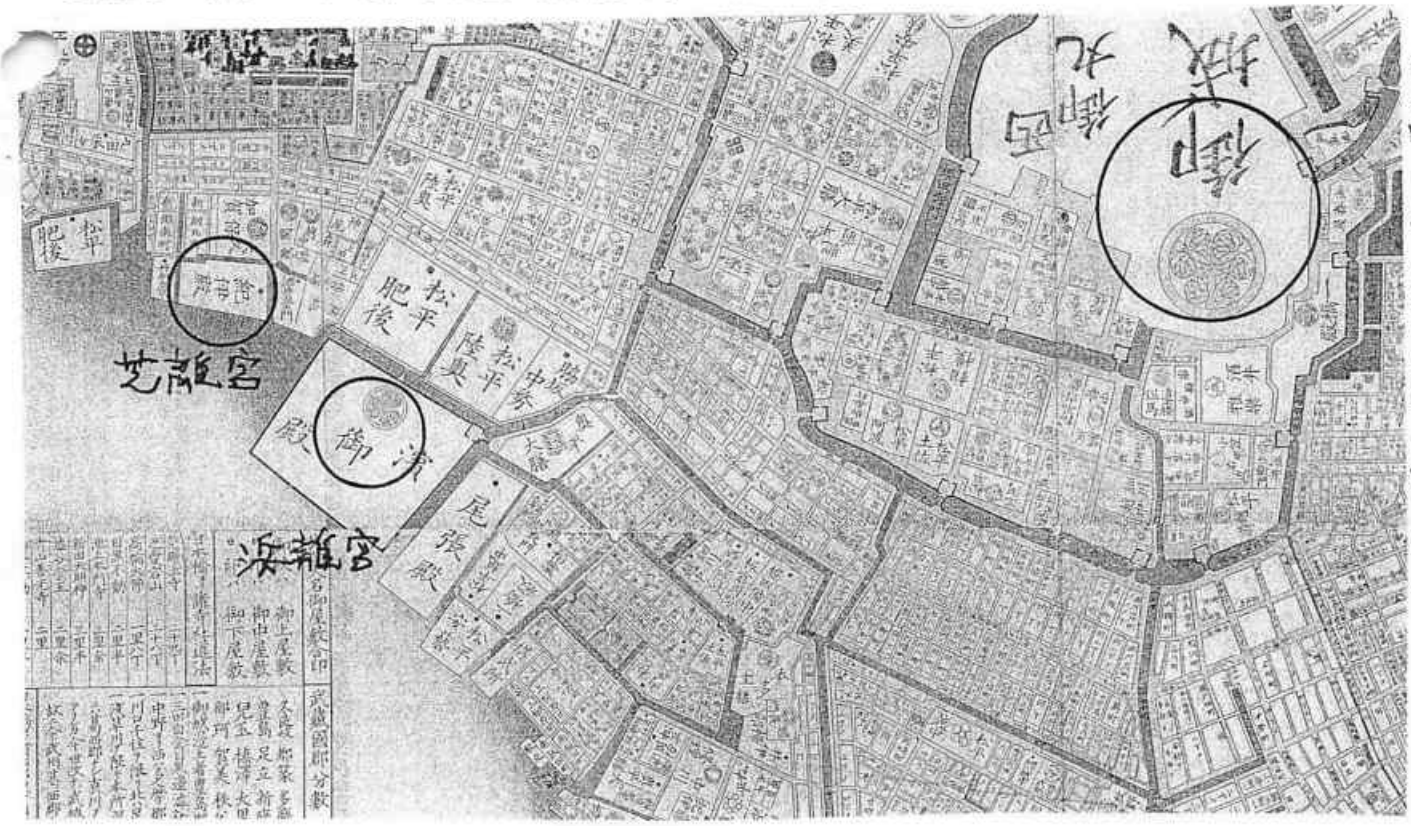
⑥泉水＝庭園の中心に広大な池を置く。池には中島、岩、出浜、入り江、州浜、滝を配し、護岸や橋に変化を凝らす。橋や小路、護岸や石灯籠も同じものは置かない。見る角度、季節や天候時間の違いも大名庭園魅力の１つだ。光によって変わる池水や木々の緑の微妙な変化にも心を配りたい。

⑦移しは全国や国元、中国の名勝を取り込むこと。芝離宮には「大山」や「西湖の堤」、小石川後楽園には「白糸の滝」「蓬莱島」などがある。

⑧築山を築き園内全景を俯瞰、また壁越えに江戸湾を望み、富士見山とした。

⑨茶屋と四阿（あずまや）＝休憩所でもあり、接待場所でもある。歌を読み食事や酒席ともなった。

⑩舟遊び＝小舟でつりに興じ、周囲の石灯籠を灯して舟から夜景を楽しんだ。



安政6年江戸図（部分）

6）「潮入り」庭園の誕生

①江戸大名庭園の最大の特徴に「潮入り」があった。江戸は水なし石なし、しかし京都や鎌倉では考えられなかった庭園の広さと山坂谷、変化に富んだ地形と海があった。潮入りは泉水に海水を取り入れるという画期的なアイデアで誕生した。

②江戸湾と隅田川沿いで採用、海水取り入れ口を調節することで潮の干満を取り込んだ。

③潮入り庭園では泉水の潮位が変化することで州浜や護岸の変化、岩などの浮き沈みで時間による景観の変化が一段と深まった。泉水は潮水で海魚が飼育された。

④芝離宮と浜離宮は潮入りであったが、現在は海との関係はなくなっている。

6）大名庭園の役割

①将軍の御成り＝将軍が江戸城から出ることを御成りといった。お成り先は外様有力大名邸が多かった。
将軍には「主従の固め」、有力大名にとっても将軍家との関係をより緊密とすることは家の存亡を掛けた重要課題でもあった。

＊２代秀忠時代は徳川政権の確立期で外様大名に臣下の礼を取らすことを目的に２９回、
３代家光は将軍の権威確立が成り、目的も遊興中心に代わり３００回を数えた
５代綱吉は１４８回、内訳は柳沢邸５８回、牧野邸２９回、御成りは元禄泰平の象徴でもあった

②柳沢、牧野ら側近への御成りは庭園を楽しんだ後、御殿で酒宴、夕方江戸城へ戻った。

③一方、公式ともいえる「式正御成り」は１年前に予告、迎える側はお成り門、お成り御殿を新築、庭園を整備した。将軍の出費も莫大、藩主家族、家来らに巨額の金品を下賜、供揃いは幕閣以下数千人に及んだ。
有力大名へのお成りが続き、江戸大名庭園は一斉に開花した。

④大名同士の社交場として＝大名庭園は外交、儀礼の場でもあった。諸大名は情報収拾、外交の場として互いの屋敷で交歓しあった。当然ホストは殿様が努めた。

③お庭拝見＝家臣たちが自由に庭園に出入りできたかというとそうではない。大半は生涯見ずじまい。藩によっては江戸に出張した時、特別な許可をえて「お庭拝見」が許された。

7）江戸大名庭園の終焉

①ペリー来航後の「海岸防備」で下屋敷に砲列がならぶ
嘉永６年（1853）ペリー艦隊の浦賀来航は首都玄関にあたる江戸湾がほとんど無防備であることを露呈した。ペリーが去った後、幕府は海中を埋め立て、台場を建設する。海岸部の大名下屋敷にも防備を命じたので大名庭園に大砲が持ち込まれ軍隊が駐屯した。

②安政２年（1855）の「江戸大地震」と相次ぐ「江戸大火」で甚大な被害。

③幕府権威の失墜で政治の中心地は京大坂へ移る。

＊尊皇攘夷運動の高まりとともに京都がその舞台となる。文久２年（1862）幕府は諸藩の財政救済のため「参勤交代」制度を緩和すると大名たちは次々と江戸を離れた。翌３年１４代将軍家茂が幕府首脳と幕臣団を率いて上洛、江戸はもぬけとなる。不在勝ちの藩主、庭園の管理もおろそかで荒廃は一気に進んだ。

④慶応４年（1868）江戸幕府が崩壊し明治維新を迎える。その後１５０年、首都東京の発展 .は目ざましく大名屋敷の多くが消滅していった。

当時１０００を数えたとされる江戸大名庭園の多くは現存しない。しかし、小石川後楽園や浜離宮庭園のように今日まで大切に保存されている庭園も少なくない。今回バス研修の「旧芝離宮庭園」を通じて、少しでも多くの方に大名庭園の魅力が理解していただければ幸いである。

以上

↑芝離宮大山からの眺望 富見ようと大池

小石川後楽園

浜離宮

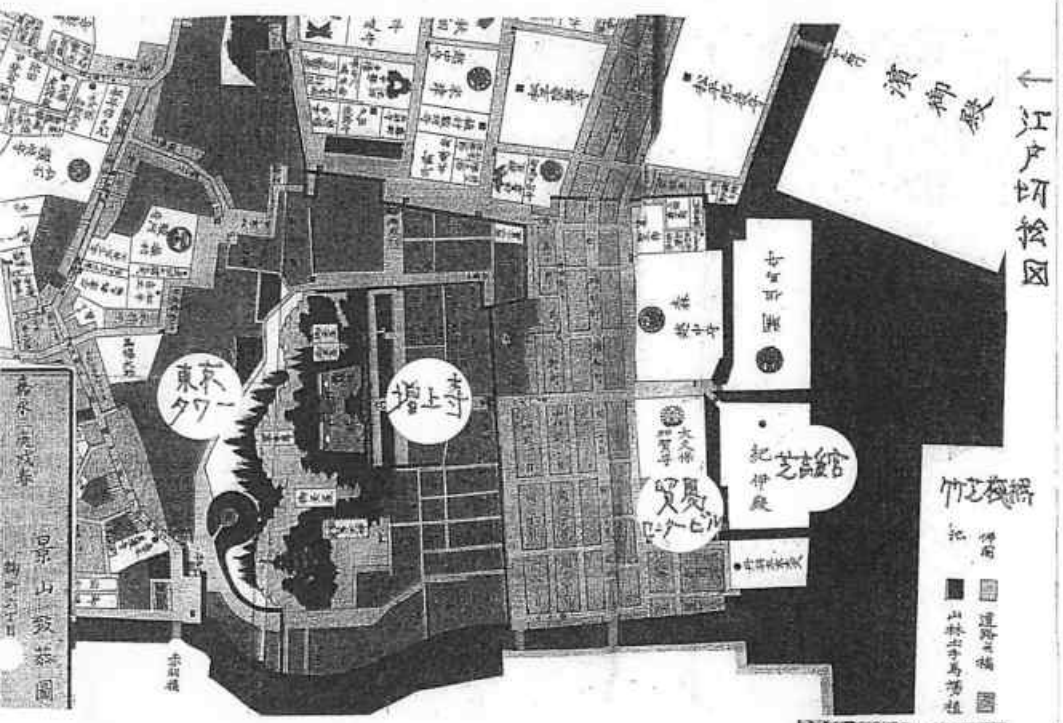
六義園

辰巳台公民館主催事業「江戸東京歴史散歩」
お江と大名庭園②　バス研修

＜主要見学先＞　芝増上寺、東京タワー、芝離宮庭園、（竹芝桟橋）

平成２３－９－１５
山岸弘明

大河ドラマ「お江」将軍家菩提寺と「江戸大名庭園」を歩く



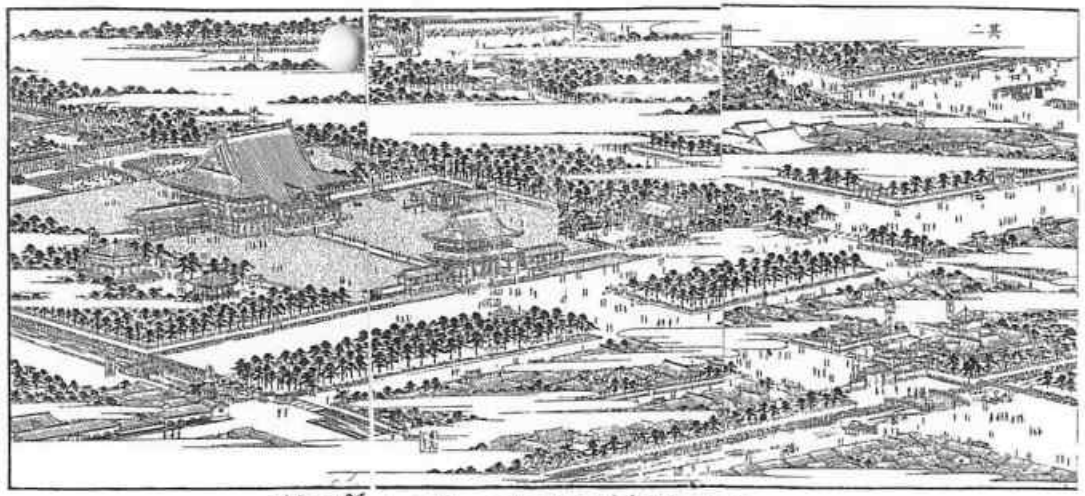
「江戸東京歴史散歩」の第２回講座はバス研修、お江ゆかりの増上寺と江戸大名庭園の芝離宮庭園を歩く。旧国宝、御霊屋を連ねた豪壮、華麗な増上寺建築群は昭和２０年の「東京大空襲」でほぼすべてを焼失した。いま跡地一帯に戦後再建された本堂と東京のシンボル・東京タワーや最新設備を誇る高層ホテルが聳える。第１幕は移り変わるビルの合間に花開く「江戸の残影」＝お江と秀忠ゆかり地を訪ねる。

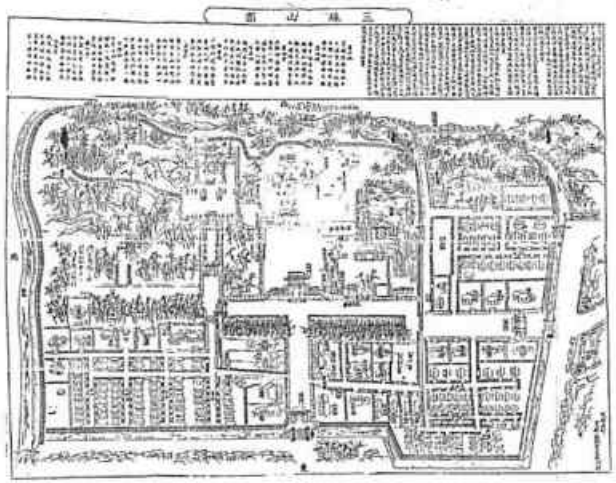
一方の芝離宮庭園には大名庭園と皇室迎賓館庭園の面影が色濃く保存されている。すぐ隣の浜離宮庭園と混同されがちの芝離宮、わずか２００ｍ四方、「箱庭」のような空間に繰り広げられる庭園文化の極致、狭さがゆえの完成度がそこにある。移り変わる池泉回遊庭園は魅力たっぷり。せっかくの機会をぜひお楽しみください。

←本宮殿正面

7 将軍が眠る増上寺、完成度誇る芝離宮

主要参考資料＝戦災等による焼失文化財・建造物編（文化庁）
増上寺　徳川将軍墓とその遺品・遺体（東京大学出版会）
大本山増上寺　徳川将軍家位牌霊位総覧（増上寺）


芝増上寺（江戸名所図会）



焼失した秀忠霊廟

芝離宮庭園

狭山不切寺には初頭門、お成門、丁字門、唐金とうろうが

焼失前の秀忠霊廟

←東京タワー

大河ドラマ「お江」と秀忠が眠る芝増上寺

1）徳川将軍家菩提寺として繁栄 —— 三縁山広度院増上寺

①浄土宗の大本山で江戸時代徳川将軍家の菩提寺として栄えた名刹。14世紀開創という。はじめ麹町にあったが、徳川家康が江戸入府にあたって菩提寺と定め、慶長３年２０万坪の寺領を寄進して現在地に移した。元和元年関東浄土宗十八壇林、本山。江戸時代を通じて特別な保護を受け寺領１万石、子院５０余りを擁して寺運も隆盛をきわめた。境内一円は旧国宝の将軍家霊廟建造群が連なったが昭和２０年５月の東京大空襲で本堂とともに焼失した。

＊現在の大堂は昭和４９年建造の鉄筋コンクリート建築

＊昭和30年代に敷地の大半を西武グループに譲渡、現在は芝プリンスホテル、ザ・プリンスパークタワー東京ホテルになっている

＊増上寺には三門、秀忠総門、黒門、北霊廟御成門、二天門、宝塔、石灯籠などごくわずかが現存

＊西武売却分は狭山不動寺に秀忠霊廟勅額門、御成門、お江丁字門、桂昌院宝塔、唐金灯籠、石灯籠などを移築現存、石灯籠は分散譲渡されたので全国各地に点在している

②寛永３年に亡くなったお江を埋葬、はじめ次男忠長が芝プリンスホテル駐車場の地に壮麗な霊廟を築くが忠長の死後、家光が秀忠霊廟近くに霊牌所を作り直した。

＊正保４年移築したお江霊廟は現在も鎌倉・建長寺仏殿として現存している

③寛永９年秀忠逝去、台徳院廟に葬られた。以後家宣以下後出６将軍の廟所となった。

＊家康と家光は日光、家綱、綱吉、吉宗、家治、家斉、家定は寛永寺、慶喜は上野谷中墓地に眠っている

2）秀忠、お江夫妻廟総門と霊廟、霊牌所跡 —— 台徳院総門周辺

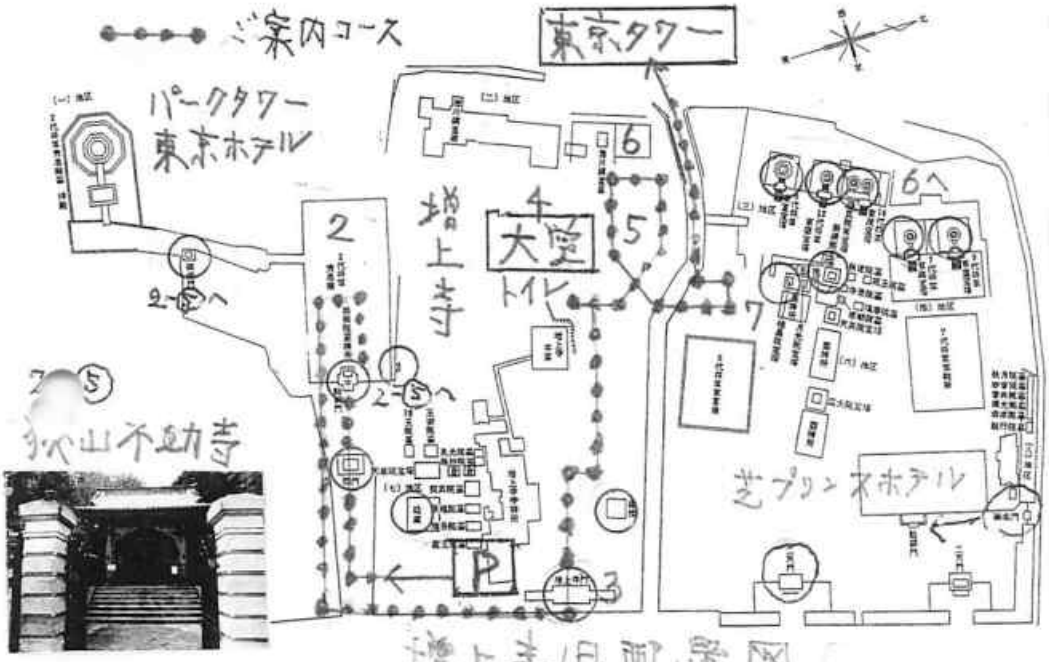
①増上寺駐車場で降車、秀忠、お江霊廟跡から最初の見学地増上寺を回る。

＊この後バスは東京タワーに回送、降車位置にはありません。ご注意ください

＊現在地確認、本堂下。トイレタイムは４５分後になります。お急ぎの方はお申し出ください

②経堂（重要文化財）＝慶長１０年建造、寛政１２年移築

屋根宝形造り、白壁土蔵造り。中に回転式経本収蔵台＝輪蔵、経典を収めている。

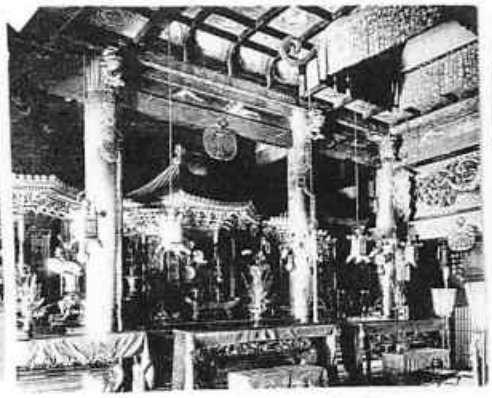


増上寺旧配置図

秀忠総門と勅額門の写真

現在の秀忠総門

焼失したお江霊廟所



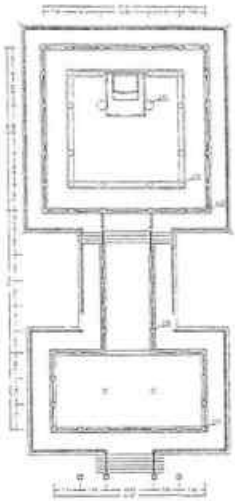
内部（中央が宮殿）

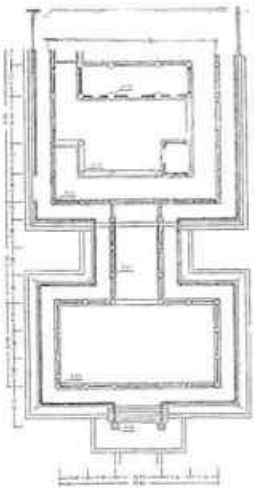
お江霊廟所跡
現況

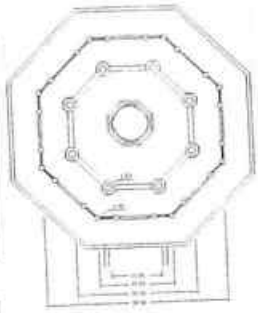
③台徳院霊廟総門（重要文化財）＝秀忠（＋お江）霊廟の正門で寛永９年家光建造、昭和２０年の空襲で勅額門、御成門、丁字門とともに焼失を免れた。
＊３間１戸８脚門、屋根は入母屋造り、正面に唐破風をもつ銅板葺き、全体を朱塗りした単純な和様建築になっている
④仁王像（区文化財、後付け）＝江戸前期、江戸の仏師制作の仁王像。元は武蔵国北足立郡（川口市）の西福寺所蔵、東京浅草寺をへて戦後当地に安置されたとされる。
＊あ形２４３cm、うん形２４７cmで力強い。
⑤総門跡、勅額門跡＝高台緑地公園はザ・プリンスパークタワー東京ホテル敷地の屋上。
総門は西武売却の時現在地へ、勅額門は狭山不動寺へ移築された。
⑥秀忠霊跡、奥の院墓所跡、お江霊牌所跡を遠望＝壮大な霊廟は参考写真、および参考図を参照されたい。
いまは昔、跡地に当時の面影を忍ぶことはできない。
＊霊廟は霊を祀る屋舎＝御霊屋、霊牌所は位牌を祀る屋舎をいう。お江の霊牌所と墓（宝塔）ははじめ北霊廟（現芝プリンスホテル）の地で、正保４年墓と分離して夫霊廟に移した
＊参考資料＝戦災等による焼失文化財・建造物編（文化庁＝五井公民館図書室所蔵）に調査報告がある（秀忠、お江建造物を車内回覧）
⑦芝公園、芝東照宮遠望
＊芝公園も元増上寺境内の一部。明治６年太政官布告にもとずき開放された都内最初の５公園の１つ。
増上寺を取り囲むように１２万㎡ある。園内に丸山古墳や旧増上寺庭園の一部など自然風致を残した閑静な公園として親しまれている。
＊芝東照宮＝東照宮（徳川家康）を祭神に元和２年創建、華麗な旧国宝は昭和戦災で焼失したが昭和４４年再建、神体の家康像は慶長６年本人が還暦の祝いに作らせた寿像で都の文化財に指定されている。境内のいちょうは寛永１６年再建した家光手植えで都の天然記念物に指定されている

３）ぼんのうを解脱する巨大三門 —— 大門も遠望
①黒門（旧方丈門＝重要文化財）＝御成門交差点一帯にあった増上寺方丈表門の移築。慶安年間家光建立。
②大門（だいもん）を遠望＝総門、表門にあたる。増上寺創建にあたり家康から当時江戸城大手門の一部を譲り受けたとされる。現在は昭和１２年再建。交通整備のため原型より大きいコンクリート製。
③三解脱門（三門＝重要文化財）＝大門に次ぐ中門だが一般に正門という。慶長１０年に創建したが１９年の台風で倒壊、元和７年秀忠が再建した。増上寺ではもっとも古い建物。三解は現世の「むさぼり、いかり、おろか」の３つの苦悩から開放されて自由の境地に達することをいう。
＊屋根入母屋造り本瓦葺き、２階建て楼門。５間３戸、高さ21m、間口19m、奥行９m。楼上は非公開、釈迦如来座像を安置している
＊同読みの山門は本来寺は山にあるものとして山号を名乗ったことでいう寺の門のこと
④大梵鐘＝延宝元年、高さ３m、１．５t。関東では最大級。江戸３大名鐘の１つ。
いまなるは芝か上野か浅草か。江戸七分ほどは聞こえる芝の鐘。木更津までも？
⑤水盤舎＝家光の３男で家宣の実父甲府宰相徳川綱豊霊廟の現存移築。

４）本尊阿弥陀如来が厚い信仰を集める —— 大殿は自由見学
①大殿（だいでん＝本堂）＝昭和２０年に焼失した本堂に代わり、昭和４９年鉄筋コンクリート再建。
尊は阿弥陀如来で両脇に善導大師と法然上人像を祀る。自由参拝。
＊阿弥陀如来像は室町時代の彫刻、作者は不詳
②トイレ小休止＝大殿下にあります


秀忠霊廟


お江霊廟所


秀忠奥の院
平面図

←三解脱門
増上寺の正門

→大殿と東京タワー

5）きょう9月15日は黒本尊の御開帳日 —— 家康ゆかりの安国殿

①黒本尊は家康が深く信仰し、その加護により度重なる災難を除け、戦の勝利を得たという霊験あらたかな阿弥陀如来像で、勝運、厄除けの仏さまとして尊崇されている。

②金箔は香煙で黒ずみ「黒本尊」という。

＊像高80cm、恵信僧都の作といわれる。家康の念持仏かどうかは不詳

③普段は秘仏＝非公開だが、たまたま本9月15日は御開帳、祈願会にあたる。せっかく機会であり全員で拝観する。

④左側に家康絵、徳川歴代将軍位牌、等身大皇女和宮像、右側に聖徳太子像を飾る。

6）秀忠とお江、家茂と皇女和宮夫妻が眠る —— 将軍家霊廟

①戦前まで、秀忠、家宣、家継の南北3霊廟に6将軍が葬られていたが昭和20年東京大空襲で焼失。昭和33年被害が少なかった甲府宰相徳川綱重霊廟に纏められた。

②鋳抜門（重要文化財）＝1枚の銅板で鋳抜いた門。規模と荘厳さを日光東照宮と並び賞されたという。

＊家宣の墓（宝塔）の中門、現存移築。左右の扉に5こずつの葵紋、両脇に昇り龍、下り龍を鋳抜く

③徳川家墓所特別公開中＝大河ドラマを記念し11月30日まで一般公開

＊記念の絵はがきはおみやげ

③徳川家歴代将軍の墓＝左列3基、手前から

＊合祀碑（石造）＝家宣、家斉、家定(最初)の正室、将軍御台所3人、徳松生母お伝など側室4人、子女多数を合祀

＊14代家茂正室和宮（青銅造）＝仁孝天皇の皇女で公武合体のため降嫁。朝幕諸事に心砕く。明治10年没、32才

＊14代家茂（石造）＝紀伊家から養子。幕末混迷期、長州征伐敗勢のなか大坂城で急死。慶応2年没

正面2基、右から

＊6代家宣（青銅造）＝家光2男綱重長男、綱吉の養子。生類哀れみの令を廃止、政治刷新はかるが在職3年で亡くなる

＊2代秀忠、お江（石造）＝家康3男。長男信康の切腹で嫡子に。幕府初政を確立。寛永9年没、54才。お江は浅井氏。寛永3年没、54才

右列3基、奥から

＊7代家継（石造）＝4才で将軍を継ぐが病弱早世。政治は停滞、不正も。正徳6年没、6才。

＊9代家重（石造）＝生来多病、言語不明瞭で大岡忠光が補佐。宝暦11年没、51才。

＊12代家慶（石造）＝化政時代を謳歌した家斉の嫡子、天保の改革に取り組む。嘉永6年没、61才。

④秀忠以外は現存移築、秀忠は木造宝塔のため焼失、お江の石造宝塔に合祀された。

初期将軍墓は青銅、家継以降石造。徳川型宝塔という。

⑤お江は御台所のため一回り小型。形式も多少異なる。石垣正面に石段があり、1段台石に高欄、円形返り花座、塔身は6角伏鉢型で正面に桟唐戸を設けている。笠は6角やや急勾配で照りむくりは少ない。

＊狭山不動寺に現存移築された綱吉生母お玉の青銅宝塔とは微妙に異なる

7）5将軍とお江の墓もあった北霊廟跡 —— 芝プリンスホテル

①北霊廟には家宣霊廟と家継霊廟があり、5将軍とお江、皇女和宮ら正室、生母らの宝塔があった。

②昭和20年ほぼ全域を焼失したが家継二天門と御成門が焼け残って駐車場に現存する。

＊現在は芝プリンスホテルとなっている。駐車場から遠望の予定だが、毎年夏にホテルのプール開設にともない交通止めとなるので省略することがある

安国殿

秀忠・お江の墓

将軍家墓所

北霊廟跡

新旧東京名所の競演、東京タワーの展望

1）地デジでスカイツリーにリレー —— 東京のシンボル・東京タワー

①高さ３３３ｍ、昭和３８年開業以来およそ５０年、東京のシンボルとして親しまれた東京タワー。関東地方１都６県のテレビ電波塔として長年活躍したが、来年５月デジタル波送信塔の役割を「東京スカイツリー」に明け渡す。

②いまなお人気の東京タワーと新名所として期待されるスカイツリー、新旧の人気スポットを見比べるのもいまならではの試みだろう。

2）大展望台からスカイツリーや東京湾を遠望 —— 東京都内を俯瞰

①増上寺から徒歩５分、微妙な上り坂を東京タワーへ。

②真下から見上げる鉄柱が圧倒する。

③１階エレベーターで高さ１５０ｍの大展望台へ。

④遠く富士山や筑波山を、眼下に新宿副都心や東京湾レインボーブリッジを。
ライバル・スカイツリーと高さを競う。３６０度の大パノラマを楽しんでください。

⑤展望台１階から下りエレベーター利用。４階降車、ゲストルームで持参の弁当を楽しむ。

3）東京タワー特別企画「江展」 —— 自由見学

①昼食後、３階の「江展」自由見学（おことわり＝展示品はセットとしてご覧ください）

＊江戸城大奥お鈴廊下お錠口＝お江がはじめた大奥制度。将軍以外男子禁制、大奥女性の総触れ
大河ドラマパネル展、映像
奥（セットの複製）、衣装
御台所居室＝書院造りの構え、床の間、違い棚、調度品
大奥出世物語、江戸図屏風

②「江展」前集合、バス乗車

大展望台

展望台へのエレベーターホール

タワーの眺望↑

バス駐車場↓

2011年（平成23年）7月24日（日曜日）

東京新聞

被災３県除き

地デジきょう完全移行

未対応なお10万世帯

東京タワー減収必至

首都情報発信基地へ

ライバル、スカイツリー

御台所居室→

↓大奥お鈴口

↓お江展

江戸大名庭園の魅力を満喫、芝離宮庭園

1）かつての東洋一ビルで降車 —— 世界貿易センタービル

①「高度経済成長」期の昭和４５年、国際貿易の総合センターとして誕生、
地上40階地下４階、高さ１５２ｍ、モノレール始発駅、高速バスターミナルなど。
当時東洋一の超高層ビル。最屋上階の展望台（有料＝利用しない）から都区内と東京湾が一望できる。
②ＪＲ浜松町駅を挟んで徒歩５分、芝離宮庭園へ移動。

2）大名庭園の魅力たっぷりの「箱庭」 —— 旧芝離宮恩賜庭園

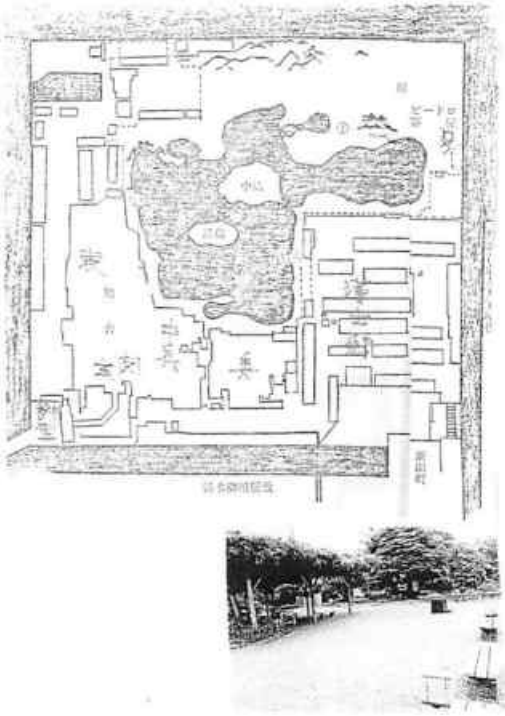
①離宮は皇居以外の宮殿＝皇室の別荘をいう。京都の桂離宮が有名。恩賜は天皇から下げ渡されること。
＊明治維新後有栖川宮邸をへて芝離宮となるが、大正１２年の関東大地震で建物と樹木の大半を焼失、翌１３年昭和天皇の御成婚記念として東京都に下賜され一般公開された
②江戸はじめは海、明暦ころ埋め立てられ、延宝６年、老中１１万石、小田原大久保忠朝上屋敷となる。
＊忠朝は小田原からお抱えの庭師を呼び寄せ「回遊式潮入り池泉庭園」を作り「楽寿園」と称した。
以後、邸地は佐倉堀田藩、御用屋敷、清水卿下屋敷、紀伊家下屋敷と変遷して明治維新となった
③敷地面積１万４千坪（43,000㎡）、３千坪の池泉を中心に小型だが大名庭園の魅力あふれる。

3）米国大統領らを迎えた明治の迎賓館 —— 藤棚は藩邸跡

①独立した城＝かつてＪＲ線から先が海、芝離宮庭園の立地を確認。
掘割と石垣、白壁塀で囲んだ。城郭と同じ造り、入り口は土橋、升形二重門
②江戸時代は藤棚の地に下屋敷藩主御殿。明治２４年取り壊して洋館の迎賓館を建築。
③明治の迎賓館跡＝米国大統領・グランド将軍ら外国の賓客を迎えた。
＊関東大震災で焼失、解説板、柱石跡がわずかに当時を偲ばせる
＊藤樹はおよそ樹齢２００年、江戸後期の２株が広がる。見ごろは春５月はじめ

4）池泉が大名庭園の中心 —— 回遊しながら景観を楽しむ

①池泉（泉水）＝大名庭園の中心に大きな泉水を据え、中島を据える。
池を巡りながら移り変わる景色を楽しみ、舟を浮かべて釣りや月見に興ずる。
＊池は中島や岩を配し、入り江や州浜を作り、樹木や花を植えて、護岸や橋に工夫を凝らす。みる角度、季節や時間、日差しや潮の干満による変化が大名庭園の魅力となる
②潮入り取水口＝かつての海水取り入れ口。潮の干満を設計、水位を調整した。
＊現在は水道水を循環利用している
③沢渡り（現在は水没）＝干潮時に石伝いに渡った。
④あずまや（簡単な休息所＝当時はなし）。さっきとは池泉の景色が一転している。
＊この先、小さな入り江と小さな出島、変化あふれる汀線が続くが今回は省略する。
⑥八ツ橋＝中島に通じる木橋を渡る。名前は八ツ橋だが二枚橋。材質や形状など同じものは作らない。
⑦蓬莱島（中島）＝園景要の島。中国に伝わる不老長寿伝説の島の移し。当時の石組みのまま現存、力づよく荒々しい仙境の迫力が溢れる。
＊大名庭園中島の代表で小石川後楽園などにもある。



離宮迎賓館跡

藩主御殿跡

海水取り入れ口

八ツ橋と蓬莱島

⑦浮島と浮石＝かつて６０cmほどに設計された潮の干満で島や岩が浮き沈みしてみえた。
引き潮の時浮石が水面に現れ沢渡りで浮島に渡った。対岸の浮灯籠は現存台座にレプリカを乗せる。
⑧西湖堤＝中国の名勝・西湖堤の移し。本物は長さ数km車も通る。小石川後楽園より大型、比較も楽しい。
泉水最大の見どころ、この角度からの西湖堤と背景の泉水が一番とするムキも多い。
＊移しは日本や中国、自らの藩領の名勝を庭内に再現することで、大名庭園に多く登場する。
⑩枯滝石組（枯山水）＝滝水や流れを地形や岩石で表現する。室町時代流行したわびさびの世界。河床が通路で通り抜けになっているのはめずらしい。
⑪謎の石柱＝茶屋（休憩所）跡。見晴らしの地に茶屋。歌を読み酒をくみ交わし時に彼女と語る。石柱は相模の戦国武将松田憲秀邸門柱を移築した。
＊泉水最奥にビードロ茶屋跡も
⑫大山（築山）＝庭内最高地、小田原大山の移し。頂上からの池泉のながめがすばらしい。入り組んだ池の形や島の配置も一望に俯瞰。
⑬飛び石歩道＝築山から州浜へ飛び石の園路を進む。忠朝が小田原から運んだ伊豆石だという。
⑭洲浜と護岸＝ほどなく玉栗石を敷きしめた州浜に出る。中島の荒あらしい自然石、砂浜、丸太の乱杭など州浜と護岸の変化も見逃せない。
⑮雪見灯籠＝芝離宮のシンボル。敷きつめた玉石と対岸の築山を背景に園内最大の人気スポット。石灯籠の形もすばらしい。
⑯池泉の反対側半周には大島、鯛橋、根府川山、ビードロ茶屋跡などがあるが本日は見学しない。

元気組は竹芝桟橋の一大ロケーションへ

１）元気すぎる有志はさらに竹芝桟橋まで歩く ―― 残留もＯＫです

①時間あれば（なければ中止）有志で竹芝乗船ターミナルへ足をのばす。
希望しない方は時間まで芝離宮をごゆっくり堪能ください。
＊芝離宮庭園から５００ｍ徒歩７から１０分
＊東海汽船＝東京と伊豆諸島を結ぶ航路を運航する明治２２年設立の船舶会社
竹芝乗船ターミナル＝東海汽船の発着港
＊大島までジェット船１時間４５分８５９０円、夜行客船６時間５７６０円。納涼ビール船２５００円
＊サルビア丸＝１０５０ｔ、乗客２０００人。ほかにカメリア丸など

２）レインボーブリッジやお台場を望む ―― 東京、隠れた新名所

①乗船ターミナル
中央広場、臨海広場（中央ゾーン、ノースゾーン、サウスゾーン）
②大型船の出入港あるか？　レインボーブリッジやお台場を遠望
好天なら、潮風が心地よい、大満足のロケーション
③芝離宮庭園残留組と合流、バスで一路辰巳公民館めざす。

以上

大山から俯かん

乗船ターミナル

中央広場

雪見灯籠と玉石

竹芝桟橋の景観

レインボブリッジとお台場

平成23年度　いきいき八幡塾バス研修

大野丈助の足跡を訪ねて

日時　9月30日（金）　8:40～16：30（予定）　小雨決行

講師　佐倉　東雄　先生（郷土史家）

日程　8：40　八幡公民館　集合

8：50　八幡公民館　出発＝＝＝＝＝西願寺（平蔵）＝＝＝＝＝

たけゆらの里おおたき（道の駅）＝＝＝いすみ市郷土博物館＝＝

＝＝＝大野丈助生家跡＝＝＝＝＝御宿・月の沙漠記念館（昼食）

＝＝＝＝＝大野丈助屋敷跡＝＝＝＝＝道の駅ながら＝＝＝＝＝

16：30頃　八幡公民館　着

費用　300円（月の沙漠記念館　入場料・団体券適用）

持ち物　・資料　・筆記用具　・弁当　・飲み物　ほか

その他　＊月の沙漠記念館にはレストラン等の併設はありません。持ち込みの昼食を2階空きスペースでいただきます。場所借用にあたっては、月の沙漠記念館のご厚意に負うところが大きいことを念頭に、スペースをきれいに使うようお願いします。

＊やむを得ずバス研に参加できなくなった場合は、早めに連絡をお願いいたします。　八幡公民館　41－1984　担当　田口、清水

房総東線を敷いた大野丈助を語る

八幡公民館主催　平成二十三年八月二十四日

話　佐倉東雄

大野丈助と房総東線（ＪＲ外房線）を話す前に、今日の外房線の歴史的ガイドを簡単に記しておく。

・私鉄の房総鉄道により、明治２９年１月２０日に蘇我～大網間が開業したのが始まりである。

・明治３０年２月には、蘇我～千葉間が開通した。

・明治３２年までに大原まで開業。

・明治４０年９月１日に国有化される。（「鉄道国有法」は、明治３９年３月公布）

・昭和４年４月１５日、上総興津～安房鴨川間が開業し、併せて千葉～大原～安房鴨川間の房総線は房総東線と改称

・昭和４７年７月１５日に全線の電化が完成。線名を外房線と改称した。

序でであるから現在のＪＲ内房線の話も同様に歩みを記しておこう。

・明治４５年３月２８日、木更津線として蘇我～姉ケ崎間が開業。

・大正１年８月２１日には木更津まで開通。

・木更津～安房北条（現・館山）間は北条線として建設される。

・大正８年５月２４日に蘇我～安房北条間が全通した。

・現在の内房線である蘇我～安房鴨川間が全通したのは大正１４年７月１１日で、昭和４年に房総西線と改称。

・昭和４３年、千葉～木更津間の電化が完成し、さらに昭和４６年には全線が電化した。また、昭和４５には君津までの複線化が行われている

・昭和４７年７月１５日に内房線と改称。

・昭和６２年４月１日、日本国有鉄道は分割・民営化という新しい経営形態に移行。ＪＲ（ＪａＰａｎＲａｉｌＷａＹ）言う名称で呼ばれるようになる。

大野丈助とは、如何なる人物であるか、右なる本から全てを書き写し、それを読んで戴いたほうが、一番よろしいかと思う。また、手元に残るのであるから。

『房総人名辞書』・原本　明治42年10月23日発行

・昭和62年2月28日発行
・編者　千葉毎日新聞社　・発行所　株式会社国書刊行会

※旧漢字は新漢字に、文語文字は口語に書き替えた。

◎おおのじょうすけ（大野丈助）

夷隅郡東海村釈迦谷の人、成功したる実業家なり、嘉永元年五月十三日生れ、父は大野留蔵、夙に実業に志して大望を懐く、時の千葉県知事船越衛其非凡の才能と、精力とを認めて殊遇を興う、明治二十四五年の頃初めて元総武鉄道千葉稲毛間の線路敷設工事を請負いて成功したり、是れぞ大野組に於ける請負事業の第一着手にして該事業の未だ幼稚なりし当時として早くも大事業家を以て称せられたり、次で房総鉄道線路の大工事に当たりても其一部を請負いて之れを完成し名声漸く薯われ、房総二州に亘りて配下数百名を有志同業間に彪然たる大勢力をなすに至れり、然かも其営業の方針極めて着実にして曾つて軽擧粗暴に渉らざりし為信用は時と共に加わりて公私の間に好評を博せり、而して房総鉄道開通以後社業萎微として振わず収入予期に反して経営刻々困難に陥り其一宮以南の延長線工事に着手せんこと思いもよらず株主中一時解散説をさえ唱道するに至りしが、此くては折角発達の気運に向かいつゝある地方の不幸のみらず沿道各町村に於ける産業上の影響亦た不尠、如何にしても予定通り延長線の工事を延長して、一は会社及び株主の為に計り、一は同地方開発の為に図らんと決心し重役と熱議の結果自己の増資負担七万五千を支出し直に工事に着手し之を竣成せしめたり、即ち同鉄道一宮大原間の延長線施設に就きては其功績実に没すべからざるものあり、次で同三十五年同会社の経営愈よ困難となり社業の運命殆ど其窮極に達せしが前々来の行懸上座視するに不忍、直ちに安田善次郎に謀りて其後援を受け自ら房総鉄道会社の専務取締役となり爾来寝食を忘れて拮居経営を怠らず各般の経営を節減し、冗員を淘汰し社業と共に倒れて後ち止むの大決心を以て内部の整理を断行せしかば爾来着々整理の功を奏し瀕死の同会社をして国有前に於ては優に毎季五六朱の配当を見るに至りしが明治四十年鉄道国有の実行せらるゝに及び社業を政府に引継てよく社運の

最後を全うせり、極めて精力主義の人にして常に自己の目的に向って邁進し其素志を貫徹せざれば止まず、会社勤務中の如きも常に下級社員と伍して事務を取り衆と苦楽を共にして能く其の整理を遂げたり、同会社の株式中大半は其所有にかゝるを以て従つて政府交付金の大半は其資産の中に入るものにして其富力今や県下に屈指を以て知らる、義侠にして従来其扶助を受けたる者多く又公私事業に対し寄付義損等を為したる為め賞を受けたること枚挙に遑あらず極めて熱心なる法華経信者なり、長男は秋太郎（三十一歳）五年以前実業研究の為め洋行して今英国倫敦に在り、柔道の達人なり、次男は清次郎、郷里吉野家に嗣たり

今一つ、大野丈助が事業を起こしたものに「房総白土商会」がある。これは、血縁者が昭和四十三年までやっていた。これも次の資料から書き写してみる。

『夷隅郡誌』・発行日　大正十二年五月三十日
・発行者　夷隅郡役所

白　土

灰白色の疑灰質細砂にして層をなし前記青岩の間に介在す、俗に磨砂又は房州砂と称し琢磨用精米麦用に供せられ、質稍不良なるものは製壜の原料とす、本郡内各地にその産出を見るも、質極めて不良にして使用に堪えさるもの多し、唯長者町三門付近に産するものは其質優良なるを以て、明治三十六年採掘開始以来次第にその産額を増加し、現在の房総白土商会の手に経営せらるゝに至り一層盛況を呈し、その販路は関東の各方面に及ぶに至れり。尚他に小規模ながら個人経営に係るもの二三箇所あり、鉄道房総線三門駅は、実は白土運搬のため建設せられたものなりという、今左に白土商会事業の一端を知るさん。

明治三十六年本郡東海村の人大野丈助氏、三門産の白土の優良なるを発見し、之が採掘を創めしが、氏は旧房総鉄道株式会社の一人たる縁故により、其の事業を同会社に移し、現時の三門停車場を建設して其の運搬の便に供せり、後房総鉄道の国有化となるや、房総白土商会を成立するありてその事業を継続し、益々経営の歩を進めて其産額を増加し、大正八年の如き、採掘高七百八十五坪余価格五万五千円の多きに上り、大正元年以降同八年に至る、採掘高は四千百六十四坪余に達すという、而して白土は、層の中間にあるものゝ品質良好にして精米麦用とし、其販路は関東の各地、北は茨城県助川より南は静岡県焼津に至る、層の上下青岩に接する部分は、質稍

不良にして製壜用とし、主として東京製壜株式会社、深川製壜株式会社、深川帝国硝子工業株式会社に販売せら
る、採掘の方法は白土層を追いて山麓より横穴を穿ち、鶴嘴及鉄掛矢を以て層を崩し、停車場まで約十五町の間
トロッコにて運搬し、精米麦用のものは、石油発動機及び人力によりて砕粉し、製壜用のものは発掘の儘にて販
売す、現今採掘運送砕粉に従事する職工及人夫は、男三十人、女十五人を算すという。

大野丈助の道路、鉄道土木及び白土事業のおおよそは、知りえたと思うが、これだけでは少し足らないので、身辺の事を少し書いていこう。生まれは嘉永元年、今年からしてみると163年前の生まれである。この年に佐久間象が初めて洋式野戦砲を鋳造している。又、外国船がひんぱんに日本の海岸近くに姿を現わしている。滝沢馬琴が没す（椿説弓張月等読本の著者）。

さて、大野丈助生い立ちから没年まで触れる。重複する箇所が多々あります。

・出生地　夷隅郡釈迦谷村（大原町から、現いすみ市）　・父　留蔵（四十九歳で他界）※丈助六歳　母　とみ
・父　留蔵（四十九歳で逝去）　※丈助六歳　・母　とみ　・姉が二人　・生家の職業　小作百姓
・丈助は幼名を若太郎といった。・実家の職業　小作百姓
・没年　昭和七年七月二十七日　享年八十五歳。　・墓地　現いすみ市日在共同墓地

○隣の布施村大名主三上家（先祖は武門）に十二歳にして年季奉公に出る。
○主人忠左衛門は、東京に出て勉学、新しい土地測量の基礎技術を学び、地元大原漁港開発の推進計画に参与する。子供の貞次郎も東京に出て俳句を学び、一流の俳人を以て知られた。
○丈助は忠左衛門の助手として付き添い、自らの感をも以て事業の学問的基礎を習得した。
○年季奉公を終えた若年の丈助が初めて手がけた隧道工事は、地元の釈迦谷から上寺（旧布施）へ抜けるトンネル工事であるが、測量の機器が無く、目測と徒測の推量で完成させたという。そのトンネルは今でも歩きなどの道として使われており、野隧道とも呼ばれている。
○鉄道工事が全て終わった後、地元から要望が在り、現在は県道勝浦・布施・大原線を良い道路になっているが、明治にあっては、トンネルを作り（寄瀬隧道）、切り通

しとしたりした。道路は生活の源である。

○次の仕事は、明治二十七年七月二十日に開通した総武線の市川～佐倉間の中の稲毛付近の工事を請け負った。請負工事の態度は慎重にして誠実であり、その上、人夫使用の配慮は懇切穏健にして入念、率先工事の模範を示して行動。このことが、船越県令（県知事）に認められ、その後、それに続く鉄道工事はすべて船越県令の絶大なる信頼を受けるに至る。

○続いて蘇我～大網間の十八・五キロメートルを請負い、無事完了させた。この工事は土気トンネルが至難と言われていたが、測量はすべて自分の目と足で検測・推進させた。後年、フランス人技師の設計した図面上の測量と一致し、関係者を驚かせたともいう。

○房総線の大網からの路線であるが、大野丈助は心積りがあった。大網～茂原～長南を経て城下町の大多喜を通り大原を終点と考えていたようだ。

○しかし、長南を経て大多喜を通り大原に向かう路線については、多々問題が生じ、丈助の考えは徒労に終り、九里浜に沿う形で大原まで敷くこととなった。

○大野組に工事を発注した会社が潰れてしまったので、大野丈助は、その会社を買い取った。房総線の社長と工事を受け持つ社長を兼務する形となった。

○房総鉄道社長就任後の大野丈助は、経営の信念を強く持ち、駅員達に要望した口癖は、

1 駅の周辺は明るくするが、無だな灯は消せ。

2 時間を厳守せよ。汽車の精確な運行を地元民の時計にしろ。

3 枕木根性で働け。枕木は汽車を走らせ、汽車は客を乗せて走る。

4 余裕を持って心を配れ、心の弛みが事故のもと。

5 乗客には親切な言葉を使え（東京から客が来る、乗降客を大切にせよ）

6 鉄道に努めたら鉄道の枕木になったつもりで働け。

○経費の節約、時間の精確、サービスの向上など不変の信念とする行動は、町村民の信頼を高めたものの、当初の方針は貨物列車であっので、それほど貨物の積載量は伸びず、乗客の利用も国鉄に変わったからといって、多くはならなかった。

○大野丈助は、乗客の伸びも多く望めないことを深く憂い、郷土の風光明媚、健康保養地の宣伝を積極的に展開した。

○丈助が白土商会を設立した当時の大政治家大熊重信（後の内閣総理大臣）、実業家安田善次郎、実業家であり鉄道王の根津嘉一郎らが大野丈助の考えに賛同・協力してくれた。

○丈助の企画が実り、東都からの名士の来泊・その人達の住居や別荘の建設、地元としては、幾つもの旅館を用意した。

○大原や日在に関係した文化人や学者、またその人達が建てた別荘の名などを挙げてみる。皆さんは驚くに違いない。明治、大正、昭和にかけて、いかほどの知名人が来ていたか。大野丈助なくして、生まれなかったのである。

岩田　新　法律学者、東大法学部卒、民法学の権威。現在のいすみ市岬町榎澤に住み、没する。

有坂　成章　陸軍中将。日本陸軍有坂式速射砲を発明。大正四年長者の別荘にて永眠。

大野　丈助　夷隅郡釈迦谷生れ。若くして大野組を作り、道路工事を始める。鉄道工事も行な

賀古　鶴所　岬町江場土に「望洋閣」を建設。重要な人物が頻繁に泊まられたらしい。本人自らも折々に泊まったという。千葉に家があり、日在に家があり、大変だったいう。医学博士、東大医科卒、わが国の耳鼻咽喉科医学の創始者。江場土（現いすみ市岬町江場土）に別荘を持つ。森鴎外と深交があり、昭和六年歿。現浜松市の生れ。

桑田　熊三　経済学者、東大卒、中央大学教授。

古在　由直　農学博士、東大農学部卒、東大総長、子孫の来泊も多かった。

下山淳一郎　一時、住むこともあったが、別荘の名は「望洋閣」で、この別荘は立派なもので大野丈助が建てた。古在東大総長が長く泊まった時などは、大野丈助も寝泊まりをした。薬学博士、東大医科製薬科卒、東大教授、日本薬剤師会・日本薬学会創設。大野丈助の別荘「望洋閣」に住む。

船越　衛　大野丈助の孫に節郎という人がおり、東大薬学科卒、薬学博士、財団法人薬学研究会理事、日本薬剤会理事などの役を務め、山下淳一郎の継学と言われた。野丈助と「杵臼の交わり」を結び、丈助終生の支援者。千葉県令（知事）、男爵、貴族院議員。大野丈助と「杵臼の交わり」を結び、丈助終生の支援者。

梅谷　庄吉　長崎県生れ。別荘は長者町（現岬町）江場土。中国革命の父孫文や蒋介石らの密会・宿泊の場所となった。また、柳原白蓮が九州の炭鉱王伊藤伝右衛門と離別、東大出の若い宮崎龍助と結婚し、隠れ住んだ所としても有名。現在、記念碑がある。庄吉は晩年三門駅にて不慮の死にあう。兎も角、梅谷庄吉の別荘は歴史に刻まれている。

※庄吉は、貧しい家に生れ、炭鉱王となる。衆議院議員。五十二歳の時、二十七歳の柳原前光男爵の次女（号・白蓮・歌人）と三度目の結婚をする。

○次は主な別荘を見てみよう。

吉野別荘　吉野東武鉄道社長が建てた。地元大原の出身。

藤井別荘　タカジャスターゼ発見者である高峰譲吉の弟

御陣屋別荘　大多喜城主陣屋跡。現在は出水保育所。
高橋別荘　元九州帝大教授。
鴎外荘　森林太郎（鴎外・ペンネーム）が日在村に建てた。ここで『妄想』を執筆。現在、鴎外が使用した井戸が残されている。三男の類氏が新しい別荘を建てらているが、たまにも来ている様子はない、草茫々なり。

野間別荘　講談社主野間清治の別荘。講談社を起こす。
高橋別荘　元九州帝大教授。横綱審議会委員長高橋義孝居住。
鈴木別荘　出版社主が建てられた。

○最後に旅館を挙げ、文芸関係の者のがいずれの旅館に泊まったか記してみよう。

竹屋旅館　大原駅前、木造二階建
・黒田清輝（洋画家）　一カ月滞在、絵を描き、滞在記を残す。

竹久夢二　明治四十年六月、読売新聞記者として、往来二十二間。

東海楼　塩田浦海岸
地引き網関係内外の業者で賑わう。浅井忠名作『砂丘』の近接地。現存しており、民家となっている。

旭洋館　大原小浜漁港傍ら　木造三階建
新婚早々の若山牧水が一人で来泊。漁師街女中の露骨な応対に恐縮、翌日旅館を変更したい旨の書簡をしたためている。

帆万千館（ほまちかん）　小浜八幡神社脇
・有島生馬　大正八年来泊、『嘘の果』を執筆。（有島武郎の弟）
・若山牧水夫妻　大正六年と八年と二回来館。旧旅館跡傍らに歌碑が建立されている。

翠松館　塩田川べり（明治三十年から昭和五十七年）
・山本有三　昭和九年の夏に滞在。『真実一路』の執筆にいそしんだ。碑が建立されている。
・中谷健次　『大原三題』『房総の人』昭和十二年刊行。

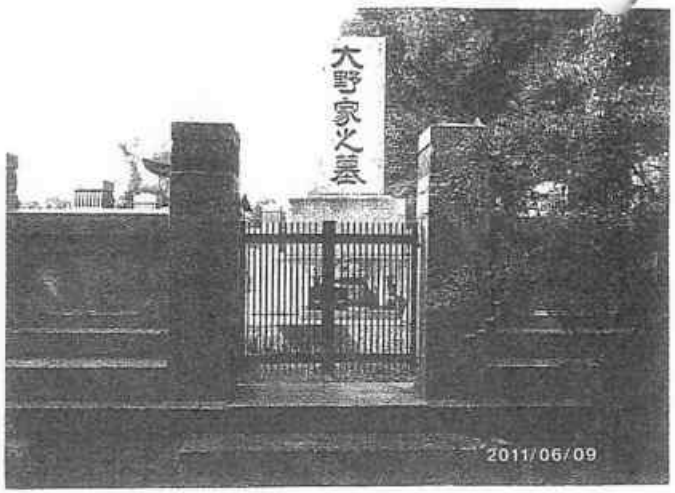
これをもって大野丈助の話も終わりに近づいた。別荘や旅館などの事柄は、丈助に関係ないと思われるかも知れませんが、誘致の発端は丈助にあったのです。

丈助は多くの方と事業の上で、生活上の上で、人生の上で欠かせない五人の名を書き留めておく。

1 船越　衛男爵　元千葉県令。大野丈助支援の第一人者。「杵臼の交わり」の関係。
2 安田　善次郎　鉄道への投資、大野への最大支援者。房総鉄道の大株主。
3 大隈　重信　総理大臣。大野丈助激励のため丈助の自宅を訪問された政界の巨頭。
4 根津　嘉一郎　安田善次郎と並び当時の財政家。房総鉄道の先進大株主。
5 清水　次郎長　政界の黒幕。国鉄買上げ運動に積極的に協力。

※私は、清水次郎長が丈助に「房総も駿河（次郎長の出身地）も温暖で似たような所がありますね」と言われたことを知っている方から聞いている。

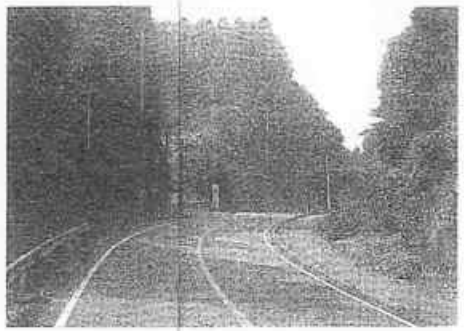
大野丈助翁



大野家の墓

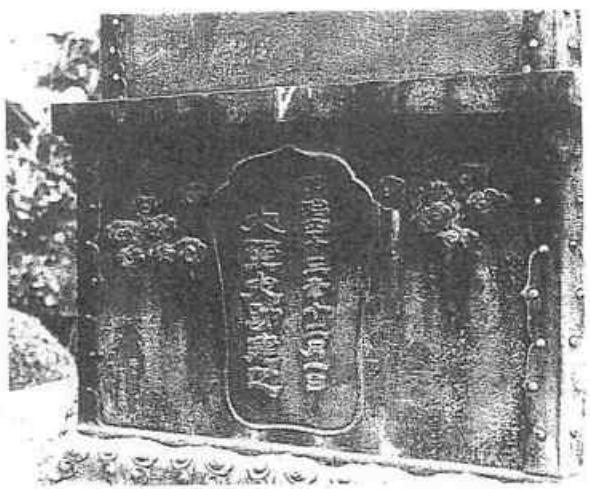
新　道②　（県道勝浦布施大原線）

寄瀬隧道跡からシルバーガーデンを経て下る道。大野道と交差する。



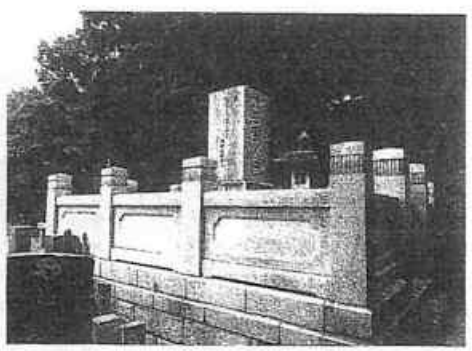
最後の道路工事となった現在の県道勝浦布施大原線

元大野丈助邸の住居及び庭の一部



明治四十三年十二月一日建立・発注先は京都

大野丈助建立の観音様
現在、千葉市若葉区桜木の海蔵寺にある



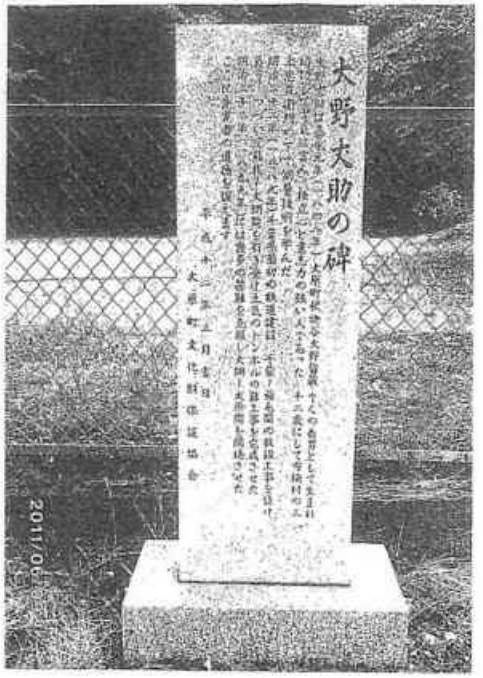
大野家の墓・大正十二年五月三十一日　大野丈助建立

大野丈助が起こした「合資会社房総白土商会」

丈助翁の第一のトンネル

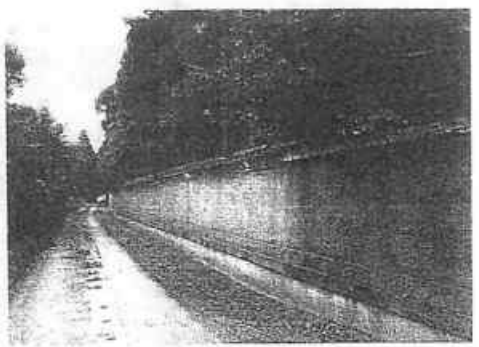
大野隧道、下布施から大寺に通ずる第一番目に施工した隧道

大野丈助初めてのトンネル工事



大野丈助の碑

元大野丈助邸の正門



元大野丈助邸の石塀

白土をトロッコで三門駅に運送しているところ